
行け行け進め！ 歴史バカ！

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行け行け進め！ 歴史バカ！

【Nコード】

N8406P

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

「皆さん、歴史バカになりませんか？」——歴史バカを自認する筆者による、歴史に関するあれこれエッセイ。今回は全然小説アドバイス系の話をしないよ！ 注意してね！ そして、無駄に熱いよ！ やけどに注意！

毎週土曜日に更新。断りなく日時変更の可能性があります。

1、「。。。バカのススめ、そして進め。。。バカ！」

どうもー。独行道アマチュア戯作者の谷津矢車と申しますー。この度は、筆者のエッセイである、「行け行け進め！ 歴史バカ！」にご興味を持って頂き、誠にありがとうございます。

ところで突然ですが、昨年の筆者のエッセイ、「歴史・時代小説家になるうー」からここにいらっしやった方って、どれほどいらっしやるんでしょうか？ いえね、筆者も他人様のエッセイを拝読するのがシユミなもので、結構気に入った作者様のエッセイだったら続編も読んじゃうですよー。けれど、もしそういう方がいらっしやるとがっかりさせてしまいますので、先に釘を刺しておきます。今回のエッセイは、前回のエッセイとだいぶ趣が異なります。

前回エッセイ「歴史・時代小説家になるうー」は、歴史・時代小説の啓蒙という、きわめて下世話かつ実用を目指した（割にはお茶飲み話が多かった）エッセイでした。なので、出来るだけ公平性を期した作りを心がけましたし、私見が多いに入ってしまうチャプターではわざわざ【私見】タグをくつつけたりしていました。仮にも歴史・時代小説の書き方のヒントを差上げるといふ（ひどく恥知らずな）エッセイだったがために、ある程度の一般性を持たせていたんです。

繰り返します。今回のエッセイは、だいぶ趣が異なります。

そもそもですね、このエッセイで筆者が何をしたいのかといえますと。

一人でも多く歴史バカを作りたいんですよ。

では、ここでいう「歴史バカ」って何なのか。その辺りを説明させて頂きます。

いや、「歴史」って、興味がある方にはすごく支持を受けている

学問ですが、興味ない方からは毛嫌いされている学問でもあります。よく聞くのが、

「年号を覚えて何が楽しいの？」

うーん。歴史ファンとしては、そこはあんまり面白くないんだけどなあ、と首をかしげてしまふんですが、まあ確かに歴史好きの友人と会話するときにはバンバン年号が飛び交います。きつとそれを見て、歴史に興味のない方はガクガクブルブルしてしまふのではないかなあ、と反省があります。

確かに年号をバンバン飛び交わせて話をするのも歴史ファンの楽しみです。ただ、歴史ファンが本当に楽しいと思っているのは年号のぶつけ合いなんかじゃありません。年号というのは、あくまで歴史という流れと人物・事実を繋ぎとめておくための重石、マイルストーンに過ぎないんです。実は、年号の裏には人間の葛藤があり、社会の動きがあり、現在と変わらない時代の息遣いがあるんです。歴史ファンはその辺りを心得ているので、年号だけでもその裏にあるものを味わうことが出来るんですよ。

で、“その裏にあるもの”。

これが、非常においしいものなんです。

そこには人間ドラマがあり、新しい時代への息吹があるんです。年号の裏にある人間ドラマを見てみると、良質な小説を読んだような気分になります。

実は歴史ファンという人たちは、どういう形にせよ、歴史の裏に“物語”を感じ取って楽しめる人たちなんですよ。最近の歴女なる人々もそうです。某ゲームの影響で生まれてきたとされる彼女たちは、実在する戦国武将たちを美男子化、あるいは理想の男性像を投影することで歴史を楽しんでいます。いや、これだつて立派な歴史受容の在り方です。厳密な歴史が好きという方もいれば、そうやって幻想が混じった歴史が好きという方もいらっしやいます。そして他人様に迷惑をかけない限りにおいては、どんな嗜好を持とうが認められるものです。（念のため言っておきますが、筆者、歴女が嫌

いなわけじゃありませんし、厳密な歴史が好きな方を批判しているわけでもありません！ どっちでもいいじゃん面白ければ、というのが筆者のスタンスです！）

そう、歴史って面白いんです！

歴史って存外に面白い。

歴史って堅苦しいかと思ってたけど、結局は現代人と同じところがあるんだね。

そんなご意見を頂くことが出来たら、このエッセイは成功です。そうやって面白さを知って頂ければ、今度は一人で歴史を楽しむことが出来ます。そうして最後には筆者と同じような「歴史バカ」になっていきます。

いや、「バカ」っていうのは悪いことじゃありません。平井堅さんは「歌バカ」というアルバムを出してますけど、あのタイトルの裏にあるのは、「歌が好きで好きでたまらない」という歌手・平井堅の心からの叫びなのでしょう。それに、かつての日本の高度経済成長を支えたのは、「仕事バカ」や「技術バカ」たちです。さらに、2010年に帰還した人工衛星・はやぶさを支えたのは、まさに「宇宙バカ」な技術者さんたちでした。

バカと呼ばれる人たちは、常に新たな地平を切り開くのです。

まあ、「歴史バカ」と呼ばれる人々が世に何を為すかと言われますと沈黙せざるを得ませんが（こう言っちゃなんですが、歴史バカはあまり生産的な人種ではありません）、バカであることはいいことなんです。

つまりこのエッセイは、筆者が皆様にお送りする、招待状なんです。

“さあ皆さま、歴史バカになりませんか？”

P・S・

ただし、筆者も得意な時代と不得手な時代があるので、話題がだ
いぶ偏るんじゃないかと思えます。その辺りは申し訳ありませんが
ご寛恕下さい。

2、「現代に息づく魔法」

前回、このエッセイのコンセプトをご説明させて頂いたんですが、読者様からすれば今一つ要領がつかめなかったと思うんですね。

「歴史バカ」っていうけど、具体的にどういうこと？」と。もしかすると、「やっぱり年号をバカみたいに覚えたり、素人にはわからないような専門知識を駆使する人たちのことを“歴史バカ”と言っくんじゃあるまいな」とお疑いの向きもあるんじゃないかなあと思うわけです。

それは誤解です。

歴史バカっていうのは、結局のところ、歴史に関するトピックスを楽しめる人たちのことです。

今回は、その辺りを明らかにする意味で、割とライトなお話をさせて頂きたいと思います。

「あーした天気になーあれ！」

そう叫んで、履物を空に向かって飛ばした経験、日本人なら殆どの方に経験があるうかと思います。そう、下駄の天気占いです。筆者もよくやったものです。ちなみに筆者の地方ですと、ブランコに乗りながらやるのが決まりでした。……というのはさておいて。

ところで、この下駄占い、古代から日本に伝わる魔術だということをご存知でしょうか。

古代日本にある魔術に、“うけい”というものがあります。“誓約”と書き習わす通り、神と契約して物事の成否を占う魔法です。具体的には、表裏一体に変化するもの（たとえるならコイントスのように、表と裏があるようなもの）を用意して、「もしもAならば○○になる、逆にもしBならば××になる」と神の前で宣言し、その結果によって物事の成否を決めるものです。これ、記紀なんかにも記載がある（アマテラスとスサノオの姉弟喧嘩の解決に使って

る記載があります）由緒正しい魔法です。

さて、これと下駄占いに何の関係が？

いえいえ、よくよく見比べると、まったく同じことをしているんです。

履物を遠くに放って表が出るか裏が出るかを見る下駄占いの背後には、「もし表が出たら明日は晴れるが、もし裏が出たら雨になる」という前提条件があります。そして、「あーした天気になーあれ！」と蹴りやって、明日の天気を占うわけです。ただ、下駄占いの場合、前提条件に関しては自明のことなのであえて言挙げはしていませんが、その手続きの踏み方は、まさに古代日本で使われていた魔法、「うけい」そのものなんです。

実は、日本には未だに記紀時代の魔法が色濃く残っています。

たとえば皆さん、神社に行かれた際、柏手かしわでを打ちますよね。あれだって、悪しきものを払うための魔術なんです。手を打つということに限らず、「音を放つ」というのは目に見えぬものに対して効果があると信じられていた名残です。なお、飲み会なんかで行なわれる“手締め”というヤツも、実はその場におわします目に見えぬもの（具体的には神様）への合図なんです。

あと、未だに残っている魔法として著名なものに、“国見”があります。

これ、“出雲国風土記”なんかによく記載があります。時折こんな記載があります。「スサノオミコトがこの地方で一番高い山に登り、辺りを見渡した」。現代人が見るとつい読み飛ばしてしまうような記述ですが、あれにはしっかりとした意味があります。

古代人にとって、「視線」も一つの魔法でした。「見ること」「所有すること」とされていたんですね。現代人的な考え方だとなんだかジャイアニズムを惹起させるようなお話ですが、古代人はそう捉えていました。事実、平安時代の貴族女性たちは男性たちの視線から身を隠すように、御簾の奥に隠れていました。ですので、“

顔を合わす”ということはつまりお互いを所有し合う↓結婚につながったわけです。

国見というのは視線の魔法を国相手にやっているものだと思ってください。つまり、当時の権力者たちは国を一望できる山に登り、その地方全てを見渡すことにより、（魔術的に）支配下に置いたと見なしたわけです。

さて、この国見を、わずか六十年ほど前に行なった方がいます。ずばり、昭和天皇です。

戦後間もなく、昭和天皇は人間宣言という宣言を発して全国を回りました。「ごめん、私、神様だと言ってましたけど、実は人間でした！（意識・むしろ超訳）」と触れ回ったとされる人間宣言ですが、古代魔術的な観点から仔細に見つめると、別の様相を呈してきます。

この人間宣言に併せ、昭和天皇は全国様々な地域に行幸しています。それこそ、日本津々浦々を。もちろん当時アメリカの軍政下にあった沖縄などには行幸していませんが、戦後間もなくここまで、と言いたくなるほどに全国を回っています。

何が言いたいのかというと、この人間宣言にかこつけて、昭和天皇は国見をなさっておいでだったのではないかということです。連合国によって占領された日本を見て回ること、日本における呪術的な統治権を再確認したのでは、とも取れるんです。

人間宣言の文言そのものはGHQ主導だったとされています。天皇から神性を奪うことにより、戦争責任を回避させる意図があったようです。それ以上に、天皇主権の根拠の一つであった神性否定をすることで、日本に民主主義への道を開かせようとする意図の方が大きかったでしょうか。そんな現代的な意義の元で行なわれた人間宣言の裏に、古代魔術的な匂いを感じる。しかも、人間宣言の意義とはむしろ正反対な意図が仄見えるわけです。

（補足。これ、何も昭和天皇に限ったことではありません。今上の天皇陛下や皇太子殿下だって、よく視察や訪問をなさっておいでで

す。特に、大きな災害の後の現地訪問はよくなさっておいでです。古代呪術的な観点からすると、天皇陛下は現在でも国見をしていると取ることが出来ます。ちなみに今上の天皇陛下は、宮中祭祀に熱心であらせられることです。）

未だに、魔法は日本に息づいているんです。

しかも、我々の生活するすぐ横に。

記紀の時代というともうずいぶん昔のように思えますが、何のことはない。実はすぐ横に存在し、ときどき現代的な生活の中に生きている我々に干渉しています。

それに気付く瞬間、なんとなく足元が揺らいだような気がしませんか？

歴史バカというのは、こういうトピックスに食いつく人たちのことなんです。

3、「地名に見る歴史的トピックス」

「歴史」にあまりお詳しくない方は、歴史をはるか遠くのものだ
とお考えの節があるかと思います。

まあ確かに、縄文人が狩りをしていたたの弥生人が稲作を展開し
ていたたのなんていうのははるかに遠いことのように思えます。実
はそれだって、地面をメートルほど掘れば出てくる「近い」出来
事なんですけど、時を隔てた昔が地球の裏側よりも遠いように見え
てしまうのもむべなるかな、当然の事です。

でも、実は遥か昔の出来事たちは、意外な形で残っています。

しかも、意外な形で。

例えば、車に乗っている時。あるいはどこかを旅している時。ま
たあるときは、地図を開いた時に。

そう、それは地名です。

よく歴史学者が言いますが、地名というのはその地域の歴史を写
しています。

え？ 実例がないと分からない、って？ じゃあ実例を交えよう
じゃありませんか。

例えば、東京に「紀尾井坂」という地名があります。ちなみに、
明治に入り内務卿として辣腕を振るった大久保利通が暗殺された現
場でもあります。この坂の「紀尾井」とは何かと言いますと、それ
ぞれ「紀伊」「尾張」「井伊」を指しています。こんな地名がつい
たのは、この坂近辺に紀伊徳川家、尾張徳川家、彦根井伊家などの
大身の親藩・譜代大名の上屋敷が軒を連ねていたことによる地名な
んです。

あと、東京に信濃町という地名があります。信濃と言いますと今
で言う長野。東京に長野、これいかに？

永井尚政という幕臣がいます。戦国末期から江戸時代の大名です。

後の二代將軍・徳川秀忠の小姓から始まり、出世に出世を重ねて最後には十萬石を超える大名にまで昇り詰めた方です。実は、この人
の下屋敷が今の信濃町にあったんです。

え？　なんで永井尚政の屋敷があったからって信濃町になったんだ、って？

永井尚政に限らず、当時の大名は皆、朝廷の官位を授けられるようになりました。稲荷神社なんかで良く見る「正一位」、あれが官位です。そして、官位にはそれに相当する役職（官職）が付随します。官位によって、何となく朝廷の中でつく仕事が決まっているんですね。で、永井尚政が叙任された際、彼には従五位下が与えられ、信濃守という官職が与えられました。はい、だいぶ寄り道をしましたが、ようやく分かりましたね。信濃守である永井屋敷があったから、「信濃町」になったんです。

え？　「江戸時代ばかりじゃねえか」ですって？

いやいや、そんなことはありません。

広島。この地名にも歴史があります。

広島の名付け親は戦国大名・毛利輝元なんですが、彼の一族は大江広元に端を発しています。その大江広元の「広」と、広島開発に辣腕を発揮した「福島」さんの島を取って広島としたという歴史があります（異説あり）。

例えば、全国を歩いていると何にもないところに「城の腰」ですとか「○○曲」だのという地名に出会うことがあります。これ、例えば戦国時代に小大名の根城があったとか、あるいは砦があったりした名残です。そういういかにも「武器っぱい・きな臭い」地名が集中しているところなんか、もう確定といってもいいくらいです。やっぱりこれも東京なんです、上連雀・下連雀という地名があります。

上・下はさておいて、「連雀」って何でしょう。連雀というのは、背中にモノを背負うためのバックパックの事です。そして、ここでいう「連雀」というのは、その連雀を背負って物を売り歩いていた

人々、連雀商人たちの事を指します。実は上連雀・下連雀というのは、室町時代に勢力を持っていた連雀商人たちの本拠地があったことに端を発する地名なんです（正確には、本来「連雀」というのは現在の神田にありました。ところが、火事で焼失してしまったことで当地に住んでいた人たちが焼き出され、その代替地として現在の上連雀・下連雀が与えられた経緯があります）。

あと、有名どころですと「国分寺」という地名が日本中にあります。これ、聖武天皇が大仏を作った時に東大寺と一緒に各国ごとに作らせた「国分寺」があったことによる地名です。

あと、やっぱり広島にある「府中」。これも古代の名残です。実はこれ、古代の国ごとに置かれていた国府という役所があったことによる地名です。なお、東京にも府中という地名がありまして、現行法だと市に同じ名前がついているのは好ましいことではないとされていますが、歴史的な経緯もありまして現在では広島市の府中市と東京の府中市が並立している格好となっています。

あと、日本中にあるといえば「調布」。これは古代税制である調（反物を収める税）の名残です。調を集める場所だったところが、後に「調布」と呼ばれるようになったんです。

これは関東にある地名なんです。狛江（東京）、あきる野（東京）、高麗川（埼玉）。これは、古代朝鮮半島の情勢が不安定になった（というより新羅により統一された）7世紀頃、朝鮮半島から（亡命して）やってきた渡来人たちが棲み始めたことに端を発する地名と言われています。「あきる」は「阿伎留」に通じ、当時の渡来人たちの呼び名であるとされています。「高句麗」が「高麗」に転じたり、「コマ」に転じたりしたわけです（ちなみに狛犬の「コマ」も、高句麗（というか朝鮮半島）のことです。朝鮮半島の人々が狛犬をもたらししたんですね）。

実はここまでの説明は、ただの一般論に過ぎません。

実は、もっと歴史的事実に深く根ざした地名というのもあります。

「あの有名人が腰をかけて座ったから」とか、「あの偉人がここであることを言ったから」という理由で決まっている地名も沢山あります。探してみると、案外色んな地名に出会います。そして、色んな地名には色々ないわれがあります。そしてその中には、ある歴史的事実が潜んでいたりするんです。

そうやって地名から事実を発見すること。

はるか遠く、時空という壁の向こう側に在りながら、地名という身近なものを通じて、なんだかすぐ近くにあるような、そんな気がしませんか？

実は、歴史は遠くに在るものではないんです。むしろ、影のように現代にびったりと張り付いているものなんです。そして、思いもよらないところできつと顔を出しては、歴史ファンを驚かせ、楽しませているんです。

そして筆者は、そんな意地悪でお茶目な“歴史”に、ずっと魅せられ続けています。

4、「ゲシュタルト崩壊を起こしたものたち」

人間って生き物は因果なもので、色々な物に囲まれて生きています。

遠い昔のことにまでさかのぼって考えれば、二足歩行を始めた我らが先祖・原始人類が前肢を持て余した末に、その前肢に枝や尖らせた骨を持ち始め、それを道具として用い始めたことから端を発する人間を人間たらしむ属性であると言えます。おかげで人間という生き物は新しい道具を作ることに血道を上げ、遂には自らの種を滅ぼすことのできるものまで作り上げてしまったのですから、まあ因果な話と言えます。そんな大上段に構えなくとも、様々な道具を買うために働く我々は、もしかすると道具を使っているのではなくて、道具に踊らされているのではないかなあとも思えますね。歴史を仔細に眺めますと、往々にして道具の奪い合いによって戦争が発生したり、ある道具が広まることで歴史が進展する事もざらに見受けられます。

人間の歴史は、そのまま「道具の歴史」と言い換えることが出来るくらいです。

さて、今、道具を「人間を人間たらしむ属性」であると説明しました。手の先を道具で武装することによって生存競争を生き抜き、遂には地上の覇者となった人類は、その誕生の段階から色々な道具を作ってきました。

いつしか使われなくなった道具もあります。

かと思えば誕生段階から殆ど形を変えずに存在するものもあります。

また、いつしかその役割を他のものに奪われてしまい、別の形で生き残った物もあります。

そして――。

生まれた経緯や使用方法がいつしか忘れ去られてしまい、道具と

しての意味を失ってしまったてもなお存在し続ける道具も存在します。
え？ 「そんなもんがあるのか」って？

あるんです。

筆者はそういう道具の事を、「ゲシュタルト崩壊を起こした
ものたち」と呼んでいます。

ところで皆さま、お葬式に行かれることはおありでしょうか。

学生の皆様ですとあまり機会がないと思いますが、社会人となる
と会社関係なんかで一年に一度程度は喪服に袖を通すのではないで
しょうか。

さて、その葬式の際に、皆さまが持つていくもの、ありますよね？

お香典？ ええ、それももちろんですが。

数珠。

さて、ここで皆様に質問です。数珠って、元々何に使った道具か
ご存知ですか？

実はですね、数珠っていうのは元々、唱えた呪文（念仏や題目と
いった奴の事です）の数を数えるための道具なんです。つまり、
本来数珠は両手で持ちまして、一つ呪文を唱えるごとに指で珠を繰
り上げていき、何回呪文を唱えたかを覚えておくための道具だつた
んです。でも、現代でそうやって数珠を使っている人、いませんよ
ね？ 実は皆、数珠の役割を忘れてしまっているのですよ。

お次に葬式でお見かけする殿方の、首に巻かれている黒いネクタ
イ。

あれ、なにを表す道具かご存知ですか？

あれはですね、西洋の中世騎士に対して、ご婦人方が巻いたスカー
フが元になっているんです。西洋騎士はご婦人に対して紳士的であ
ることが一つのステータスで、ご婦人から気に入られることが騎
士の徳目でした。なので、一廉の騎士は必ずご婦人の“所有物”で
あることを示すためにスカーフを巻かれたんです。そのスカーフが
やがてファッションに取り入れられ（というか、平時の服装の中に

儀仗的に入り込み）現代に至るのです。殿方の中には奥様にネクタイを巻いて貰っている方がいらつしやると思いますが、そのあなた、実にネクタイの使い方は正しいんです！（まあ、一方でサラリーマンの列を見ると、誰も彼も女性の“所有物”である、ってことも言えちゃうんですが。まあそれはあながち間違いでもありませんけど（笑））

さらに、殿方の喪服スーツの胸元にある折り返し。あれ、ラペルとか言うらしいんですが、あれ、元々は何に使う部分かご存知ですか？

あれって、元々は折り返さずに使っていたんです。本当はあの折り返しの裏にボタンが付いていて、詰襟のように着ることが出来たんです。つまりは防寒用途です。ところがスーツの御先祖に当たる服が中産階級用の儀仗服として発達すると、防寒の意味が薄れ、次第にボタンをいくつか外して襟部分を胸元で折り返すようになりました。そうして最後にはそこが襟であったという事実さえ省略され、ただの折り返しになってしまったのです。

そして、葬式で必ず見かけるもの、お香。

あれの目的やいかに？

いやですね。昔はあんまり遺体を新鮮に保つ方法が確立しておりませんで、状況によつては匂ったらしいんですよね。というわけで、匂い消しみたいな側面が大きかったとされています。現代ではドライアイスなんかによつて遺体の損傷を遅らせることが出来ますし、それこそエンバーミング技術が大幅に発達しましたので、匂い消しとしての役割が発揮されることはずいぶん減ってきました。

葬式一つ取っただけで、実に多くの「ゲシュタルト崩壊を起こしたものたち」が居ました。

そうなんです。道具は毎日生まれ続けています。そしてそれと同じく、毎日忘れ去られています。忘れ去られなかったものたちはずっと使われ続けます。生まれ、消えていく道具たち。その中には、

本日紹介しました「ゲシュタルト崩壊を起こしたもののたち」のように、使われることがなくなってしまったのに存在だけが残るものが、まるでニッチのように存在しているのです。

そして、「ゲシュタルト崩壊を起こしたもののたち」は、時折私たちの傍に現れてはその不気味な存在を露わにしてくれます。そして、その背後にある歴史を語り出すことがあります。

歴史バカは、「ゲシュタルト崩壊を起こしたもののたち」にさえ歴史を感じる、因果な生き物なんですよ。

5、「エキゾチック・ジャパン！ な理由」

フランス人は己の文化を“フランス文明”だと見なしているという都市伝説があります。

まあ本当なのかもしれませんが、筆者にはフランス人の知り合いがいないため、その真偽のほどはわかりません。もしかすると、自国文化を掲げてこれ見よがしに胸を張るフランス人たちを揶揄のようなものなのかもしれません。ただこの話、学生時代にフランス語の先生から聞いた言葉なので、それなりに信憑性が高いのかなあとは思っていますが。

翻って日本人は、あんまり自国文化に自信がないみたいですねー。自信がなさすぎるあまり、自分の国の文化というものに無自覚な部分が多いですね。京都なんかを旅行中に外国の方に呼び止められたとき、外人さんの方がよっぽど日本人より日本文化に精通しているなんてこともあるくらいですからね。

ところで（これもフランス語の先生が言っていたんですが）、自国文化をフランス文明と呼んでいる（という）フランス人、日本人に対しこんなことを言うらしいです。

「どうして日本人は、自分の文化を“日本文明”って呼ばないの？」
フランス人が自国文化を文明と呼んでいるのは自信の裏付けがあるからです。そのフランス人が、日本文化のことをフランス文明にも勝るとも劣らない“文明”だと見なしているのです。

リップサービス？

ええ、そうかもしれません。けど、実はこれ、ある歴史的事実からもたらされた結果だという側面があります。

今日はそこら辺の“歴史的事実”をご説明させて頂きます。

このお話をするにあたり、まずは19世紀ヨーロッパの絵画界の状況を語り出さなくてはなりません。

19世紀の絵画界は、一つの行き詰まり感がありました。ルネサンスにより宗教画から脱出したヨーロッパ絵画はやがて「見たものをそのまま書く」写實的な方向に進みます。そして19世紀にはその方向性が一応の完成を見ることとなり、「写実主義」として結実します。よく「西洋画」としてイメージするのが写実主義的な絵画です。

ただ、「完成を見る」ということは、その文化の停滞を意味します。写実主義は突き詰められるところまで突き詰められてしまい、もうペンペン草一つ生えない状況だったのです。その時代に生まれてしまった画家たちはどこかに袋小路から抜け出せないかともがいていました。そして、そうやってもがいている画家のうちから、新たな絵画ムーブメントが湧きおこります。

ちょうどその頃、ある東洋の島国が、西洋に紹介されました。

それまで二百年もの間オランダを除き西洋列国と交易をしていなかったその国は、開国に伴い西洋に見たこともない文物をもたらしました。けれど、最初西洋人たちは中国やアジアの一部としてしかその国を見ませんでした。要は、遠い国の珍しいものたちというスタンスでしかその国の文物を見なかったのです。

が、西洋の画家たちの中に、その国の絵画が持つ西洋絵画との方法論の違いに気付いた者がいました。色遣いや構図、遠近法……。これまで西洋画が取ってきた「写実」を捨てたその国の絵画は、当時の画家たちを刺激しました。

そして、それらの画家は自分たちの新しい絵画ムーブメントに、その国の画法を取り入れ始めるのです。

こんなぼかした言い方はやめましょう。

実は日本文化が、西洋絵画に多大な影響を与えたのです！

具体的には、江戸時代に江戸で発展した錦絵。あれが、後に印象派と呼ばれる画家たちの目に止まり、錦絵の表現技法を面白がった彼らによって、錦絵の作風・表現技法が模倣され、紹介されるよう

になったのです。

特にこの傾向はフランスに顕著でした。

例えば、ゴッホ。この方はモロに錦絵の影響を受けています。中には背景に錦絵を飾ってある絵や、錦絵のモチーフをそのまま描いた例まで存在します。（彼自身はオランダ人ですが、彼の絵画はフランスで描かれています。）

錦絵に影響を受けた印象派の画家たちは、西洋絵画にはない表現技法をもたらしました。

たとえば輪郭線。西洋絵画において、輪郭線なんてものは存在しませんでした。ところが、錦絵には輪郭線が存在しました。西洋において、輪郭線が意識される様になったんです。

たとえば水平でない水平線。写実主義においては「水平」は必ず狂いなく水平に描かれるべきものでした。けれど、錦絵はそんな写実主義をあざ笑うかのように狂った水平線を描きました。錦絵は、「水平線は水平に描く必要がない」ことを西洋画家たちに示したのです。

たとえば「立体感の無視」。西洋画では「見たありのままをそのまま描く」というルネサンス以来の命題のままに、立体物を二次元に収めるべく努力してきました。けれど、錦絵には最初からその観点はありませんでした。見たものをのっぺりと描く錦絵には立体感がありません。が、それすらも西洋画家たちには印象的だったのです。

そうして印象派画家たちによって西洋に紹介された“日本的方法論”は、やがて西洋絵画の中に定着します。ついには“日本的方法論”は西洋絵画から切っても切り離せないものとなりました。そうして現在に至るのです。

フランス人があんなことを言う理由がわかりましたね。

結局、日本文化はフランス文明の基幹を為しているものの一つなんです。

もし日本文化を否定してしまうと、文明たるフランスの文化を否定してしまうことになるんですね。というわけで、フランス人たちは日本文化に一種の畏怖を持ってくれているのです。

人に歴史あり。国に歴史あり。

そして文化にも歴史あり。

P . S .

ちなみにアニメ文化もまた、現代のフランスで大人気です。

何と言いますか、フランス人って日本の事が好きなだけかもしれないですね。絵画史うんぬんのお話ではなくて。まあ、その現代フランス人の嗜好を作ったのも日本文化ということで何卒。って、フランスの方々、好き勝手申しまして誠に申し訳ありませんでした。

6、「天下三名槍を知っていますか」

俗に戦場での働きの事を「槍働き」といいます。また、戦場で最初に敵に突撃した人のことを「一番槍」と称します。また、槍働きぶりが群を抜いている者に対しては、「朱槍」という称号を与えます。返り血に染まった槍を指した言葉とされています。そして後には、実際に朱塗りにされた槍を下賜されるようになりました。……と、挙げていけば枚挙に暇がないくらい、槍と戦場には密接な関係がありました。

とは言いましても、実は槍が戦の主役になったのは随分時代的には新しいことです。平安から鎌倉時代において、武士の長柄武器といえば薙刀でした。それに、厳密な意味（中子が柄に埋められている、主に刺突に使う長柄武器）での槍が一般に登場するのは室町時代の事です。そして槍が戦場で活躍するようになるのは、組織的な戦闘が行なわれる様になった戦国時代に入ってからです。

とは言いましても、槍は武働きの象徴として戦国時代から江戸時代まで珍重されました。

そうして沢山作られた槍の中には、当然名品が存在します。

そして、そんな名品の中には、数奇な運命を辿った末に「天下三名槍」とまで称されるものが存在します。

今日はそのお話をしたいと思います。

天下三名槍の一・「蜻蛉切」。

これは槍そのものがどうというより、持ち主に恵まれた感のある槍です。

この槍の持ち主は、三河の徳川家康に仕え、徳川の天下取りに武働きで応じた名将・本多忠勝です。忠勝というと、六十数度にわたる戦においてかすり傷一つ負ったことがないという伝説の持ち主です。まあ、最近なんかですとなぜかロボット扱いされている可哀そ

うな人でもありますが。

刃長五十センチ弱・六メートルもの大槍。この槍を駆り、本多忠勝は戦場を駆け、徳川の天下を導きました。その間、彼は敵の武田信玄にさえ「家康に過ぎたるもの」と唸らせ、天下人豊臣秀吉に「東国一の兵」とまで言わしめています。

それほどの人に所持されたのなら、ある意味どんな槍だろうが名槍扱いされただろう感もありますが、一応蜻蛉切の名誉のためにその性能に関する逸話を書いておきましょう。

在る戦場にて。後に蜻蛉切と呼ばれるに至る槍を振るい戦っているところに、ふわふわと一匹の蜻蛉が飛んできました。なにぶん戦場でのこと、何も気にも止めませんでした。そうして槍の先を、蜻蛉がすり抜けたその瞬間。蜻蛉が真つ二つになったと言います。これを以って、「蜻蛉切」という号が与えられました。

なお、現存しています。かつては六メートルもの大槍でしたが、本多忠勝が己の老いを悟るや、何の逡巡もなくその柄を切り詰めたと伝わり、現在では三メートルほどの全長となっています。

天下三名槍の二・「日本号」。

元々名槍として知られていました。元は皇室の財産だったとされ、その美術的な価値から（人間じゃないのに）正三位の位まで与えられていたといわれています。その後、皇室御物だった「日本号」は当時の征夷大將軍・足利義昭に下賜され、さらには天下人・豊臣秀吉の手に渡り、さらに秀吉の手によって、秀吉子飼いの大名・福島正則に下賜されました。

それだけ聞くだけでサラブレッドな経歴を了解して頂けたと思います。けれど、「日本号」にこれから待っている運命からすれば、こんな来歴、ただの前フリに過ぎません。

ある正月の事でした。

母里友信という男が福島正則を訪ねました。母里は豊臣秀吉の軍師・黒田如水の息子・黒田長政の家臣でした。長政の代わりに福島

に正月のあいさつに参ったのです。実直ながら鯨飲なまでの酒のみで、それまでも酒での失敗が多いとも言われ、長政からも「酒が勧められることだろうが飲むんじゃないぞ」と言い含められていたという話さえあります。そんな男をわざわざ正月の使者なんかにしたければいいんですが、さしもの軍師・黒田如水の息子も部下の操縦は上手くなかったと言えるのかもしれませんが。

福島はやってきた母里に酒を勧めます。が、最初母里は固辞します。すると、「飲まねえとは随分とノリが悪いじゃねえか（意識）」とくだを巻き始めます。福島氏、お屠蘇が随分入っていたものと思われる。そして、腕一抱えはある大盃になみなみと酒を盛って、「飲み干せばなんなりと褒美をやる」とまで言い出し、最後には「黒田武士は酒も飲めねえ張り子の虎か！」と馬鹿にし始めるに至り、遂に母里、キレました。

「だったら飲んでやろうじゃねえか！」

そう言ったかどうかはわかりませんが、母里、主君との約束を破りその杯に口をつけたのでした――。

え？ 結果はどうなったって？

もちろん母里の圧勝。大盃を三杯も飲み干したと言います。そして、この時、福島が母里に与えたのが日本号なのです。（ちなみにこれ、黒田節に歌われている有名な逸話“呑み取り日本号”です。）なお、現存しています。

天下三名槍の三。「御手杵^{おてぎね}」。

何と刃長だけで一三〇センチを超える大槍です。念のため言うておきますが、刃の長さが一三〇センチを超える槍なんて殆ど他に例がありません。というか、日本においてそれだけ長大な刃物が作られたことはほぼありません（大太刀などがありますが、それだって刃長一三〇センチ超えなどあまり例がありません）。

ただ、この槍には特に戦場での働きや逸話が伝わっていません。刃長が一三〇センチを超えるととなると相当な重さになるはずで、そ

れを満足に使える人などいなかったことでしょう。恐らくは元々実用品というよりは威信財として作られた側面がおおいにあるのでしよう。

徳川家康の二男・結城秀康の系である前橋松平家の家宝として伝わっていました。その間戦場に出ることもなく明治維新を迎え、近代を過ぎました。が、昭和二十年、前橋が空襲に遭った際、焼夷弾の直撃に遭い失われてしまいました。特に武働きもなくてさしたる逸話も生まなかった御手杵は、戦争の劫火の中でその生涯を終えたのです。

と、天下に聞こえた名槍を紹介させて頂きました。

有名人と共に戦を駆けたことで知られた名槍。

並はずれた逸話によって知られた名槍。

さしたる逸話も残さず消えてしまった名槍。

歴史はこんなにも魅力的なものを作り出し、我々に迫ってくるのです。

7、「お相撲の怪その1」（前書き）

この記事、書いたのが2010年の7月頃です。
あまりにタイムリー過ぎてアレだったんですが、あえて加筆せず
このままUPしております。ご了承ください。

7、「お相撲の怪その1」

日本の国技・相撲。

ここのもともとも文字通りサッカーなんか土を付けられた感のあるスポーツですが、やっぱり日本の国技であることに変わりはありません。大横綱が洗脳されたり弟子への暴力行為により親方が検挙されてしまったり、はたまた他の横綱が怪我の中親善サッカーに興じてみたり、はたまたヤクザとの黒い関係が暴露されたり野球で賭け事に興じたり（まあこれは最近起こったことでもありませんけど）しても、やっぱり相撲は相撲。日本の国技なわけです。

ところで、実は相撲って謎の多い格闘技なんです。

現代の我々が想像するような大相撲、——つまりは土俵を作りその中で力士たちが力比べをする形式のもの——が成立するのは戦国時代の末期です。また、力士たちがアマチュアからプロへと移行（つまりは職業力士が登場）するのは江戸時代に入ってからです。また、相撲場にしめ縄を締めたり、現代に伝わるような所作が登場するのも江戸時代に入ってからです。相撲の伝統なんだと言われて久しい昨今ですが、実はその“伝統”のほとんどは戦国時代、江戸時代を下らないものばかりです。それどころか、せいぜい数十年しか歴史のない“伝統”さえあります。例えば「仕切り」。お相撲さんたちが見合って呼吸を整え合うその瞬間の事ですが、あれは古来、何時間繰り返してもいいことになっていました。ところが戦後、ラジオ中継が始まった時に「あんまり仕切りが長いとラジオを聞いてくれるお客様に失礼だ」ということになり、幕内力士は四分間と決められました。

あー、いやいや誤解なきように。別に筆者、相撲の“伝統”を揶揄しているわけではありません。むしろ、そうやって柔軟にその形を変えてきた相撲であるがゆえに、相撲は国技なりえたのです。むしろ筆者が問題にしたいのは、相撲の原初の形はどんなだったのか

という点です。

実は相撲の原初がどのようなものであったのか、分かっていないんです。

考古学的には、相撲は古墳時代より見られるものだと言われています。

というのも、古墳に乗っけられている象形埴輪の中に、フンドシ一丁で片手を上げたり、あるいは両手を前に差し出して中腰になっている男の像があります。象形埴輪というのはその古墳の被葬者・つまりは葬られたお方の生前の生活の様子を写したものとされています。つまり、古墳時代の昔からフンドシ一丁の力持ちがいて、力持ち同士ががっぷり四つで組み合う格闘技があったのは確実視されています。つまり、考古学的には今とあまり変わらない「力比べ」的な相撲が最初期から存在したと考えています。

そして、考古学者たちは相撲を神事と結び付けて、昔から地鎮や葬送儀礼に行なわれた神事だったのではないかと考えています。

が、この考古学者たちの結論に歴史学者は首をひねっています。文献資料をひっくり返してみると、まったく違う形の相撲が見えてきます。

日本書紀に、日本最初の相撲の様子が描かれています。垂仁天皇の時代にあつたとされる、野見宿禰ノミノスクネ（土師氏・後の菅原氏の祖。つまりは筆者の祖先です（笑））と当麻蹴速トウマノケハヤとの角力対決の記事です。これ、本当に相撲かいなと疑ってしまうような内容です。

試合展開を読んでみると、おおむねこんな感じです。実況風にお送りします。

“野見宿禰・当麻蹴速、見合つて見合つて……。蹴り！ 蹴り！ 蹴り！ 蹴速の連続キックだあー！ 野見思わず仰け反る！ あつと？ 野見、負けてはいない！ ローとハイを使い分ける見事なキック！ 蹴りの名手蹴速に負けない蹴り、思わず蹴速顔が歪む！そしてその蹴りが、脇にい、入ったー！ 蹴速悶絶！ ダウー

ン！　だがここで野見は止まらない！　倒れた蹴速に、かかと落とし！　かかたと蹴速の腰に入る！　蹴速動けない！　この勝負、野見の勝ちだあアア！　野見、王者を勝ち取った！”

はい、書いてみてひどく後悔しています。

いや、これマジなんですよ。文献史料に現れる最初の相撲は、キックボクシングかムエタイかと言いたくなるような格闘技なんです。しかも、この戦いによって負けた蹴速、腰の骨を砕かれて死んでいます。地面に落ちたら負けなんていう軟なルールではありません。断じて。

さらに、この記事において注目しなくてはならないのは、この記事の何処にも神事的な気配がないことです。まあ、野見宿禰の一族である土師氏は後に天皇の葬儀を取り仕切る一族となっていくので、まったく儀礼と関係がないかといえば怪しいところですが、この記事にはただ力比べとしての相撲が出てくるばかりで、相撲がなんらかの宗教的な儀式になっている気配は見受けられません。

さらに、日本書紀や古事記に見られる相撲記事を見ても、そのどこにも宗教儀礼的な相撲記事は出てきません。あくまで遊興の一部あるいは武術としての相撲記事ばかりです。中には己の腕を過信してすっかり天狗になっている職人に業を煮やした天皇が、その職人の前で女相撲を取らせて……という下世話な記事さえあります（日本書紀・雄略天皇紀）。

さらに、奈良時代になって「突く・殴る・蹴る」が禁じ手とされました。つまり裏を返せば、それ以前の相撲にはその三つが普通に存在したということです。

なんといいですか、古代の相撲って凄い！　ですよね。

ストリートファイターシリーズっていう格闘ゲームにエドモンド本田という相撲レスラーがいて、とても相撲とは思えない戦いぶりを見せてくれるわけですが、彼の戦い方は実に相撲的なんです。もちろん、頭突きがあったかどうかは資料にも残っていないのでよく分かりませんが。

歴史学者の多くは、最初期の相撲を純粹な格闘技と見ています。殴る蹴る投げる。何でもありの総合格闘技。そしてあまり神事とは関わり合いのないものと考えているのです。

実はこの相撲の最初期の姿、歴史学者と考古学者の知見がずれている例なんです。

もちろん大抵の場面では歴史学と考古学はお互いを補完しあっています。江戸時代の庶民の墓を暴くと六文銭が出てきますが、これは当時の文献資料を読めば“当時、三途の川の渡し賃を副葬する習慣があつた”ということが容易に分かります。と、このような場合が多いんです。

ところが、時折こうやって歴史学と考古学の間に深い溝があつて、「結局これってどうなのさ!？」ということになっている例があるんです。

実は、こういうところって「歴史バカ」には面白いポイントです。歴史学でも考古学でも今一つ見えてこないところ、そこに歴史バカは自分の想像（妄想）を挟み込んで楽しんでいるのです。

8、「お相撲の怪その2」

前回に引き続きまして、日本の国技・相撲の謎第二弾！ です。

最初期はキックボクシングかそれとも総合格闘技かと疑いたくなるような格闘技でしたが、平安時代には主に相手を投げることで決着をつける形式の相撲が誕生しました。そして、その「力比べ」的性質のゆえに武士との相性が良く、たびたび武士たちが相撲を奨励しました。そうして時代は下りに下り江戸時代。ついに興行としての性格が強くなる大相撲が誕生しました。

江戸時代の大相撲はお寺や神社の取り締まりを行なう寺社奉行の管轄下におかれ、各藩や大商人・旗本家がスポンサーとなって力士を戦わせる大相撲となったのです。

さて、この江戸時代の相撲ですが、実はそこにも謎があったりします。

江戸時代には現代相撲の基本的ルールや儀礼・番付などが出揃いました。その中で一番有名なのは相撲取りの最高位・「横綱」です。まあ、横綱そのものは戦国時代の頃に誕生したようですが、お相撲さんの中で特段の地位にある人を横綱と呼ぶ習慣は江戸時代に入ってからです。正確には、横綱がある特定の権威が認め、それを授ける形が成立したのは江戸時代の事なんです。

でも、江戸時代の「横綱」って、ちょっと不思議なものなんです。現代の横綱というと、めちゃくちゃに強くて品位のある（後者は多少怪しくてもOK）力士が上る役職の事ですが、当時の横綱位の授与条件ってかなりあややなんです。

例えば、横綱制度が生まれた後に活躍した力士に、雷電為右工門一（1767～1825）さんがいます。生涯において負けが僅かに十。勝率九割を超える不世出の力士です。現代的な感覚ならば確実に横綱になっただけいなものですが、雷電は最後まで横綱に登ることはありませんでした。

なぜか。

これ、「横綱」というものの性格が、現代とかなり違ったからではないかと考えられています。

そもそも、横綱とは何か。

横綱の腰には注連縄が巻かれています。これが何を意味するかと言いますと、“神様がここにいますよ”という印なんです。ほら、よく神社にご神木つてあつて、その幹に注連縄しめなわが張つてありますよね？ あれは「ここには神様がおわしますよ」っていう印なんです。そう、横綱つていうのは「神様」そのものなんです。

正確には、「神様が憑依している」存在なんです。

もちろん、神様が憑依している存在である横綱がそう軽々しく負けられては困つてしまいます。なので、横綱には強い人が選ばれました。そして、神様が憑依しているとされているがために、強さ以外の部分でも評価がなされて選定されました。

雷電為右工門さんが横綱になれなかったのは、強さ以外の部分が横綱として不適格だったからと言われています。

例えば、雷電不人気説なんていうのもあります。雷電は確かに強かったものの客受けが悪く、そのせいで横綱免許を貰えなかったという説です。ただしこれは雷電をモデルにした講談の存在や雷電の錦絵が一定量存在することから否定されています。

ただ、有力な説と言うのも当然ありまして。

それが、「預かり藩の力関係説」です。

当時の相撲取りは藩や旗本にスポンサーになつてもらっていました。当時そのことを「抱」といひまして、色々な形式はあるにせよ一代限りの禄を与えて家中専属としたんです。当時実力のある力士は皆どこかの藩か旗本の抱だったといわれています。要は、当時の大相撲は多分に藩同志のメンツ争い・代理戦争みたいな部分があったんですね。

で、横綱に登るには、抱えられた藩のランクが関わっていたので

はないかという説です。

確かに歴代横綱を見てみると、抱の藩に錚々たるものがあります。長州や熊本などの外様雄藩、盛岡の南部家といった旧家が目立ちます。それに対し例えば雷電は松江藩抱でした。松江藩は当時親藩家だったもののあまり石高は高くありませんでしたし藩としての格もあまり高くありませんでした。その辺りが雷電横綱昇進を妨げたのだという説もありますが、実は同じ松江抱の力士で横綱に登っている人もいますので一概には言えません。

また、江戸時代の「横綱」は階級ではなく、名誉称号のようなものだったと考えられています。

不知火諾右衛門さんという横綱がいます。この人、実は横綱史上唯一番付を落としています。しかも大関から関脇に。このことから当時の横綱は番付とは関係ないところに存在し、概して強い力士に与えられている称号だったモノの、別に最強の力士に与えなくともよいとされていたようなのです。

——見れば見るほど謎が深まりますね、横綱制度。

というのも、これは大相撲という格闘技が、時代に合わせてその形を融通無碍に変えてきたからなのでしょう。思うに、大相撲を支えてきたのは「伝統」ではなく、時代に則してその形を変えてきた柔軟さにあったような気がしています。

何が言いたいのかというと、もう少し現代の相撲協会も柔軟な対応に努めた方が良くないかなあ、と。相撲協会は事あるごとに「伝統」を口にしますが、相撲の歴史を追ってみると相撲の伝統の本質は「変容」にあるように思えます。

変わっていくことは怖いことですが、是非とも土俵際で踏ん張って欲しいなあ、と筆者、一人の相撲ファンとして最近の騒動を眺めております。

8、 「お相撲の怪その2」 (後書き)

これを書いたのは前年の七月なので、最後の一文は野球賭博についての感想です。

9、 「実測図の楽しい見方」

皆さま、最近博物館に行かれたことはおありでしょうか。

え？ 「行っていない」？ それはいけませんねー。現在日本の博物館業界は大変なんです。指定管理者制度つていいまして、民間企業（民業）に博物館運営を委ねることが出来るようになったことで、最近博物館は自前で運営出来る業態を求められるようになっていきます。民間企業にお勤めの皆さんからすれば「当たり前じゃん」とお思いの事かとは思いますが、さにあらず。博物館の収入つて、お客さんからの入館料くらいしかありません。にも拘らず、出ていくものは滅茶苦茶多いんです。特に国宝・重文クラスの物を置いているところはなおの事。保存や修繕、建物の維持管理などが馬鹿になりません。こう言っちゃアレですが、今現在、収支のバランスが取れている博物館なんて殆どありません。（この辺の話はおいおいさせていただくかと思ってます。）

まあともかく、博物館に行ってくれ、つてお話なんですけどね。

さてさて、今までの人生で一度も博物館に行ったことのない人がいないわけではないでしょうから、とりあえずその頭でお話をさせて頂きます。

歴史系の博物館に行きますと、縄文時代とか弥生時代・古墳時代といった考古学分野の展示が結構あります。特にその地方の行政体（つまりは市とか町など）の博物館は、大抵は郷土史を扱っているためにそのスタートに考古遺物が展示されていることが凄く多いです。

きつとここをお読みの方は「戦国時代が好き！」とか「幕末が好き！」という方々なんじゃないかなあと勝手に想像してます。少なくとも、「縄文時代が好き！」な方はあんまりいないんじゃないかなあと思うんです。きつと皆さん、博物館に入った時、考古遺物のブースは素通りしているんじゃないかなあとニラんでいます。

けれど、歴史バカとして言わせてもらうと、実にもつたいない！
実は考古遺物のブースにも面白い要素が沢山あります！ 今日はその一角を披露しようかと思っています。

ところで、実測図というのをご存知でしょうか。

よく博物館の考古学ブースの壁に掛けられている、土器とか石器を紙の上にトレースした絵の事です（なお、“実測図”という言葉は、遺跡の全体像を紙にトレースしたものも指します。ここでは前掲の意味でこの言葉を用います）。

きつと皆さま、あの絵について素通りしていると思うんですよ。「どうして実物が置かれてるのに、絵を同時に展示するんだよ？」と疑問を抱いていらっしやる方もあられると思います。

実はそれには理由があります。

実測図には、その図を描いた研究者の主張が込められているのです。

このコンピュータ全盛の時代にあつて、実測図は手で書かれています。

もちろん、最近では遺物をスキャニングして紙にトレースする機械があるのですが、未だその機械は表立って使われておりませんというか、そういうスキャニング装置は遺跡調査などの時、煩雑な作業を軽減するために用いられており、例えば論文につける実測図を描く時などは手書きで書く場合がほとんどです。

どうしてかと言いますと、実測図に、研究者の考えを盛り込むためです。

弥生一号土器というものがあります。

明治時代、東京文京区の弥生（異説あり）にて見つかったその土器によって、縄文土器とも古墳時代の土器とも異なる土器が存在することが判明し、後に縄文時代とも古墳時代とも異なる文化様態を

持った時代と認識されるに至りました。それを記念して、とされている発見地弥生を取ってその時代を弥生時代、その時代の土器を弥生土器と呼ぶようになりました。その弥生で見つかった第一号の弥生土器を、「弥生一号土器」などと称呼するんです。

と、考古学上意味のある弥生一号土器ですが、平成に入った頃、とんでもないことが取り沙汰されました。

「ねえ、弥生一号土器って本当に弥生土器？　もしかして古墳時代の土器じゃね？」

……身も蓋もないですよ。けれどこういった論争が巻き起こったのは事実なんです。弥生土器も古墳時代の土器である土師器も赤焼きの土器であり、明確な区別をつけるのも難しいんです。しかも本来なら埋まっていた土の層から大体の年代が分かるんですが、弥生一号土器が発掘されたのはもう百年も前の話です。結局、外形からその成立年代を探るしかなかったんですね。その上、この弥生一号土器、過渡期の土器だったらしく、あまり際立った特徴のない土器だったというのもこの論争の下地にあります。

結局この論争は「弥生一号土器はやっぱ弥生土器でした」っていう結論だったんですが、その時の論争の際、弥生時代説を上げておられた方の実測図を見ると、面白いことが分かります。

土器の縁台部分が、実際のそれよりも大きく描かれています。実際よりも、というのがミソなんです。

この縁台が大きく張り出した形は、東海地方でおおいに出土する弥生土器に見られる特徴なんです。その実測図を描いた学者さんは、その土器の縁台がほんの少し張り出しているという事実に着目し、「きっと東海地方の弥生土器の先駆的な土器なんだろう」と考えたんです。その主張を図でも示すために、実際よりも大きくその特徴を描いたんです。

え？　「ねつ造」？　ノンノン、違うんです。考古学という学問は常に遺物と向き合う学問です。他人の描いた実測図は当てにしないのが考古学者なんです。それが証拠に、論文なんかの実測図に

は描いた人の名前と描いた年を列記するのが正式です。つまり、「この時私はこういう風に考えましたッ！」と分かるようにしてあるんです。考古学の世界においては、実測図すらも論文なんです。

つまりですね、実測図にはその作者の主張が練り込まれているんです。

博物館なんかで掲げられている実測図、ただ素通りするだけではただの絵ですが、実はあれには展示をした人の主張が隠れているんです。「これは●●の影響を受けた××式土器なんだよー」という。ただ、博物館の皆さんはあまりこういった面白い話をしてくれません。

なので、こっちから聞いたり、自分で勉強しなくてはなりません。博物館、その辺どうにかならないかなあ、と歴史バカとしては思っております。

とにもかくにも。博物館においでの際には、普段は素通りしてしまっている実測図をご覧になってみてください。そこには、学者さんたちの叫びが隠れているんです。

9、 「実測図の楽しい見方」(後書き)

2011.4.3 間違いを砂漠の砂さまよりご指摘いただきましたので訂正させて頂きました。弥生一号土器論争は「縄文土器か弥生土器か」の論争ではなく、「弥生土器か土師器か」の論争でした。謹んで訂正させて頂くとともに、お詫び申し上げる次第です。

10、「歴史」を意識してしまった人」

歴史を仔細に眺めていくと、時折奇妙な行動を見せる人がいます。もちろん歴史上には、「時代を超えた」言動を見せる人もいます。実はそういう人たちこそ歴史小説において主役になつてゆく人々なんです。けれど、「時代を超えた」人々とはまた違った意味で、歴史という舞台の上で奇妙な行動を見せている人々がいるんです。

筆者はそういう人の事を、「歴史を意識してしまった人」と呼んでいます。

時は1941年の12月。

勸のいい方ならすぐに気付かれたかもしれませんね。そう、太平洋戦争（大東亜戦争）における最初期の対米作戦、真珠湾攻撃の話です。

当時、日米は中国を始めとする極東情勢について深刻な対立がありました。盧溝橋事件に端を発する日中戦争。その泥沼化と西洋各国の介入。結果として制裁措置としての日本に対する経済封鎖が進んでいました。そのような状況にあつて、軍部、特に海軍の焦燥が募っていました。海軍の主力は何と言っても艦船。艦船を動かすのは石油でしたが、米英中蘭によるいわゆるABC包囲網により石油の供給ラインが断たれようとしていました。“このままではいつか石油が枯渇し、一矢報いることさえできなくなる”。海軍はこう主張し日米開戦を主唱しました。アメリカとギリギリの交渉をしていた日本政府も、最後通牒と言われるハルノートを見るに至り（補足・ハルノートはアメリカにとって最後通牒ではなかったようなのですが、ハルノートに垣間見えた強硬なアメリカの姿勢が日本外務官僚たちの心を折ってしまったというのが真相のようです）海軍の意見を容れ、日米開戦を決意するに至りました。

で、戦争を仕掛けるに当たり、宣戦布告を発してすぐ攻撃、とい

うシナリオを描きました。つまり、隠密裏に艦隊をハワイに送り、宣戦布告文が提出されたすぐ後にハワイを攻撃、というタイムテーブルを取ったのです。

ところが、このタイムテーブルに狂いが生じてしまいました。

アメリカ側に宣戦布告文が届いたのが、真珠湾攻撃よりも後（一時間後）になってしまったんです。翻訳やタイプに手間取ってしまった、とのことでした。

ちなみにアメリカはこの事実をプロバガンダとして用います。「卑怯討ちをしてきたジャップが、ハワイの我らが友人を虐殺した――」。ダーティジャップのイメージを有権者であるアメリカ国民に初期段階で刷り込むことに成功したアメリカ政府は、1945年の終戦まで戦争を継続するだけのモチベーションを作り上げることに成功しました（余談ですが、2001年同時多発テロの時、“リメンバーパールハーバー”という言葉が盛んに叫ばれました。なんと、60年前のプロパガンダがそのまま使われているのです！）。

とまあ、これが真珠湾攻撃の概略なのですが、筆者が注目したいのは翻訳やタイプに手間取った外務官僚さんたちです。

現代的な感覚で言えば、「言われた仕事もできない官僚なんて首だ！」という論調になってしまいうでしょう。

でもですね、翻訳やタイプに手間取ったというのも仕方ないこととも言えます。

外交文書に限らず、国から国に手渡される通告書はほぼ半永久的に残されます。宣戦布告文などという大事な文書の場合だったらなおの事。それこそ当事国が滅んでもなお第一級資料として残されることでしょう。おそらくは人類すべてが滅びるまで。

さて、ここであなた様に質問です。

そうやってほぼ半永久的に残る歴史的文書をタイプするという任務があなたに下されました。あなたはそれを緊張なしに書けますか？ 仮に書いたとして、一回も見直すことなしに提出しちやいますか？

きつとそんなこと無理でしょう？

永遠に残る文書を書くということは、つまりこの文書を書いた人間の名前も同時に残ります。もしもその文書の中にスペルミスとか構文ミスとかがあったら……。子孫末代の恥のみならず、世界中の笑いものですよ。中学生でも間違えないような失敗、例えば“3rd”を“3ed”と間違えちゃったりなんかした日には（ああそれ筆者のことだ）きつと子孫、軽いいじめに遭いますよ。それに、後世、日本という国の民度まで疑われてしまいます。

きつと外務官僚たちはそれを意識しながら宣戦布告文を英訳し、タイプしたに違いありません。永遠に残る文書を前にして、後ろに迫る歴史と言う名のプレッシャーに襲われながらも。

きつと外務官僚さんたちは「歴史を意識してしまった」んでしょう。

あと、もう一人紹介しておきましょう。

徳川慶喜です。

彼、戊辰戦争における最初期の戦鬪である鳥羽伏見の戦いの際、旧幕府軍の文字通り將軍でした。にもかかわらず側近をひきつれて大坂城から脱出して江戸で謹慎しちやいます。

これ、慶喜が「歴史を意識してしまった」からだと言われている。

慶喜は元々水戸徳川家出身なのですが、水戸家にはかねがね「水戸学」という思想（思想と言うよりは学派と言われています）がありました。思想として融通無碍なところがあるので一概には言えないんですが、あえてざっくりばらんに言えば「天皇に弓を引いちゃダメよ 引いたらお尻ペンペンだからね（ハート）」という思想でした。で、その水戸学を元にして水戸藩では『大日本史』という歴史書を編んでおりまして、その中で天皇に弓を引いた足利尊氏はさんざんにこきおろされています。そのような様を直接見ている慶喜としては天皇に弓を引いている構図が我慢できないようでした（最

初鳥羽伏見の戦いは薩摩藩と旧幕府との私的な戦闘という色合いが強かったのですが、薩摩の行動を朝廷が追認したことで、旧幕府の徳川慶喜が天皇に弓を引いている図式が成り立ってしまったのです。

きつと、足利尊氏にはなりたくないと思ったのでしょう。慶喜は数で勝る旧幕府軍を残したまま、そそくさと江戸に帰って謹慎してしまいました。

歴史の流れは元来、我々現代に生きる人間には見えないものです。歴史というのは我々の遙か遠いところに鎮座する歴史家によって紡がれるものなのです。

が、現在を生きる我々も時折、歴史家の視線に気づくことがあります。そうやって「歴史を意識してしまった人」は、歴史という連綿たる流れの中で不思議な目立ち方をします。実はこういう人たちも歴史小説の題材になる人たちでして、歴史小説を「なろう」様の末席を汚しながら書いている筆者としても興味のある人たちなんです。

11、「歴史と異文化フュージョン」

「萌え」という言葉が市民権を得て久しくなりました。

とか言いつつ、実は筆者、「萌え」の何たるかがよく分かっていません（教えてエロい人！）。きっと、「萌えは学ぶものではなく感じるものなのだろうなあ」と漠然と考えつつ、今一つ感じる事が出来ないままに今日に至っておりますです、はい。

え？ 「いつからこのエッセイは萌え文化を云々言うようなエッセイになったんだ？」ですって？ ああ、まあそうですね。前回に太平洋（大東亜）戦争やら戊辰戦争の話をクリック真面目にしていたくせに、って話ですよ。

でもですね、最近萌え文化ってヤツは少しずつ色々な文化に浸食しています。文化ってというのは面白いもので、新しい概念を簡単に盛り込んでまったく別の文化が出来上がったたりするんですよ。要は既存の文化を「萌え」という概念で理解し直す動きってというのが所々で出ているんですね。まあつまり、何らかの形で文化に関わっている人間は、ある意味で萌え文化の影響下にあるわけです。

そういう意味では、「歴史」だってそうです。

例えば三国志をモチーフにしたコーエーさんのアクションゲーム、『三国無双』シリーズ。呉の大都督「周瑜」の奥さんである「小喬」さんなんか、いわゆる「妹属性」キャラとしてリライトされています。あとは劉禅の奥さんをモデルにしたと言われる「星彩」というキャラクターなどは、『エヴァンゲリオン』の「綾波レイ」の流れである「クールビューティ」を踏襲しています。

歴史というのも文化なんですよ。なので、その受容に当たり、現代の流行に左右される面があります。

……と、ここまで説明しまして何が言いたいのかといいますと。
観光地のお土産を見てみましょう、というお話です。

さて、日本を旅行して様々な観光地に旅行すると、大抵歴史的建造物などの観光地に行き当たります。日本では北海道を除いて幕藩体制が完成しており、人が住んでいない処はあまりありませんでした。都市を作って生活をすれば、様々な建造物が残るのは道理です。で、日本の観光地は“歴史”を売りにするか“食べ物”を売りにするか。あるいは“温泉”を売りにするしかない場合が実に多いので、“歴史”を売りにする観光地は沢山あります。そういう歴史系観光地では、お土産も歴史がらみの物が多いんですが、ここに最近、“萌え”の影響が出てきましたね、というお話をしたいんです。

上田というところがあります。

戦国時代に詳しい方ならご存知でしょうが、ここは六文銭の旗頭で有名な真田氏の居城・上田城があるところです。真田幸村といえは戦国時代に詳しくない方でも名前くらいは聞いたことがあるのではないでしょう。徳川氏に最後まで抵抗し、徳川家康をして「日の本一の兵」と言わしめたことで、幸村は歴史に名を刻んでいます。または最近ですと「オヤカタサムア！」とオンドウル気味に武田信玄に呼びかける幸村も有名ですね。

さらにここでは関ヶ原の戦いに向かう徳川秀忠を足止めた戦いである上田城の戦いという戦いが行なわれておりまして、それでも高名だったりします。

その戦いぶりから、後に「真田十勇士」という真田幸村に仕える十人の家来が創出され、講談や文芸などで語られるようになり、今では「真田十勇士物」というジャンルが出来ているくらいです。

さて、実は筆者、上田に行ったことがあるんですが、ここのお土産屋さんに入った時、「萌え化」した十勇士を見てしまったんですね。

ラベルに十勇士のイラストがあしらってある日本酒だったんですが、そのラベルに描かれている十勇士の一人、「霧隠才蔵」が女の

子として描かれていました。はい、つまりは「おにやのこ」化です。しかも、後でググって調べてみたんですが、どうも（この絵の世界観的な）設定としては普段は男の子として扱われているようで……。きつと「ボクっ子」に違いありません！（↑いや、分かりませんけど）

さらに、十勇士の一人「穴山小助」もなぜか妖艶な女性として描かれておりました。「女体化」ですね！

言うまでもなく、他の男性陣がカッコよくリライトされているのは言うまでもありません。また設定などを見ると何やらある筋の方には色々と邪推が出来ちゃいそうなのがちらちら書いてあったり……。

真田十勇士もまた、萌えによって新たな価値を与えられているんです。

きつと、中には「けしからん！」っていう人もいると思うんです。筆者の友人の中にも「伊達政宗が英語をしゃべりながら日本刀を六本も振り回しているなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある」とか、「独眼竜ビーム」を放つ伊達政宗ってどうなんだ」とかいう苦言を放つ者がおりますが、いいじゃないですか、面白いんですから。要は、「歴史を物語として楽しみたい人」と「歴史を歴史そのものとして楽しみたい人」の棲み分けさえできていれば。

英語を軽快に喋ったり、独眼竜ビームを放つ伊達政宗にカッコよさを覚えたり爆笑したりしながら、「そういえば日本最古・現存の鉛筆って伊達政宗の墓所から見つかったものなんだよね」とニヤマリとするのが歴史バカたる筆者のスタンスだったりします。

歴史は物語であると同時に事実でもあります。物語としても面白いし、事実としても面白い、それが歴史なんですよ。

補足

なお、上田は最近、アニメ映画「サマーウォーズ」の舞台となっ

た関係もあつて、そっち方面でも町おこしをしようとしているようです。

サマーウォーズもいいですが、是非とも歴史的建造物も見てくださいね。

11、「歴史と異文化フュージョン」（後書き）

通常運転でお送りしています。

書き手という属性で以って今回の地震に向き合った時に、作者である筆者が出来るのはただ文章をUPすることだけです。筆者の駄文が、被災を受けられた皆様の、ほんの気休めになればこれ以上の仕合わせはありません。

12、 「気候変動と歴史」

歴史という学問は、どうしても“人”を中心に据えて展開される学問です。“過去において人間がどういう行動を取り、結果どういうことになったのか”を追求する学問である以上、歴史で語られる主題は常に“人”なんですね。

それはそうなんです。

そうやって人だけ見ていると、分からなくなってしまうことも出てきます。

人間は有史以来、自然と戦う手段として文明を造り、発展させてきました。気まぐれで時には牙をむいてくる自然に左右されまいと人々は農耕を始めて穀物の貯蔵をし始め、巡り巡って今があるんです。が、自然は時折人間の築いた“文明”というバリゲードを突き破り、牙を剥くことがあります。

今回のテーマは、歴史と気候変動です。

そもそも、人間が文明を造る生物となったのも、気候変動の賜物です。

人類が登場するのは約400万年前と言われています。もちろん人類とは言っても殆ど猿と変わらないような生物でしたけど。400万年前というと俗に更新世（洪積世）と言われておりまして、一般には氷河時代として知られている時代です。

その間人類は何をしていたのか？

数々の枝別れをしつつも狩猟採集的な生活をしていたものとされています。更新世は大体現代から1万年前くらいまで続くんですが、その間人類は類人猿から現生人類へと変化し、狩猟採集的な生活をしてきたものとされています。

ところが、その更新世も終わりを告げます。

約一万五千年前に地球の気温が上がり、氷河が後退しました。氷

河時代から一転、割と温暖な時代がやってきたんですね。これを指して完新世（沖積世）といいます。

さて、日本史に詳しい方ですと、一万五千年前という数字にピンと来られるのではないのでしょうか。

そう。日本における縄文文化の始まりが、丁度そのころとされています。何を以って縄文文化とするか、というのは難しい問題ではありますが、とりあえず“縄文土器とされる土器を造っていることが縄文文化と旧石器時代を分かつものとして判断されています。”

でも、地球が温暖になったからって土器が作られるってこれいかに？

いや、そんなに理屈は難しくありません。地球が温暖になれば、寒冷性の生物は絶滅したり個体数を少なくなったりしますが、逆に生物全体でみれば生存がしやすいので個体総数が増えます。人間目線で見れば、狩りの対象が増えたということになります。個体数が増えるということは獲物とのエンカウント率が上がります。つまり、前までは獲物を追ってグループ全体が移動していたものが、あまり移動しなくとも獲物が手に入ります。それによって、移動には邪魔である“道具”が発達するんですね。そうして、土器が誕生したのではないかとわれています。

そして、歴史において土器の誕生は大きなターニングポイントです。

土器の誕生により、人は水を貯蔵する手段を確立しました。それのみならず、煮炊きという新しい調理法を覚えることにより、人類はさらに効率的なカロリー摂取法を知ったんです。それまで食べられなかったどんぐりといったアクの強いものが食べられるようになりました。貝類を煮ることによって、煮汁ごと食べるという手段を知ったわけです。

さらに時代が下ると、人類は肥沃な土地に穀物の種を植え始めます。そうして人間が疑似的に作った自然を管理することによって安定的に食料を得る手段を知ったのです。これがいわゆる農耕です。

最初期の農耕は当然のことながら原始的なものでした。それは当然の事です。ノウハウのない時代の事です。手探り状態で、現代的な視点で見れば危なっかしい農耕でした。けれど、この未熟な農耕を支えたのは紛れもなく温暖であった完新世という時代でした。もしこの時代が氷河時代だったなら、農耕は発生しなかったでしょう。つまり、更新世から完新世への変化は土器と農耕という文明の基礎を造る要素となったんです。

さらに。

市民革命を起こったのも、日本で明治維新が起こったのも、気候変動の賜物なのです。

皆さま、小氷期という時代をご存知でしょうか。14世紀から19世紀にあつたとされる、局所的な気候寒冷化の時代です。現在の大方の学説によると南半球では寒冷化は起こっていないとされているため、“局所的”と表現せざるを得ません。ともかく、北米・ヨーロッパ・ユーラシア大陸といった北半球全域で、気候の低下が起こりました。

さて、歴史にお詳しい方、この時代、農村でたびたびアレが起こっていたのをご存知ですよ。

そう、飢饉です。

日本で見てみましょう。小氷期の頃の日本は江戸時代でした。その期間中、日本はたびたび飢饉に悩まされています。しかもその原因を見ていくと、イナゴの害に混じって気候不順によるものが沢山記録されています。

もちろんヨーロッパでも飢饉は数多く記録があります。

けれど、問題は飢饉ばかりではありません。気温が落ちるということは、穀物の実りにも影響が出ます。不作とまではいかないまでも食料の生産力は中世と比べて落ちてしまったと考えるのが自然です。

気温低下によって農作物の生産力が低下し、その結果として飢饉

が発生する。そうして現体制への憤懣がたまり、革命が起こる。これがフランス市民革命の一側面でした。

また、日本の場合も少し複雑です。飢饉による憤懣が幕藩体制に向かったという側面もあるでしょう。寒冷化によって飢饉が起こったのは主に関東や東北でした。関東や東北諸藩は長い間飢饉によって疲弊していたんですね。ところが西国では（南に立地するという気候条件ゆえに）飢饉が少なかったので疲弊はあまりありませんでした。明治維新において明治政府を叩き上げるに至る雄藩はどれも西国諸藩です。

なんと、気候変動は革命まで起こしちゃうんです。

ちなみに現代は温暖化の方向に進んでいるとされています。よく、「1 気温が上がったからって何が変わるんだ」とおっしゃる向きがありますが、さにあらず。小氷期における気候変動は平均1 ほどのものとされています。が、そのたった1 が流血革命を起こし、時代の大転換を生んだのです。

まあそんなわけで、筆者も一言。
ストップ温暖化。

13、 「小氷期の置き土産」

さて、前回は気候変動が歴史と密接に関係していますよという話をさせて頂きました。けれどこれ、当り前の事でもあります。人間だって自然の一部なんです。ただ、人間の場合、火というエネルギーを獲得したことによって自分の体や太陽以外の熱源を手に入れたので、あまり意識できなくなっているだけで。実は地球というひとつの系を眺めた時には太陽が一次的（根源的と言い換えても可）な熱源となっており、太陽のご機嫌次第で大打撃を受けてしまいます。いえ、太陽のみではありません。火山の噴火や小惑星の衝突等の災害によっても、人間という自然は打撃を受けてしまうんですね。

もちろん打撃を受けた当事者はたまったものではないでしょう。けれど、そういう自然の猛威は人間の思考や文化様態にまで影響をもたらします。例えばですが、2001年の9月11日に、アメリカにて同時多発テロが起きました。あれは悪意ある人間による“人災”ですが、「あの事件に衝撃を受けた」と証言し、自らの創作活動に影を落としたというアーティストが沢山います。大事件によって、文化の側が変容してしまっているんです。人間というのは影響してされて存在しているんです。良くも悪くも。

今回は、「小氷期がもたらしたもの」のお話です。

皆さま、「雪女」という怪談をご存知でしょうか。

まあ、この「雪女」には様々なバリエーションがあって一概には言えないんですが、あらすじを述べると以下ようになります。

—— ある大雪の日、道に迷った男二人が小屋を見つけ、そこで夜を明かそうということになった。その夜、ふと男が目を覚ますと、雪女が連れの男を凍死させているところだった。だが、雪女は「このことを喋らなければ、命だけは助ける」という。男は応じた。そ

うして男は凍死することなく、一人村に戻った。

その後、その男は雪女の言いつけを守り、誰にも雪女の事を話さなかった。その遭難の後にめとった妻にも話すことはなかった。だが、ある雪の日に妻に雪女の事を喋ってしまう。すると、妻は突然雪女に姿を変えて……――。

まあ、こんなお話です。

パトリック・ラフカディオ・カーン

これは小泉八雲の「怪談」に所収されている雪女の大略です。ちなみに雪女伝承は日本中にありますので、色々なバージョンがありますが、ともかくも雪の日に人を氷漬けにしてしまう妖怪がいるという点では殆ど一致しています。

ではここで皆様に問題です。

この「雪女」の話、どこらへんのお話か、想像つきますか？

北海道？ 東北地方？ 北関東？ 雪が降って遭難してしまうくらいですから、めっちゃくちや雪深くて山がちなところのような印象がありますよね。

ところが、正解は皆さまの想像の斜め上を行います。

答えは小泉八雲の「怪談」に書いてあるんですよ。最初のところに。

なんとそこは……「武蔵国」。

ええと、武蔵国と言いますと、現代で言う東京・埼玉全域のことです。現在首都圏に住んでいらっしゃる方ですと首肯して頂けるとは思いますが、東京埼玉って、あんまり雪が降らないじゃないですか。

しかも最近では「怪談」の研究が進んでいまして、どうも八雲の家に入りにしていた女中さんからこの話を取材したことまで分かっています。そして、その女中の出身地を調べますと、武蔵国西多摩郡調布村であることが分かります。そして、そこで「当地で起こった」と言い伝えられているんですね。ちなみに武蔵国西多摩郡調布村、現在は東京都青梅市と呼ばれている地域です。

手前味噌な話で恐縮なんですが、実はこの青梅市というのは筆者の父方の実家があるところでして、それなりに土地勘もあるんですが（といいますが、調布村っていうのは筆者の一族が住んでいる地域です）、とてもじゃありませんが大雪が降るような地域じゃありません。ちなみに確認してみんですが、最近では一年に雪が二、三回、うっすらと降ればいい方だそうです。

うーん、ってことは、その調布村の女中さん、相手が外人なのをいいことにあることないことホラを吹いたのでしょうか。いえいえ、そうじゃないんです。

この女中さんが生きたのは気候が温暖傾向に変わってきた明治時代ですが、このお話の成立年代自体はもっとさかのぼります。恐らくは江戸時代にまで至るでしょう。江戸時代というと丁度小氷期真っただ中。江戸時代の日記などを見ても、かなり雪が降っているものとされています。

そうなんです、小泉八雲の雪女が東京人であつたとしても何の問題もないのです。

ただ、現代、青梅市に雪女伝説を偲ばせるようなものは殆どありません。

そもそも青梅が八雲版雪女伝説の発祥地だとして存じない方も多いくらいです。それは、冬になつてもあまり雪が降らなくなつてしまつて、今一つ説得力に欠けるからかもしれませんね。

ともかくも。

小氷期は意外なところで変な影響を残しているのです。今では雪がほとんど降らないような地域に雪女伝説なんていうあからさまに雪国っぽい伝説が残っているというアンバランスな結果を残して。

なんといえますか。我々が“日本”と捉えている島の中も、百年も前には随分とその様相が異なるかもしれないね、というのが今回のお話の結論です。

13、 「小氷期の置き土産」 （後書き）

補足

雪女伝説は日本中にあります。が、大抵の地域の雪女は山姥の雪山バージョンのような存在で、おばあさんとして語られることの多い存在でした。八雲版（というか青梅版）雪女の新しさ・面白さというのは、雪女が若い女で主人公と夫婦になるという点なのです。もっとも、その要素が何に起因するものなのか（八雲の脚色なのか、それとも青梅版雪女の異伝なのか、あるいは江戸文芸の影響なのか）は分かりませんが。

14、 「日本人って無宗教？」

よく日本人は自分たちを指して、「無宗教だ」と明言して憚りません。しかも、胸を張って。

いや、世界的に見ればあんまり褒められたものではないんですよ、無宗教。イスラム圏、キリスト教圏からすれば、異教徒ならまだしも、「何らかの神を信じていない」なんて言ったらまるで悪魔でも見るかのような目をされるそうです。それに、「宗教は社会の毒だ」と言って憚らなかつた社会主義の影響もあつて、宗教的価値を否定する行為はあんまりいいこととはされていません。

とか言いつつ、筆者も割と無宗教者だったりします。積極的な事を言えば、組織化した宗教というものにどうしても感情移入が出来ないという、まあ恐らくは皆さまと同じスタンスなのかなと思います。

けれど、日本人が宗教に対して懐疑的になったのって、実はそんなに古い話ではありません。日本史を掘り返してみると、日本人って結構宗教好きな人たちだったことが分かります。

今日のお話は、日本人と宗教のお話です。

日本の宗教史を最初から語るには、人類学・考古学的見地からのお話になってしまいます。

恐らく、「日本人」（考古学的な見地でこの称呼を使うことは間違っています、あえて使います）が最初に信奉していたのは自然の精霊たちでした。自然に存在するありとあらゆるものには魂が籠り、人間を見守ったり、逆に危害を加えてきたりする。人智を超えたこれら精霊と如何に付き合っていくか。これが原始的な宗教・アニミズムです。これは全世界、大体どの人類もこのような宗教観を持った後、少しずつそれら精霊たちが人間的に描写されていき、やがては神話が誕生するに至ります。日本でもそれは例外ではありません。

せんでした。太古日本人たちが信じた精霊たちはやがて人格や神話という物語において役割を与えられ、神話が完成します。日本の場合、それが古事記や日本書紀を飾っているわけです。こうして形を見たのが、神道なんですね。（実は、神話の成立には現実の政治的力関係が大いに影響しています。まあ、これはおいおいご説明させていただきます。）

そしてその後、日本に入ってきたのが仏教です。入ってきた当時日本は大騒ぎでした。丁度時は蘇我氏がブイブイ言わせていた頃です。あくまで神道を守ろうとする物部守屋と、仏教を信じてもいいじゃないという蘇我馬子との争いが勃発します。それで一時仏教大好き蘇我氏が権力を握ったかと思えば、乙巳の変（大化の改新）で神道大好き中臣鎌足が蘇我氏を滅ぼしちゃったりと仏教対神道の血で血を洗う抗争が続くんですが、結局は「先進国・中国で流行っててナウいから」という理由で以って、仏教も日本に定着します。

この後、日本の宗教史で大きな扱いを受けるのが神道と仏教です。日本の宗教史を追っていくと、神道と仏教がくっついたり離れたたりしながら展開されています。もちろん、その埒外に存在するものもあります。例えば陰陽道。これは中国の陰陽五行に影響を受けて成立した卜占術・呪術です。とは言いましても、時代が下るに従って陰陽道も神道や仏教に吸収されたり、混交したりして生き残っていきます。日本の宗教史において、如何な宗教も完全に神道・仏教という二大ラインから逃れることは出来ません。例えばキリスト教。江戸時代に入って禁教とされたのは周知のとおりですが、隠れキリシタンたちは聖母マリアを無理矢理観音様と習合させて“マリア観音”をなし、信仰の対象にしていました。もちろんこれは自発的な混交というわけではなく、圧力によるものだったのは言うまでもありませんが。

話は前後しちゃいます。奈良時代の中ごろまでは、割と日本の宗教は国家や公権力による後ろ盾がありました。ところが、墾田永年私財法の施行に伴い土地の私有化が始まるに至り（注釈：当時の日

本は律令制を敷いていました。律令制における一番の肝は、“土地は国家の所有”である点です）、色々あってお寺や神社に土地が集中することになります。これにより寺社勢力が権力に対してある程度の独立を見るようになります。

国家からの支配を離れた宗教は、色々な効果を生むようになります。例えば、仏教と神道が混交し始めます。具体的には、仏教と神道を無理矢理一つの世界観にまとめてしまおうとする試みがなされるんですね。その結果、明治維新にいたるまで「神様は仏様が別の形を取って降りてきたもの」という本地垂迹説が主流となります。

また、色んな新宗派が誕生します。鎌倉新仏教といわれる諸派はまさにその流れに沿って存在しています。

中世って、かなり宗教が熱い時代です。一般民衆によって宗教が熱狂的に受け入れられます。一向一揆や法華一揆が頻発し、一向一揆に至っては一つの国を奪ってしまいました。一向一揆は一向宗（浄土真宗）、法華一揆は法華宗（日蓮宗）の一揆なわけですが、つまり当時の日本人たちには宗教を旗頭に蜂起するだけの宗教的熱気があったということです。

ちなみに、その宗教的熱気は江戸時代になっても衰えません。もちろん一揆のような形ではありません。その代わりに他宗派による法論の応酬が盛んになります。余りに盛んになり過ぎて、かの大岡越前もその対応に手を焼いていたというエピソードもあります。

そして幕末になると、宗教的な熱気が一気に高まります。社会不安とともに色々な新宗教が発生するんです。これがのちに教派神道としてまとめられ、神道として扱われます。そのほかにも、「伊勢神宮の神札が舞った」という都市伝説から発生した「ええじゃないか」なども宗教的なムーブメントと位置付けることが出来るでしょう。

明治時代に入ると状況が少し変わります。神道の国教化に従い、仏教が風下に置かれるようになったんですね。幕末に発生した天理教を始めとする新宗教が教派神道として国家の庇護を受けるのもこ

の時代です。

明治、昭和初期にかけての宗教史を語るにおいて見逃せないのは日蓮宗系宗派の隆盛です。かの宮沢賢治や、昭和期稀代の戦略家であつた石原莞爾も日蓮宗の信者として有名です。それに、現在でも日に影に力を持っている法華宗系新興宗教団体・創価学会の母体である創価教育学会もこの時代に誕生しています。まあ実は、この日蓮宗ブームによって日蓮宗の教義である鎮護国家思想（＝神風思想）が国内に蔓延し、結果としてあの敗戦にまで至る“神国日本”という誤った認識を生みだしてしまうわけですが。

と、こうやって戦前までの宗教史をいい加減に眺めてみますと、割と日本人、色んな宗教にハマっているんですね。

で、ここからは私見ですが、日本人は未だに宗教が好きなんだと思っんですよ。

近代の日蓮宗ブームの残滓とでも言うべき創価学会は未だに日本の巨大新興宗教団体として存在しています。それに、日本人は宗教そのものを信じなくなったかもしれませんが、宗教的なものは滅茶苦茶信じてます。例えば無宗教者の筆者でさえ、朝のテレビから流れてくる占いを信じています。お盆には墓参りしますし、幽霊の存在を信じる人が一定数います。明確な神の形を想像しなくなった日本人ですが、なんとなく自分たちを見守っている“人間を超えたモノ”を信じている節があります。

良いにせよ悪いにせよ、日本人は宗教的なものに憧れているのではないのかなあ、というのが筆者の感想です。

15、 「日蓮宗不受不施派を知っていますか」

さて皆さん、江戸時代の鎖国をご存知ですよ。

はい、1645年より行なわれました、中国・朝鮮・オランダ以外との交易を中止して、交易権をすべて幕府が持つという制度の事です。これを以って、日本は海外からの情報をほとんど遮断されてしまいました。これによって極めて独自色の強い文化が生まれ、それが後に“ジャポニズム”として西洋でウケたのは先に説明させて頂きました。ただ、この鎖国によって日本は外を意識しなくなり、結果として諸外国の爆発的成長に追いつけなかったという歴史があります。そのために日本は明治維新で血を流し、清と戦い帝政ロシアと戦う羽目になったんです。まあ、何事にも善し悪しはあるものです。

そして、鎖国政策とほぼ時を同じくして確立した制度が寺請制度です。

どういうものかというと、日本に住んでいる全ての人を幕府の認めた諸宗派の寺に登録させたものです。戸籍のない時代、人民統制の手段として寺が用いられたわけですね。

では問題です。

この寺請制度、何を取り締まるための制度でしょうか。

……と問題を出したところで、中学校や高校時代の勉強を覚えていらつしやる方はあんまりいないと思うので、ひつぱらずに学校で教わった模範解答をお教えしますね。先生が教えてくれた答えはこうです。「当時邪宗とされたキリスト教を取り締まるため」。

ああー、もちろんこれでも正解なんです。確かに寺請制度は島原の乱で猛威を振るったキリスト教への弾圧の意味もありました。もちろん、学校の先生が教えてくれたこの答えも正解です。

ただし。実はこの寺請制度は、「日蓮宗不受不施派」を弾圧することも目的としていたんです。

「日蓮宗不受不施派」とは？

それを説明する前に、日蓮宗についておさらいしましょう。

日蓮宗とは、鎌倉時代の僧・日蓮（1222～1282）の開いた宗旨です。比叡山で修業したのち、法華経という経典が唯一この世の人々を救うことのできる経典だと考え、鎌倉にて布教活動をするに至ります。その活動はお坊さんとしての活動だけにとどまらず、時の権力者・北条時宗に「近く謀叛が起こるぞ、外国から敵が来るぞ」という趣旨の書状を送っています（「立正安国論」）。ちなみにこの後、「法華経を信奉すれば万事解決！」と書いてある辺り、なんとなくほっこりもしますけど。

特筆すべきはその攻撃的な性格です。日本人と言えば聖徳太子以来「和を以って貴し」なメンタリテイの中、日蓮は「真言亡国、禅天魔、念仏無間、律国賊」と他宗をめちやくちやにこき下ろします。もちろん反発も大きく、他宗はもとより当時の権力者からも恐れられ、たびたび弾圧されています。

ともかく、この他宗を認めないという姿勢は、日蓮宗にある教義を作り出しました。

それが不受不施義と呼ばれるものです。

つまるところ、「日蓮宗の信徒以外から布施を受けず、日蓮宗以外の僧に施しをしない」という考えです。他宗を認めないために、他宗はすべて邪宗なんです。なので、他宗派の人から施しは受けないし、他宗派の僧に何ら施しをしない、という論理展開なわけです。ただ、この日蓮宗の姿勢は時代の変遷に伴って転換を求められます。

この不受不施が可能だったのは、寺社勢力が一定の勢力を誇っていた戦国時代の中ごろくらいまででした。戦国時代が進展し、武家勢力である織豊政権が日本津々浦々にその権力を浸透させるようになると、日蓮宗の不受不施にも限界が出てきました。

つまるところ、日蓮宗が武家政権に屈服する日がやってきたんで

す。

織豊政権末期、豊臣秀吉が天下統一を成し遂げたころのことでした。豊臣秀吉が各宗派に出仕を命じてきたんです。この際、日蓮宗は揺れます。ここで秀吉の出仕を受けてしまえば不受不施義に反してしまふ。かといって出仕を断れば、天下人秀吉によって日蓮宗そのものが攻撃されてしまふ。結局、日蓮宗の主流派は出仕を受け入れることにしたんですが、一方で不受不施義を護持する派に分離します。この不受不施義を護持する派が後の「不受布施派」です。（正確には、室町時代頃には随分日蓮宗も丸くなりまして、他宗との協調路線を歩んでいたのですが、どの時代にも原理主義的な事を言う人はいるもので、室町時代頃には「不受不施派」の黎明はありました。）そして不受不施派は、秀吉の出仕を蹴ります。

この逸話から分かる通り、不受不施派は反権力的性格を持っていました。いえ、正確には、特定の権力になびかない性格を持っていたと言えます。

権力者から見れば、これほど恐ろしい集団はないでしょう。ある意味で、権力を否定する集団だったんですね。

ゆえに、秀吉の後に天下人として立った徳川家康は、不受不施派を危険視します。不受不施派にちよっかいを出し、その中心的な僧を島流しにしたりしています。

その家康の路線を幕府は引き継ぎます。一度は宗派として許された不受不施派ですが、結局幕府と対立することとなります。寺請制度が定められて後に、幕府は不受不施派を認めないという姿勢を取ります。

実は、寺請制度で幕府が禁止したかったのは、日蓮宗不受不施派だったんです。

鎖国などによる江戸幕府の宗教政策を語ろうとすると、どうしても「切支丹弾圧」という言葉が脊髄反射的に出てきます。それも間違いではありません。けれど、切支丹弾圧の裏で、こういった宗派

があつたということも忘れてはならないんじゃないかなあと思うんですよ。

P・S・

一応書いておきますが(つてか前回も書きましたが)、筆者は無宗教者です。別に特定の宗教を信じているわけではありません。筆者の宗教へのスタンスは、「一定の敬意は払うけど、歴史的な視点における評価以上の敬意は払わない」というものです。

ご了承くださいませませ。

16、「最近は犯罪が無動機化している（笑）」

「最近、物騒になって嫌やわあ」という呟きをよく耳にします。

これ、本当によく耳にするんですが、本当でしょうかねえ。

総務省の統計局が発行しています犯罪の統計などをみると、戦後間もなくから現在までの推移がすっかり載っています。それを見ると、戦後間もなくは多かった殺人・強盗・強姦などの凶悪犯罪が、現在に至るに従って減少傾向にあることが分かります。また、親殺しや子殺しといった犯罪も減少している傾向にあります。窃盗などの軽犯罪は増えたり減ったりしていますが、これは仔細な検討が必要になるのではないかと思います。具体的には、戦後間もなくの間は“生活の為”の窃盗検挙が多かったのに対して、現代では万引きでの小遣い稼ぎや自転車泥棒、傘泥棒といった生活の為とは少々ベクトルの違う軽犯罪が目立っているようです。

実は、現代って凄く高いレベルで安全性が確保されている時代なんです。

もちろん、そんな現代でも親に虐待された末に命を落としてしまふ子供は一定数いますし、殺される人や強姦される人もいます。もちろん、被害に遭われた方からすれば意味のない数字であることは重々承知の上で書きますが、統計的には、現代日本が日本史上でもかなり安全な時代なんです。

さらに、評論家連中はよく、「現代的犯罪」と犯罪を囃したてて、こんなことを言います。

「最近の殺人事件は“故なき”殺人事件が増えている。“キレた”から殺した、とか、“むしゃくしゃして……”といった短絡的な犯罪が目立っている。これは今まで無かったことだ」と。

これ、本当ですかねえ。この言説、やたらと人を扇動したがるマスコミの文法に乗った物のように思えてならないんですが……。ちよっと、反論してみましよう。

ただし、一介の歴史バカという視点で。

江戸時代における愉快犯っていうとまず思い浮かぶのが、“辻斬り”ですね。

江戸時代という時代は刀に関する規制があまりない時代でした。割と知られてはいませんが、刀そのものの所持は武士でなくとも問題ありませんでした。武士身分の人は大小の二本差しという特権がありました。それら以外の身分の人でも脇差だけなら差してもいいことになっていました。こう言っただけなんです、あの時代、誰が刀を所持していても不思議ではない時代だったんですね。

その中には社会に恨みを持つ人や、単に刀の切れ味を試したい、あるいは故もない人たちが、人を斬る辻斬りとなってしまう例が出てきたんです。この辻斬り、警察機構が整う江戸時代中期に至ってもなお根絶されることはありませんでした。

なお、文化年間には、“槍突き”という辻斬りが出ました。槍で人を突き殺すというとてもなく目立つ辻斬りなんです。この事件の犯人は幕府の禄を食む侍・御家人だったといわれています。割と安定的な身分にあった御家人が槍で辻斬りを行なうという背景には、強盗目的なんていう理由は思い浮かびません。恐らくは故なき事情に苛まれ、犯罪に手を染めてしまったのでしょうが、その御家人の心中をはかるものは何も残ってはいません。

あと、歴史上で知られる故なき殺人未遂事件といえば、「松の廊下刃傷事件」が挙げられます。

いわゆる忠臣蔵騒動の端緒となる事件であり、皆さんご存知のことでしょうから、ごくごく簡単に説明させていただきますね。

元禄14（1701）年、朝廷からの使者が江戸城にやってくるということ、その接待役についていた浅野内匠頭がその準備をしていました。その準備のさなか、浅野は朝廷の儀礼や有職に詳しく、接待役である浅野らのアドバイザーをしていた吉良上野介に斬りか

かります。

この事件、浅野が振るつたのが脇差であつたこと、浅野が半ば狂乱状態であつたこと、周りに人が沢山おり素早く対応できたことなどの要因が重なり大事には至りませんでした。

この事件における浅野の動機について、色々な事を言われています。吉良がごうつくばりで浅野に賄賂を要求した、とか、吉良が浅野の奥方に横恋慕したたびたび浅野にいやがらせをしていた、とか、あるいは塩に関する利権で対立していたなどなど。

なんでこんなに諸説あるかというと、当の浅野が何も語らないうちに死んでしまったからです。実際には「遺恨があつたので斬りかけた」という証言を残していますが、その遺恨の中身については話すことはありませんでした。そして吉良側も、「恨まれるような覚えはないんだけどなあ」と取り調べに答えたことによって、結局遺恨の正体が分からないまま、この件は浅野に切腹を申しつけることによって解決されました。

ただこの事件、本当に遺恨なんてものがあつたのか謎なんです。

俗に、浅野が斬りかかった時、「この前の遺恨覚えたるか！」と絶叫したと伝わっていますが、その話が出てくるのは大石内蔵助以下47士による討ち入りが成功して後の事です。どうも実際は変な絶叫を上げながら斬りかかった模様なんですよ。

そして浅野は癪癢持ちだったという話も伝わっています。そう考えていくと、どうも浅野はいわゆる“キレた”状態で吉良に斬りかかったようなんです。そうすると、「そもそも遺恨なんてあつたのか」ということになってきます。この「浅野性格説」は、あの刃傷事件の真相の有力説の一つとされています。

二つばかり例を出しましたが、実は昔から故のない事件は沢山起こっているんですね。
というより。

人は故なく他人を殺してしまう生き物なんです。

こういった犯罪は混乱期には目立ちにくいんですが、平和な時代になると他の犯罪が減る分、逆に目立ってしまうだけのことなんです。

確かに、こういう事実を認めてしまうことは恐ろしいことです。連日テレビで報道される極悪人が、実は自分とまったく違う一人の人間でしかないという事実を認めてしまえば、それは自分すらもそういった極悪人におちてしまう可能性をはらんでいますから。そういう意味では筆者もそう。筆者とて、もしかしたら故なき理由に踊らされて凶悪な犯罪に手を染めてしまう可能性を秘めているんです。

歴史は人間というものの危うさを教えてくれます。

17、「旅っていいなあ」

今回書くお話、本当は前作のエッセイで書くべきことだったんですよ。

ごく一部でそれなりにご評価いただき、それ以外では見事にスルーされました前作エッセイ「歴史・時代小説家になろう！」では、歴史小説や時代小説の書き方を紹介するというひどく恥知らずな事をしていたんですが、思わず描きそびれてしまったモノも結構多かったですよ。あのエッセイを脱稿して早数カ月がたちますが、そうやって時間を経れば経るほど「あれを書きそびれた」「あれに言及しそびれた」みたいなことが多いんですよ。

とは言いまして、このエッセイをあのハウツーエッセイの続編にするつもりはさらさらありません。あくまでこのエッセイは「歴史バカ」を量産しようという意図のもとに紡がれているエッセイなので。

なので今回は、「歴史バカ的旅行のススメ」をお送りしたいと思います。

そもそも、日本を旅行する場合、その目的は割と限られてきます。結局日本人が国内旅行をする目的って、食い倒れか湯治か見学かになると思っんですよね。そして、観光で押している処の多くはその郷土の歴史をクローズアップしていることが殆どです。そもそも歴史観光がしやすいようになっているんですよ。

また、江戸時代に幕藩体制が完成するので、大抵どこに行っても江戸時代の政庁・城が存在します。明治に入って破却された城や、先の大戦で燃えてしまった城もありますが、昭和の後半頃に「おらが街にもシンボルを！」というノリでかつてあった城を復元する動きがありまして、結果日本津々浦々に不死鳥のごとく城が復活します。

あとは大河ドラマの影響が馬鹿に出来ません。

東京都に日野市というところがあります。かつては徳川幕府の天領だったので特に近世のお城があるわけでもなく、甲州街道の宿場町であったこと以外には特に目立ったことのない地域です。現在では、東京に勤めに出ている方のベッドタウンの一つです。ところが、数年前に俄然歴史ファンの聖地となりました。大河ドラマ「新撰組！」の放送によって新撰組人氣が復活、新撰組副長である土方歳三の故郷である日野が大きくクローズアップされることになりました。そして、この機を日野は見逃しませんでした。日野市や日野市商工会は新撰組関係の散歩コースの整備やイベントなんかを開催したり、資料館を整備したりして新撰組で町おこしを図り、事実それが成功しました。実は、こうやって大河ドラマによって発掘される「歴史観光地」って多いんですよ。むしろ、日本津々浦々の商工会さんが、「ぜひうちの偉人を大河に！」と働きかけております。

とまあ概略を話したところで、初心者歴史バカの観光をレクチュールしたいと思います。

まずは旅行のテーマを決めましょう。「何を見るのか」をはっきりさせておくとなおよし。下調べの段階で、「今回は戦国時代を見よう！」とか、「越前和紙を追ってみよう！」と決めてしまえば、追うべきものが見えてきます。たとえば、あなたが武田信玄で旅行を立案するとします。そうすると、行くべき場所がおのずから定まってくるよ。山梨・新潟・長野あたりを車で回るのがよさげですよ（電車でもいいんですが、長野辺りは車で行った方が何かと楽です）。

そして次に具体的にどこを見るかを決めていきます。先の例だと、武田信玄からみの観光地ということで、躑躅ヶ崎城跡（現武田神社）とか諏訪湖、あるいは川中島古戦場跡なんかを巡ろう、ということになります。

そして、ここからが歴史バカの醍醐味、下調べです！

行くところやテーマの人物をこれでもかかってくらいに調べるんです。普通の観光をなさる方でしたら「下調べなんかしたら面白さ半減じゃないか！」ということになりますが、これ、歴史バ力的には是非して欲しい作業です。この作業をどれほどするかによって、歴史バ力的な楽しみ具合が後々変わってきます。

本当に穴があくほど史料を読みこんで、「もう観光なんて行かなくていいや」ってほどに調べた後、ついに本番です。

そうやって歴史観光に行くと、凄く面白いんですよ。

死ぬほど物を調べると、なんとなくその人物や地域に関してイメージが出来上がります。そして、そうやって作ったイメージというのは十中八九実物とはズレています。「あれ、意外にもここ……」とか、「へえ、実際はこうなってるんだ！」という感想を持ったりすることがあります。イメージと違うなあ、という驚きが、歴史バ力的には面白いのですよ。

プラス、そうやって先に全て調べておくと、なぞるだけの観光になっってしまうがちな歴史観光を深く楽しむことが出来るんです。

実は歴史観光で知りたいものって、歴史的事実じゃなくて、「あの偉人はこんなところに住んでいたんだ」とか、「あの人はきつとこんな喋り方だったに違いない」といったことではないでしょうか。そのためには地元の方と喋ったり、あるいは街の散策なんかをしたくなります。

下調べをしないと、観光地で歴史的事実をなぞる羽目になってしまうので、深く観光地を楽しむことができないんですね。もちろん、一般の方ならそれでいいんですが、歴史バ力は一般の方の楽しみ方が出来ないゆえに、こんな一見すると矛盾するような旅行をするんです。

実はこれ、歴史学者さんがやるフィールドワークの簡易版なんですよね。

まあ、歴史学者さんのフィールドワークの場合、もっとガンガン

と攻めるんですが（笑）。

18、 「兼好法師の憂鬱」

皆さん、古典は好きでせうか。

実を言うと、高校時代の筆者はすごい勢いで嫌いでした（笑）。高校時代筆者に古典を教えたW先生というのがやたらにつまらない授業を展開してくれたおかげで、文系にも関わらず古典の楽しさに目覚めないうまま高校を卒業してしまいました。なんといいですか、学問の楽しさを教えるはずの先生が、逆につまらなさばかりを教えていたわけで、まあ口くでもない話です。

と、どうして筆者がこんなにもW先生のことをこき下ろすかといえますと、高校を卒業した後になって、筆者は古典の楽しさを知ったからなんです。その余りの面白さに衝撃を受けました。「え、古典ってこんなに笑えるの？ こんなに含蓄に富んでるの？」。そうして気づけば色々な古典に手を出すようになりました。ちなみに筆者は江戸時代の随筆類がすごく大好きです。

結局ですね、筆者に古典を教えたW先生は、古典の“文学的価値”なんていう読者からすればひどくどうでもいいことばかり教えて下さって、読書にとって一番大事なはずの“面白さ”を教えて下さらなかったんですよ。国語の先生の割に野暮なお人ですね、と諧謔精神旺盛な江戸っ子のクォーターである筆者は涙をすすっている次第です。

……とまあ、もう定年を迎えていらっしやるだろうW先生をこき下ろすのは大概にしませう。

さて、今回のお話は古典に関するお話です。
ずばり、歴史バカ的な古典の読み方！ です。

皆さま、「徒然草」をご存知でしょうか。

鎌倉時代、神職家出身の出家僧・兼好法師によって書かれた随筆（『エッセイ』）です。仁和寺に隠棲し、当時流行の兆しを見せてい

た「隠者」を気取りながら、自分の見聞きしたことを書き留めているものです。全部お読みになった方にはお分かりのこととと思いますが、「徒然草」って本当につれづれなるままに書かれています。なんだか含蓄に富んだ話が出てきたかと思えば、クスリと笑える話、ちよつと虚無主義的な話、あるいは「最近ではカツオなんていう下魚が食事に供されている、嘆かわしいことだ」という呟きまであったりして、暇にあかせた兼好法師が本当につれづれと書いておられるのが丸分かりなエッセイとなっております。

「徒然草」の最終章に、「八つになりし年」という稿があります。そのあらすじは以下の通り。

——八歳のころ、私（兼好法師）は父に聞いた。「仏様って何？」。父は答えた。「仏様とは人間がなったものだ」。私はまた父に問う。「人間はどうやって仏様になるの？」。父は答える。「仏様に導かれて人は仏様になる」。「じゃあ、最初の仏様はどうやって仏様になったの？」。この問いに、「空から降りてきたか、土から生えてきたかしたんではないか？」と父は答えた。のちに父は、「息子に難しい問いを吹っ掛けられて、答えに困ってしまいました」と楽しげに他人に語ったという——

このお話、「徒然草」の中で浮いているんですよ。

そもそも、エッセイの最終章にあたる部分です。しかも、それまではあくまで他人の事を書いてきた兼好法師が自分の事を書いていく。ある意味、「徒然草」というエッセイの集大成に当たるといことが、一読する前でも分かるわけですね。

さて、ここからが歴史バカの本領発揮です。

結局のところ、歴史バカの本分は妄想とうんちくを無理矢理ジョイントさせることです。正確には、うんちくを重ねに重ねてモーションするといえますか。

このお話って、兼好法師という人間のジレンマが描かれているよな気がするんです。

前述のとおり、兼好法師は出家しています。出家というのはどのような形式にせよ、世間を棄てて仏の道を生きる覚悟の表明に他なりません。例えば源氏物語などでも、現実世界に疲れてしまった人が出家する様はよく描かれています。事実、兼好法師は仁和寺に入って出家をしているわけです。そして、兼好法師の仏教へのあこがれ、ある意味で隠棲へのあこがれが、この最終章で子供のころから存在したものだっただけのめかされているんですよ。

けれど彼は、徒然草の最終章で父親の事を語っている。これって実に興味深いんです。父親というのも、“世間”に分類されるものに他なりません。兼好法師は仏教的なものに憧れながら、それでも父親という“世間”を懐かしげに語っているんですよ。

これって、まさに兼好法師の姿勢そのものです。

仁和寺に隠棲する身でありながら、俗世間に生きる人を眺め、面白いことや心に残ったことを書き遺すさまは、「八つになりし年」に描かれている兼好少年そのものです。

三つ子の魂百まで、とはよく言ったものです。

それ以上に、兼好法師の語る父親像が本当に素敵です。息子に難題をふっかけられて「息子にしてやられてしまいました」と笑う父親を、兼好法師はまったく悪意を込めて書いていません。むしろ、どこか愛着を込めて描いています。

そういうところに、兼好法師さんの人間性が見えるような気がするんですよ。

こういう読み方ができるようになってから、筆者は古典が大好きになりました。

P.S.

今回、枕話を書くに当たり、W先生をこき下ろすこととなってしまいました。

大変W先生には申し訳ないことは思っておりますが、もしW先

生がこれを見ていることがありましたら、言わせて下さい。

あなたが筆者に施した三年間の授業のおかげで、筆者は目の前にあった豊饒の世界から遠ざかっていました。かねがね先生は「古典の面白さを伝えたい」とおっしゃっておりましたが、あなたはその反対の事をなさっておいででした。筆者は一戯作者として、あなたの教育は間違いだったと言わせて頂きます。それが、小説を愛し古典を愛する、一風流人たるべき戯作者としての責任だと思うからです。

面白さを伝えるはずがつまらなさを伝えていたなんて、とてつもなく滑稽な話じゃありませんか。

19、「NINZYAから忍者へ」

日本人の有名人といえば？

今でこそ、「世界のキタノ」、「ケン・ワタナベ」、「イチロー」など、様々な日本人が外国で活躍して下さっているおかげで減ってきましたが、昔は「ゲイシャ」だの「サムライ」だのと、とんでもないことを言う外国人がいたといいます。外国人にとって日本人は「エビバリサムライスゲイシャ（？米米クラブ）」なんでしょう。とはいっても、外国の人が「織田信長ってクールだね！」とか、「松永久秀ってクレイジー！」とか、「清河八郎GOOD！」と、いやに日本文化とか歴史に詳しくてもなんだか肩すかしな気がするんでしょうけど。

ともかく、特に欧米での「勘違い日本文化」において、サムライとともに重要な地位を占めているのが「ニンジャ」でしょう。

漆黒の衣をまとい、手裏剣やクナイなどの忍び道具を駆使して敵の城に侵入し、情報を盗んで帰ってくる。時には敵に偽情報を流し混乱を誘い、数々の人間離れた術を用い一騎当千の活躍をする。その様はまさにニッポン版スパイ！ きっと外国でニンジャが一定の人気を持ち続けているのはジェームズボンドもびつくりなスーパーヒーローぶりにあるのでしょう。

変身したり空を飛んだり大ガマを呼びだしたりするニンジャについて、「ガイジンはこんなものを実在してるって信じてるのかよ！？」と笑う向きがありますが、その実日本人の中で、「実際の忍者ってどういう実態だったのか」を指摘できる人は少ないのではないかと思います。

というわけで、今回は「忍者の実情」がテーマです。

まず、現代において「忍術」として伝わっているもののほとんどが、江戸時代に成立したものであることを明らかにしておかねばな

りません。

現代忍術として知られているモノの多くは、江戸時代初期から中期頃、かつて忍者として働いていた一族が自分たちの使っていた技術をまとめたとされるモノが殆どです。さらには、忍者の武器の代表として知られる手裏剣。あれが武術としてまとめられるのは江戸時代の中期頃です。よく創作の世界にはさまざまな手裏剣が登場しますが、これだけ手裏剣がバラエティに富んだものになるのもかなり後の事です。

で、江戸時代の中期というと、世の中自体が随分平和になってきたこと、かつて諜報活動を行っていた忍者層が武士として特権階級化したことにより、この時代、忍者と言われる人たちのほとんどがその家業を捨てています。それが証拠に、徳川八代將軍吉宗が「御庭番」という諜報組織を作った際、かつて戦国時代に忍者として知られる服部半蔵以下の伊賀衆を既に抱えているにも拘らず、御庭番に彼らを登用することはありませんでした（まあ、御庭番という組織が忍者的な諜報活動を行っていたかといえば疑問符が残ります。実際には諸国や將軍周囲の内情を視察する程度の役職だったようです。さらに、伊賀者を御庭番に用いなかったのは、紀州家から將軍になったという吉宗の難しい立場の故とも言われています）。ある意味、江戸時代中期の忍術書叙述の背景には、失われていく先祖の家業を書き遺すという意味が濃厚だったんです。

では、戦国時代にバリバリ活躍していた忍者ってどういう存在なんだ？ という話になります。

史料が少ないので何とも言えないんですが、戦国時代なんかの記録を読むと、忍者と呼ばれる人々にはいくつかの類型があることが分かります。

「特殊技能者」としての忍者、「ゲリラ戦を行なう地侍」としての忍者、よく我々のイメージする「諜報活動者」としての忍者です。忍者として想像されるイメージとして、「煙や火を使う」像があ

ります。もちろんこれは江戸時代に成立したイメージですが、戦国時代に出てくる忍者たちも巧みに火を用いています。戦国時代に火というと鉄砲です。雑賀衆などの鉄砲衆と呼ばれる人たちが一定数いました。また、穴太衆のような石垣建造の特殊技能衆がいます。この人たちは必ずしも忍者と分類されるものではありませんが、江戸時代に残る忍術書を読むと、そういった特殊技能者たちの知識の残滓を見ることが出来ます。忍者のルーツのひとつにそういった特殊技能者の影を見るのは案外容易だったりします。

高名な忍者として知られる服部半蔵さんがどういう武器を用いて働いていたか、皆さまご存知ですか？ 鎖鎌？ くない？ いやいや、彼の武器は大身槍です。本当です。半蔵所用の槍がすっかり残っています。伊賀衆って、割と普通の侍衆だったようなんですよ。ではなぜ彼らが忍者として扱われているかというところ、そのヒントは伊賀衆躍進のきっかけともなった「伊賀越」に理由があります。伊賀衆のような小さな侍衆が生き残るためには、通常の戦い方では勝てません。どうしても山を恃みとして自分たちしか知らない山道を使い、ゲリラ的な戦い方を身につけるしかありませんでした。伊賀越の際に徳川家康を救ったのは、伊賀衆がゲリラ戦や諜報の際に用いていた間道だったんです。山に精通していた武士集団。忍者にはそういう面があります。

また、そういったゲリラ戦を戦うためには、どうしても諜報が大事になります。寡兵で多兵を破るためには事前には世間の動きを知っておく必要があるんです。そのため、周辺諸国に諜報役を放っておくことがよくあったようです。また、山岳部に住む彼らには、修験者との関わりもありました。修験者というと諸国の山から山を修行に回る修行者たちですが、そういった人たちとの交流の中で外の情報を仕入れるうちに、彼らの中で情報が蓄積されていたものと考えられます。また、伊賀衆の場合だと都から近いこともあり、都の戦火を逃れて山に逃げてきた人々により情報がもたらされました。能動的・受動的な情報収集により、彼らは諜報活動者としての側面を

持つて来たんです。戦国時代を生き残るために。

戦国時代の忍者というのは、戦国時代において「ある特殊職能を持った一団」と定義することが出来そうです。もちろん、その多くは情報収集者としての技能を買われての事です。

と書くと、「なんだか興ざめたなあ」というご意見もあるうかと思いますが。

それってつまり、我々がかなり忍者という存在を見誤っていたという証左でもあります。

が、しかし！

実は、華々しい活躍をした忍者というのも結構いたりします！

今回は、創作の世界の忍者のように大活躍した実在の忍者を紹介したいと思います！

待て次回！

19、「NINZYAから忍者へ」(後書き)

これを書いたのは約半年前なんですが、妙にタイムリーになっちゃ
うんですよねえ、このエッセイ。

20、「やっぱり忍者ってすごいじゃねえか」

前回、「忍者ってそんなにすごい人たち？」という疑問を元に一稿を書かせて頂きました。何と言いますか、忍者というものに対して憧れを持つておられた方からすると「なんつうことを！」と思われることかとは思いますが。とはいいまでも、現在人口に膾炙している忍者像っていうのは、江戸時代の文芸である講釈、そしてそれを編集出版して人気を得た大正、昭和期の出版社・立川文庫の影響が大なんです。以前にも書きました「真田十勇士」だって、実は講釈や立川文庫の影響によって像が定まったヒーローたちです。

ともかくですね、講釈や立川文庫、または近現代の歴史・時代小説家によってスーパーヒーロー化してしまった忍者の実像を追ってみると、実は案外地味な存在でした、というのが前回のお話でした。でもですね。

絵に描いたような活躍をした忍者というのもあります！

今回は、現実居た、「絵に描いたような忍者」を紹介します。

とはいいまでも、忍者と言われる人たちの活動は文献上、あまり目立ちません。

そもそもが忍者の担当する「情報収集・暗殺」という行為は闇の仕事なのです。もちろん戦国時代には忍者を駆使した群雄割拠がどこにでも起こっていたはずですが、つまびらかには残っていません。

結局のところ、忍者という存在が文献史料上可視化するのは、幕藩体制が完成した江戸時代を待たなくてはなりません。

時は江戸時代。三代將軍家光の頃。

この頃の日本、実は不安定な時代だったと言われています。家康

から家光の頃は、少しでも不穏な動きの在る大名は軒並み改易していました。これってつまるところ、「絞兎死して走狗煮らる」そのものですね。福島正則なんてまさにその代表でしょう。ともかく、この時代、些細な理由で大名家が数多くお取り潰しになっています。そうやって大名家がお取り潰しになると、当然のことながらその大名の臣下たちが失職します。上手く再就職できた者はそれでいいんですが、浪人になってしまった中には幕府を恨む者たちが出てきました。そして、それら浪人の怒りを吸い上げる形で由比正雪といった扇動家や天草四郎といったカリスマが立つに至ります。

ここで大いに活躍したのが忍者です。

島原の乱が勃発した当時、おおいに忍者が使われた形跡があるんですが、その中にある甲賀衆の活躍が残されています。

一揆衆の立てこもっていた城に、なんと甲賀衆は潜入したと言われています。一揆衆三万七千といえますから、それはもう戦国さながらのお城です。

おお、「梟の城」！

とはいいまでも、その目的は敵将の首を上げることではありません。

実は、城に残る兵糧の調査だったと言われています。

相手の兵糧がどれだけ残っているのか、これは喉から手が出るほど欲しい情報でした。敵の士気を探るに当たり、兵糧は一つの計量的な尺度なんです。腹が減っては戦は出来ぬと申しまして。

ちなみに、甲賀衆の内偵により、兵糧は殆ど尽きかけているという一揆衆側の内情が幕府軍にもたらされました。そして、この情報が一揆衆への総攻撃のXデーを決めるに当たり重要な情報となりました。潜入内偵調査なんてまさに忍者的ですけど、実際にそういうことが起こっているんです。

時は変わりました江戸時代の後期。

この時代は国内的には平和な時代でした。しかし、外圧の影が迫

つていた時代とわれています。江戸時代の外圧といえはマシューペリーの黒船来航が有名ですが、それ以前、松平定信が政治改革をしていた頃には既に日本の湾岸に外国船が出没するようになりました。

外国を意識するようになると、当然目が外国に向かいます。

実は、江戸時代後期になって伊能忠敬が正確な日本地図を作ったというのも偶然ではありません。もちろん、この時代に至って諸学が爛熟したという事実も見逃せないところですが、遠い異国を意識したことにより、当時の江戸時代人の中に「日本」の意識が生まれたと見るのも必ずしもうがった見方ではないと思います。

この時代に目立った隠密活動（なんだか変な日本語ですね）を行った人に、間宮林蔵がいます。

間宮林蔵といえば樺太（サハリン）が島であることを確認した最初の日本人として有名ですが、彼がそうやって樺太を探索していた裏には幕府の命がありました。つまりとところ、樺太（サハリン）はどういう地域なのか、ロシアの影響力がどれほど入っているのかを確認したかったのです。「樺太は島、ロシアの影響はまだ小さく清国人も入植しており、どここの帰属とも言えない地域になっている」という間宮の報告は、後に明治政府の北方領土獲得交渉にまで影響を与えます。

これだけでも彼の活動が隠密めいているんですが、彼が隠密として活躍するのはこの後です。

樺太（サハリン）から帰った彼は、勘定奉行の差配の下に入ります。そして彼は、密貿易に手を染めていた藩やその御用商人に内偵を行ない、事実その藩を減封に追い込んだ例（竹島事件）や、長崎の医師シーボルトが日本地図を自国に持ち帰ろうとしたことにより発生したいわゆる「シーボルト事件」において、シーボルトに日本地図を渡した人物をすっぱ抜いた例などが存在します（とはいいいましても、実はシーボルト事件におけるすっぱ抜きは間宮のフラインプレーというよりも、結果的にそうなってしまった、という側面が

強いんですけど）。

間宮は結局、「ロシア・清への内偵（樺太）」、「当時禁とされていた密貿易の検挙（竹島事件）」、「外国のスパイの検挙（シーボルト事件）」という、まさに忍者的な活動を目立った形で行なっているんですね。しかも、幕府の命を受けた形で。

間宮の活動を見渡すと、全てに外国との関わりが含まれています。間宮林蔵という人物は、江戸時代後期という時代だからこそ生まれ得た、まさに江戸時代後期の忍者なんですよ。

きつと、現代にも「忍者」はいます。

結局のところ、国家を代表とする組織が活動するにおいて、情報収集は永遠のテーマです。中には多少の非合法活動さえもいとわずに情報収集にいそしもうとする不屈きな組織もあるでしょう。事実、アメリカとロシアでも検挙していたスパイの交換なんていう事件が2010年に起こりましたよね。

忍者が魅力的なのは、もしかすると、現代の我々の隣にも存在しているからなのかもしれませんね。

っていうか、これをお読みのあなたももしかして……？

20、「やっぱり忍者ってすごいじゃねえか」（後書き）

補講

忍者の歴史って、実は飛鳥時代にまで遡ります。

かの聖徳太子が「志能備」なる人を用いていた記録もあります。というより、「情報収集をその任務とする者」が忍者だというのは、人間が国家を作り始めたあたりから忍者は登場していたのでしよう。

もちろん戦国時代にも、「乱破」「軒猿」「草」などと呼ばれた忍者がいて、一定の活動をしたとされています。中には後北条氏の風魔小太郎のように、華々しい戦果を残している例もあります。

ただ、戦国時代の忍者の活動はどうしても逸話的な面を超えないところがあります。説明上分かりづらい面もあるので、こうして江戸時代の忍者にしばって紹介させて頂きました。悪しからず。

21、「幕末」が真の意味で自由になる時代」

幕末って、歴史小説や時代劇でもすごく人気のある時代です。

本棚に行って歴史小説の棚を探ってみますと、戦国時代をモチーフにしたモノに混じって幕末を材に取ったモノが沢山出回っています。歴史小説だけではなくて、人文系の研究本や新書類などを見ても、やはり幕末関係の書籍は数多くあります。

幕末という時代は何より人気なんです。

あの時代はある意味で乱世でした。誰が勝者になってもおかしくはなかったですし、どのような権力形態に落ち着いたとしても不思議ではありませんでした。西洋列強に分割されてしまったり、あるいは西洋一国の植民地になってしまう可能性もあったでしょう。それがあれよあれよのうちに富国強兵・殖産興業の帝国主義を歩んでいくのは無限にあった当時の可能性の内の一つでしかありません。とはいっても、歴史というものは無限にあった選択肢の上において現実選ばれたものの一つを扱うものです。こうやって選ばなかった道について言挙げすることに意味なんてないわけです。

ただ、幕末という時代は、未だに想像の世界ですら自由になっていません。

だって皆さん、幕末という時代を否定的に描いた歴史小説とか映像作品を見たことがあります？ 正直、筆者はあんまり見たことがありません。

もちろん、時代の奔流にのみ込まれていく人々のことを、同情を以って描いている作品は沢山あります。けれど、その前提には「明治時代の礎になった」という救いがあるんですよ。そして、この「礎」という言葉から見えてくるのは、「明治維新は間違いではなかった」という共通認識なんです。

今回のお話は、明治維新と現代社会の関係です。

日本の宰相に、麻生太郎さんがいらつしやいました。

「漢字が読めない」と当時の野党に指摘され、なぜか国会で漢字クイズをやらされる羽目になった、ある意味で日本史上において一番敬意を払われなかった総理大臣と言えそうです。（なお、筆者はあくまで戯作者であり、有権者としての顔は現実世界に置き去りにしているので、ここでその是非を論ずるのはやめておきます。）

ところで、麻生太郎さんの高祖父（ひいひいじいさん）に、薩摩の大物維新志士・大久保利通がいること、皆様はご存知でしょうか。実はこれ、現代と明治維新の関係を如実に示しているといえます。

明治維新を為した新政府は、諸外国に負けない国力を身につけるため、内部では産業の発展に努め、外に向かつては漸進的な膨張政策を取りました。それを指して、富国強兵といえます。産業の発展により日本もまた産業革命を果たし、一流の工業国となりました。そして、その工業国としての財力で兵力を蓄え、第一次防衛線と目された朝鮮半島に足がかりを作ろうと躍起になりました。明治末期に起こった日清・日露戦争というのも、結局は第一次防衛線である朝鮮半島を取得するための戦いでした。

そして、日露戦争を終えた日本は、ようやく西洋列強に並ぶ国家と承認されるようになり、いわゆる不平等条約も撤廃される運びとなり、日本が第一次防衛線と見なしていた朝鮮半島の日本への帰属が明確化します。

そして、第一次防衛線を得た日本は、今度は第二次防衛線を得ようと動き始めます。

第二次防衛線。すなわちそれが中国東北部・満州地域でした。

満州地域を得るために、日本は（その是非はさておいて）様々な手を打ちます。満州鉄道を破壊することによって難癖をつけたりして、満州地域の中華民国からの切り離し工作を行ない、事実これが成功します。そうして、日本の傀儡国家・満州国が誕生します。

そんな日本の膨張政策にも、やがて破綻がやってきます。結局の

ところ、イギリスに代わる超大国にならんとしていたアメリカによって日本の膨張政策は粉碎されてしまいました。

そうして日本は、明治以来抱えてきた「膨張政策」を失うことになりました。

けれど、日本はここで明治以来の国是を失うことはありませんでした。確かに太平洋戦争（大東亜戦争）によって「富国強兵」のうち、「強兵」は捨てざるを得ませんでした。けれど、アメリカの核の傘のもと、日本は「富国」を捨てることはありませんでした。植民地を得て国力を獲得していくという「帝国主義」を捨てざるを得なかった日本ですが、「帝国主義」をすべて経済成長にシフトチェンジすることによって日本の帝国主義は命脈を保ったとも言えます。

1980年代後半のバブル景気というやつは、日本の“帝国主義”（経済的帝国主義とでも言い換えるべきでしょうか）が絶頂にあった時代なんですね。

そしてバブルが終わり長い不況の中にある現代ですが、現代すらも“帝国主義”の理屈に支配されています。「経済立国ニッポンを復活させよう！」というスローガンが、政治家の口から語られるわけです。

お分かりでしょうか。

現代日本は未だに明治維新の示した指針のままにあり続けているんです。

「富国強兵」。とうの昔に「強兵」を捨ててしまった日本ですが、未だにこの国は「富国」思想を諦めてはいません。そんな日本人にとって、明治維新は否定できないんです。なぜなら明治維新は現代に直接つながる歴史的変動だからです。明治維新を否定することは、現代日本を否定することにつながります。

つまり、「明治維新って間違いだったんじゃないか？」という異議申し立てが行なわれるのは、日本が“帝国主義”を真の意味で捨

てて後のことになるでしょう。

で、実はですね、現代日本には、明治維新の名残が沢山残っています。

歴史の授業では、マッカーサーが日本の「悪習」をすべて取っ払っていったような叙述をしていますが、そんなことはありません。むしろ、マッカーサーは日本に存在した様々な組織や制度を利用してGHQを運営していました。なので、戦前のまま温存された物もかなり数多いんです。

というわけで、今回は現代に残る戦前の制度のお話となります。

22、「官僚制度という遺産」

2010年の民主党党首選における小沢一郎氏の発言を聞きながら、筆者は膝を打っていました。筆者、それまでは小沢氏のことをダーティでよく本音が見えてこない政治屋さんだと思っていたんですが、投票直前の彼の演説を聞いた瞬間に、「この人と自分、歴史観が同じだ」と気付いたんです。

小沢氏は演説においてこう語っておいででした。

「明治維新以来続く官僚主導に終止符を打つべく……」

そうなんです。官僚主導というのは明治維新から直系で続く制度なんです。

明治維新がなり、東京に新政府が誕生しました。

もちろんこれは内戦によって成立した政權なので挙国体制とはいきませんでした。内戦の勝ち組である薩長土肥を始めとする雄藩の出身者・いわゆる維新志士たちと一部の学者・公家によって政府が運営されました。当時は行政府と立法府も未分化です。新政府は自分で法を作り、自分でその法を運営していました。

ところが、戊辰戦争の勝ち組で構成された新政府の政策は、色々なところで反感を買います。戊辰戦争で負け組とされた人々、新政府の諸政策によって不利な立場に置かれてしまった人々、地元では力を持ちながら何の発言権もない地主層などです。こういった人々は、やがて「自由民権」という言葉で理論武装して、明治政府に対抗するようになります。自由民権運動が盛んだったところを見ていくと、実は自由民権運動なるものの正体が反政府運動であることに気づかされます。（たとえば、東京都五日市に“五日市憲法条按”なるものが残っていますが、五日市というところは元徳川氏の大領でした。もともと反明治政府的な気概の強い地域です。）

明治政府は全国で広がる自由民権運動に危機感を覚えます。反政

府運動である自由民権運動を野放しにすれば、後々の国家運営に支障が出る恐れがありました。そこで明治政府は、「いや、まだ現在の状況だと時期尚早だけど、十年後には国会を作って皆さんの意見を聞くから、とりあえず今は矛を収めてよ」と自由民権運動家たちを懐柔する戦略を取りました。具体的には明治14年、明治天皇からの勅諭という形でこの約束がなされました（国会開設の勅諭）。

ところが明治政府側としては、自由民権家たちに国政を牛耳られるわけにはいきませんでした。

さっきお話したとおり、自由民権家たちは反政府運動家としての側面がおおいにありました。富国強兵という国是を果たしたい明治政府側としては、自由民権家たちをあまり国政そのものに関わらせず腹積もりはありませんでした。また、国会が開設された時に実際に議員となると思われる地主層。国家ビジョンも持たないだろう彼らに、国政に関し口出しをされることを明治政府は嫌ったのです。

そしてその国会開設に並行する形で、明治政府は官僚制度をさらに強固なものにします。正確には、明治初年から官僚制度の整備は進んでいましたが、明治十年に内務卿の大久保利通（おおくぼ としみち）が暗殺されたあたりから、さらに官僚制度の強化が図られます。

日本の官僚制度について語る際、山縣有朋（やまがた ありとも）さんという人がキーパーソンとなります。元は長州の維新志士、軍人さんです。明治に入ってから木戸孝允（きど たかよし）に次ぐ長州派維新志士の第二位として存在感を放ちます（一時期、干されていた時期もありますけど）。木戸孝允の死後は、同郷の伊藤博文（いとう ひろぶみ）とは政治的距離を置きつつも大正に至るまで権力を保持し続けた人です。

この人が、下級官僚たちの登用方法をまとめたんですよ。要は試験によって俊英を集めて国家運営の手足とする、という。山縣さんの頭の中には、「維新元老たち――上級官僚（維新志士出身）――下級官僚」というヒエラルキー構造の構想があったようです。

そうやって醸造された官僚制度でしたが、維新政府はこの官僚制

度を来るべき国会開設に伴う当て馬に用いようとしたんです。

超然主義です。つまるところ、「国会の意思に関係なく、我々政府は粛々と国家運営をしていく」という考え方です。事実、この超然主義は国会開設直後の内閣の基本姿勢となります。とはいいつつも、結局は大正デモクラシーが進展するに従い政党内閣が誕生するようになり、超然主義そのものは下火になります。大正時代に政治主導の時代があったんです（とはいっても、やっぱり実質は官僚主導だったことは否めませんけど）。が、政党政治は非常に移ろいやすい政治形態であり、政党政治が展開していくにつれ、国民の間にも政党政治に対する憤懣がたまり始めました。そしてその揺り戻しとして軍人という官僚による主導政治が行なわれるようになり、そうしてあの敗戦に至りました。

敗戦後やってきたマッカーサーは、日本の官僚制度の完成度に舌を巻きます。と同時に、この国を動かしていたのが政治家ではなく官僚であったということに気がきました。当時帝国議会には予算の審議権こそありましたが、基本的に立法権はありません。日本を動かしていたのは天皇でも議会でもなく、行政府の組織そのものだったのです。それに気付いたマッカーサーは、日本の官僚制度の保護に回ります。アメリカ本国に嘘の報告（「日本政府は実体として権力をあまり持たないただの役所であり戦争責任はない。日本戦後処理にあたりGHQの手足とすることに何の問題もない」という事実と異なる報告）をしてでも、なぜかといえば、GHQによる日本支配を穏便に行なうためです。

そうしてGHQが去っても尚、戦前の官僚制度のほとんどは温存されたままで現代に至っています。

いや、GHQのこの決定が悪いとは言いません。事実、この官僚制度の保護が、のちの経済成長の原動力の一つとなります。「官僚の夏」で描かれた世界も、結局は戦前から温存された官僚制度の中での出来事です。実は、官僚制度こそが日本の「富国強兵」を支えた大きな柱の一つなんです。

もちろん歴史的に大きな役割を果たしたからといって、現在のものに則していないとされる制度を手づかずにする理由はありません。ただ、官僚主導から政治家主導に切り替えるのは並大抵のことではありません。かつて官僚たちが行なっていた重要な政治決定を政治家が行なうということは、政治家のより一層の高度化が求められているということに他なりません。

歴史バカの一人として、筆者は官僚主導から脱却せんとする現代の政治に視線を送っております。一歴史バカとしての視線で以って

22、「官僚制度という遺産」（後書き）

なお、この講で小沢一郎さんのことを取り上げていますが、別にこれは筆者の政治信条を反映したものではありません。念のため。

23、「明治時代と参議院」

これを書いているのは2010年の11月なのですが、この時点から数ヶ月前に参議院選挙がありまして大騒ぎになりました。政権与党である民主党が大きく議席を減らしたこの選挙により、これ以降政府はいわゆる「ねじれ国会」の運営を余儀なくされました。

以前のねじれ国会の際のグダグダを見ている国民からは、「参議院って必要なの?」とか、「二院制って意味あるの?」という意見がちらほら出ています。とはいっても喉元過ぎれば何とやら。今現在ねじれ国会なんてことが目にならないくらい面倒なことがたくさん起こっておりますので(2010年10月〜11月の出来事を思い出して頂けるとこれ幸いです)そういったご意見は下火になっていますけど。

けど、「日本において二院制って必要なの?」というご意見はなかなか核心を衝いている面があります。

二院制っていう制度は、国内にいくつもの階級や権力構造が存在する場合に意味を為す制度なんですよ。

たとえばアメリカ。ここは上院と下院がありますが、上院と下院では選出法が違います。下院ではアメリカを人口毎に区切って選挙区をなして、その選挙区から議員を選出する形を取っています。それに対し上院は、各州ごとに二人選出する仕組みになっています。こう書くとはやう「一票の格差が出てくるんじゃないの?」とお思いの向きもあるうかと思えますがさにあらず。アメリカ合衆国という国は、州という「国」が連合して一つの連邦国となしている国なので、「アメリカ合衆国民としての意見」のほかに、「州の意見」という論理軸が存在するんです。つまるところ、「おらが州は畑が多いから、もつと農業を保護して欲しいんだべ」とか、「おらが州は不法移民が多いから、合衆国としても何らかの対応を取って欲しいんだな」という、「アメリカ合衆国民としての意見」とは意を異

にする意見を抽出するためにこういう制度を取っているんですね。けど、日本の場合、アメリカ式の考えはあまり適用できません。

日本という国は明治以来中央集権国家です。地方自治体には強い権限は与えられていませんし、財源を与えられていません。国からの交付金がないと首が回らないような仕組みになっています。そもそも地方の意見を聞くなんていう頭が国家側に無いんです。

んじゃあどうして参議院なんて存在するの？ という話になります。

実はこれには、歴史的な経緯があります。実は、前回のお話の続きだったりします（笑）

さて、参議院という院の性格を一番現しているのは参議院の本会議場でしょう。

衆議院の本会議場と殆ど同じくりにはなっていますが、参議院本会議場には衆議院のそれとは少し造りが違います。もしイメージできないという方は、ちょっとググってみてください。

そう、参議院本会議場には天皇陛下の玉座があります。

衆議院本会議場にも、天皇陛下の観覧席はありますが、参議院のようにあんな一番目立つところ（議長の後ろ。参議院議員に對面する形で玉座があります）には存在しません。

なぜ参議院に玉座があるのか――。これが、参議院のルーツを明かすポイントだったりします。

前回、「国会開設の勅諭」と、それに絡むドタバタを触り程度に説明させて頂きました。

おさらいすると、日に日に高まってきた反政府運動である自由民権運動のガス抜きを行なうために、政府が国会の開設を約束して、けれどその実政府は国会に政治運営をさせるつもりはさらさらありませんでした、というお話でした。

要は、政府側があまり国民を信頼してなかったですね。薩摩の大

久保利通はどうやら明治維新から三十年以内に何らかの形で共和制に移行しようとした節があるんですが、大久保以後に政府に残った人々はむしろ、明治維新の権力ベクトリンのままの国家運営を志しました。（信賴してなかった、というよりは、維新志士たちが自分たちの既得権益を手放したくなかったというだけの話なんですけどね。）

そんなわけで、開設された国会についても、基本的に衆議院には予算の修正のみしか出来ない仕組みになっていました。けれど、一応これで政府は国民の懐柔に成功しました。

しかし、明治政府にはもう一つ、懐柔しなくてはならない勢力がありました。

いわゆる、華族たちです。

明治に入ってからすぐ、明治政府は身分制度の解体を図りました。武士階級を士族、大名・公家・大物維新志士などを華族とし、それ以外の人々を平民としたんです。武士階級を別扱いにしたのは、明治一桁台に武士に対する諸政策を行っていたからで、それらの政策が終了するに従い、やがて平民と士族は国家側から見れば同じ扱いとなっていくます。ところが、華族たちには特権だけが残されたままでした。華族の多くは明治維新によって職をなくした大名だったので、迂闊に援助を打ち切ることが出来ませんでしたし、いつ政府に牙をむくか分からない存在でもありました。政府はさまざまな手を打って華族の使い道を考えますが、国会開設まで明確な形を持ちませんでした。

国会を開設する際、ようやく華族たちの使い道が決まったんです。「貴族院」という衆議院と対になる院を作って、そこに華族たちを押しこんでしまえばいい、と。そうすれば国家運営に対し華族に責任を負わせることが出来ますし、何より華族という階級の国家的な使い道が定まったのです。「ほら、華族さんたちも国家運営に参加してるんだから、文句は貴族院で言ってよね」と言い訳が可能になったんです。

そう。この「貴族院」こそが、参議院のルーツなんです。

敗戦の後、「未だに貴族制度残している日本ってwwwwマジww」というアメリカ側の意向により華族制も解体され、なんだかあやふやのままに参議院制度に移行したんですね。

……なんだか、こうして見渡してみるとため息が出そうになりますね。

衆議院も参議院も、実は「国民・華族の不満のはけ口」としてスタートしています。そうして、未だにそれくらいの意味しか持っていない国会の在り方を見ると、人間って簡単には進歩しないんだなあ、と妙な達観に至ってしまいますです。

けどまあ、そんなに悲観することはありません。

きつと日本人にとって、政治とは祭なんです。がやがやと大騒ぎしてはがなりたてて、「されど会議は進まず」と言われながらもうやむやのうちに裏方である官僚によつてナアナアのうちに物事が決まっている。きつとこれは日本の国民性なんでしょう。

まあ、それで現代を生き残れるのか、という問題はありましようが、そのために我々は選挙権や被選挙権を有しているわけで。それすらも不満のはけ口だ、という向きもありますけども。

24、「現代歴史学の迷宮」

—— 事実というものは存在しない。あるのは解釈だけだ——
これは、現代思想家であるニーチエの言葉です（「力への意志」）。極めて至言ですよ。この世には真実なんてどこにもない。ある現象は、見る人によってバイアスがかかり、まったく別のものになっているんです。

たとえば、2009年に日本の捕鯨運動を批判する外国のドキュメンタリー映画が封切られ世界的なセンサーシヨナルを巻き起こしています。あれも“反捕鯨運動家”の目から見た“日本の伝統捕鯨”の様相なんです。筆者などは反捕鯨活動家の皆様からすれば不倶戴天の敵であろう鯨肉が大好きな日本人なんですが（鯨肉って割と高価ですが、裏を返せば少しお金を積めば食べることできるものです）、筆者から見ればイルカ漁はマグロなんかの漁と大した違いを感じません。同じ“イルカ漁”という事象を眺めていながら、反捕鯨運動家の皆さんと筆者の間には深い隔絶があるんです。

さて、最初に哲学者の格言を引いたのにはわけがあります。

こう言っただけなんです。哲学という学問は諸学の中心となる学問です。如何な学問も「何かを観察・観測する」ことによって始まるものです。しかし、哲学だけは少し趣が異なります。ここでの文脈に則せば「何かを観察・観測している我々とは何なのか」を考える学問、それが哲学なんです。たとえるなら、星を見るための望遠鏡を仔細に研究するような学問、それが哲学ですよ。

何が言いたいのかというと、歴史という学問も、哲学・現代思想と深い関係にあります。今日はその話です。

現代思想において一番重要とされるのは、「自分」という存在のあやふやさです。

古典的な哲学において、「自己」は疑わざる絶対の存在でした。

すべての物を疑っても、今ここで思考している自分を否定することが出来ない（「我思う、故に我あり」デカルトの言葉です）というのは、古典的哲学においては土台となるものでした。が、現代思想に至って、その風向きが随分変わってきました。「どーも人間という生き物は自分で自分のことがよく分かっているんじゃないの？」という異議申し立てが行なわれるようになるんですね。フロイトさんの「無意識」なんていう概念は、まさに「疑わざる自分」という古典哲学の前提をひっくり返すものだったんですね。

そして最初に挙げた言葉。「事実」というものは存在しない。あるのは解釈だけだ」というあの言葉と、「不確かな自分」という視点は、ある事実を浮き彫りにします。事実が存在せず、解釈つまりは各人の考えしか存在しないということは、この世界に溢れているすべての言語的営みが相対的なものでしかないことを示唆します。

え？ 分かりにくい、って？

つまり、どんなに客観的に見える言葉でも、その言葉にはその言葉を紡いだ人間のバイアスがかかる、ということです。裏を返せば、「客観」なんてものが存在しない、ということです。もちろん客観に限りなく近いものは存在しますが、それは厳密な意味で客観的なものではないんですね。

この哲学界の進展が、現代歴史学に深い影響を与えています。

昔、筆者、「坂本竜馬は実在したの？ もしかして、維新志士の皆や幕府側のみんなが結託して、坂本竜馬っていう人物をでっち上げた、ってことってない？」という身も蓋もない質問を頂いたことがあります。

この質問について、旧来の歴史学者であればこう答えます。

「ありません。だって、坂本竜馬に関して言葉を残している人々は沢山います。坂本竜馬の書簡も沢山残っていますし、中には“俺が暗殺した”と名乗り出た人や、奥さんだった人までいます。それに、坂本竜馬に関して証言を残しているのは維新志士、幕府、各藩、

商人、その他大勢の人々と多岐にわたっており、でっちあげるのは不可能です」

では、次に現代の歴史学者はというと、きつとこう答えます。

「その可能性は限りなく低いです。だって、坂本竜馬に関して言葉を残している人々は沢山います。坂本竜馬の書簡も沢山残っていますし、中には“俺が暗殺した”と名乗り出た人や、奥さんだった人までいます。それに、坂本竜馬に関して証言を残しているのは維新志士、幕府、各藩、商人、その他大勢の人々と多岐にわたっています。利害の一致しない人々が一致団結して「坂本竜馬」をでっちあげた、と考えるよりも、坂本竜馬が実在すると考えた方がはるかにすっきりと話が収まります」

この二つ、同じようで全然違います。

旧来の歴史学者さんは「でっちあげるのは不可能だ！」と断言していますが、現代の歴史学者さんは「実在すると考えた方がすっきりと収まる」と齒に何か挟まったような言い方をしています。

これ、どういうことかといいますと、「事実」というものの取り扱いが変わったんです。

歴史学という学問において、ほとんどの研究対象者は死んでいます。そもそも、その研究対象が実在したかも真の意味では分からないんです。「実在」というのも「事実」に類する概念ですが、「事実」が否定されている現在、「実在」すらも相対的な存在でしかないんです。なので、その人物が実在しなかったという言葉は誰も否定できないんです。ただ、「実在しないと考えるよりも、実在すると考えた方が妥当だよね」とまでしか言えないんです。

これ、坂本竜馬だからあんまり違和感がないですが、これ、自分のおじい様おばあ様のことだと考えてみてください。

これをお読みの皆様がおいくつなのかは筆者には永遠に分かりませんが、恐らくあなた様のおじい様おばあ様は、恐らく30歳代の後半より年上だと思っんですよね。あるいは既にお亡くなりになっているかもしれません。きつとあなた様にはおじい様おばあ様との

思い出があることと思いますが、歴史学という学問でもってあなたのおじい様おばあ様を眺めると、「実在すると考えた方がすつきりと話が収まる」存在でしかないんです。実はこれ、翻せば自分自身にも言えることです。自分自身すら、歴史学者の手にかかれれば「実在すると考えた方がすつきりと話が収まる」程度の存在になってしまふんです。おじい様おばあ様も、そして自分も確実にこの世界に存在する（した）はずなのに、歴史学者にとってはまるで霞のようにあやふやな存在でしかないんです。

なんだか不思議じゃありません？

歴史つていうのは事実を数珠つなぎにして成立している学問のはずなのに、その「事実」が現代哲学上では否定されているんです。それがために、めちゃくちゃに分かりにくい論理展開をせざるを得なくなっちゃったんです。

実は、この「事実が存在しない」という現代思想の視点が、ここで述べた以上に現代歴史学に影響を与えています。いえ、影響というよりも暗い影と言い換えた方がよろしいでしょうか。

その辺のことは次回！　ちなみに次回はめちゃくちゃ真面目な話になってしまいます。

25、「現代歴史学というパンドラの箱」

前回、「現代歴史学はなんだか分かりづらくなっている」というお話をさせて頂きました。おさらいをすると、最近の歴史学は歴史を構成しているはずの「事実」の取り扱いが、極めて難しくなったというお話でした。もっと言ってしまうえば、この世界に生きるすべての人間で共有できる「事実」なんて存在せず、すべての物事は「ほぼ存在するんだろうね」としか言いようのないものになっています、というお話でした。

この「事実が存在しない」という世界観、結果的にこれが歴史学に大きな影を落としてしまいました。

現代の歴史学の動向をこうやって喋らせてもらった以上、説明せざるを得ないことが出てきます。言い換えれば、これは現代歴史学が進展してしまったゆえの暗黒面とも言えます。あえて厳しいことを言えば、現代歴史学という学問は、開けてはいけないパンドラの箱だったのです。

今日は、現代歴史学（正確には、現代歴史哲学）を語ってしまった人間の責任として、現代歴史学が抱えてしまった闇についてお話ししたいと思います。

皆さま、歴史修正主義という動きを御存知でしょうか。

戦後よりに登場した歴史観で、簡単に言つと従来の歴史のバイアスとは異なるバイアスで歴史を語ることです。本来は、「新発見された史料や、解釈の変更によって歴史観を修正していくこと」という意味だったのですが、最近ではあまりいい意味では使われません。こんな取って澄ました言い方では本質が見えないかと思しますので、もっと例を出して説明させて頂きましょう。

有名なのは、ドイツにおけるホロコースト否定説でしょう。

ホロコーストといえばナチスドイツによる組織的なユダヤ人の虐

殺であり、一般には六百万人もの人々が犠牲になったとされているものです。

このホロコーストについて、その規模やあり方について色々な意見が出ていますね。たとえば、「六百万人も虐殺したっていうけど、その実数に関しては疑問があるんじゃないの」とか、「ガス室の壁が薄すぎる。毒ガスで虐殺していたのならばもつと嚴重なガス室を使うはず」、「夥しいユダヤ人の遺体処理をどのように行なっていたというのか」、「ナチスが計画的、指導的にホロコーストを行なった証拠はない」などなど（これ、筆者の意見じゃありませんからね！ 念のため）。

ここでその是非を論ずるのはよしでしょう。ただ、一般的には「ホロコーストは存在した」とする主流の歴史学者とは、違うアプローチで歴史が語られ出したのです。そしてこの「ホロコースト無かったらう論」が、ドイツのネオナチと言われる愛国右翼的な人々と結合して一つの流れとなっています。

歴史修正主義というもの、何もドイツだけの話ではありません。日本だってその影響を受けています。

昔、「新しい歴史教科書を作る会」による教科書が文科省の認可を受ける受けませんでしたもんだしたことがありました。しかも、教科書としては異例の一般販売までされて結構売れた模様です。きっと、「つくる会」の皆さん、印税でガツポガツポではないかと思うんですが、そんなことはさておいて。

あれも、歴史修正主義の文脈で語るべき性質のものです。

大きく分けると二つ。戦後の日本歴史学が否定した、「神話の真実性」を復活させたこと。そして、太平洋戦争（大東亜戦争）を「自衛のための戦争」と捉え、従来の考え方とは違うバイアスで叙述したことです。

まあ、歴史を他のバイアスで描き出すことに関して、悪いとは一概に言えません。特に筆者は歴史学者ではなくて歴史が好きな一戯作者ですので、戯作者の活動として歴史というテクストを意図的に

読み違えて新しい色をつけるという行為に関しては「アリ」の立場です。

ただ、一般に戦前の混乱の原因は、国内的には政党政治の腐敗化に伴う軍部の台頭（そして、かつて存在した元老による寡頭政治の終焉）、国外的には不景気による世界のブロック経済化にあることを見逃してはいけません。国外的原因である「世界のブロック経済化」に関しては、他の国も日本と同じことをやっているのであんなりどこの国も褒められたものではないでしょう。日本の場合、自前のブロック経済を作ろうと躍起になって中国に派兵を繰り返すうちに、アメリカ・イギリス・中国・オランダを敵に回してしまい、結果として戦争に至ってしまったのです。何歩か譲って国外的な状況に関しては日本にとって「仕方がなかった」状況と言えましょう。けれど、国内的原因である「政党政治の腐敗・軍部の台頭」に関しては、どう思いあぐねても「日本」という国が抱えてしまった問題でした。満州事変において、この軍事活動を主導したのは関東軍、もつといえは当時関東軍に所属していた将校・石原莞爾でした。こう言うてはなんですが、石原莞爾はただの一官僚です。一官僚が、国家の思惑を超えて兵を動かしたんです。が、当時の日本政府はそれを追認するしかありませんでした。これは、日本の政治機構に（あるいは往時政権にあった人間に）何がしかの欠陥・失策があったとみなすべきです。

ともかく、「つくる会」の教科書にはそういう「原因を追及する」視点が薄く、「自国を守るための戦争だった」と対外的な視点のみで歴史を語っています。この姿勢は、「都合のいい史料のみを採用し、都合の悪いものからは目をつぶっているのではないか」という批判につながっています。

なので、一部の歴史学者からは、「つくる会」は歴史修正主義と見なされています。

歴史という学問はもとも多角的に観察することが出来る学問で

す。

その上に、「事実なんて存在しないんじゃないの？」という現代思想のせいで、かつては「事実」とされていたことにさえ疑問符を投げかけることが可能になりました。これによって、歴史を叙述する人間にとって都合のいい「歴史」が語られるようになりました。

「つくる会」に関しては左右どちらからもボロクソに怒られているので当てはまりませんが、ホロホースト否定論については、かつてのナチスドイツは間違っていないかったとするネオナチの論客たちによって援用説として利用されています。この背後には、「ナチスドイツは間違ったことをしていない」という彼らが信じたい「事実」が存在します。結局、ホロコースト否定論は、彼らが信奉する「事実」にとって都合のいい歴史観なんです。

実は、現代歴史学が抱えてしまったものは、滅茶苦茶に深い闇なんです。

すなわち、歴史はプロパガンダとして用いやすくなってしまったんです。どうしても「事実」を動かせるのならば、どんな結論でも導き出すことが出来ます。叙述者の裁量のままに。そして、歴史が政治的活動と結び付きやすくなり、安易なナショナリズムの高揚へと繋がっています。

歴史はいつになったらナショナリズムから解放されるのかなあ、と、歴史を純粹に愛している筆者はため息をついております。

25、「現代歴史学というパンドラの箱」（後書き）

補講

歴史修正主義の難しさは、「誰がその歴史を語るのか」という視点の問題が横たわっていることです。

筆者は「ホロコーストなかったらう論」には否定的な立場ですが、あちからすれば筆者こそ「歴史修正論者」と見なされてしまうのです。

例えば、現代の日本では「広島・長崎への原爆投下はアメリカが犯した人道上の罪悪である」という立場が一般的です（教科書に載っている叙述はかなりソフトですが）。

が、アメリカ側は日本の立場を「歴史修正主義」と見なしています。どういうことか。

アメリカ側は、「太平洋戦争の最終期、アメリカは日本本土への侵攻を計画していた。だが、敵味方に甚大な被害が出る公算が高かった。そのため広島・長崎に原爆を投下したのであり、むしろ原爆投下は日米双方の被害を最小限にとどめる結果となった」と歴史叙述しています。その立場からすれば、日本の立場は『自分たちの歴史観を歪曲する』歴史修正主義と見なされてしまうのです。

こうやって相対的にしか物事を語れないのも、今日の歴史学の難しさなのです。

26、「人は信じたいものを信じる生き物です」

二回ほど前にニーチェの言葉を引きました。「事実など存在しない、あるのは解釈だけ」という現代思想によって、歴史学がかくも面倒なものになってしまったのはこれまでご説明させて頂いたとおりです。つまり、筆者が語っている歴史も、ある意味では何の後ろ盾もない、筆者の歴史観でしかないということです。

けれど、この流れは必ずしも現代思想の誕生によって立ち上ってきたものではありません。

実は、現代思想が進展する前から、歴史には「事実」など存在しなかったのです。

1909年、イギリスでのこと。

時は折しも人類学の黎明期でした。人類学というのは、原人から現生人類までを生物学的にアプローチする学問のことです。国によっては考古学と同じく括りの内に収められています（なお、日本では殆ど考古学と混同されています。最初、日本では理系的な人類学が入ったのですが、後に人文系の考古学学閥が伸長し、現代では人文的アプローチである考古学が盛んです。閑話休題）。当時、ネアンデルタール人の発掘例がいくつか出ていたものの、未だ比較分析できるほど出土例がありませんでした。

その頃、ピルトダウンというところで、ある“古人類の化石”（頭蓋骨）が発見されました。

現代人とあまり変わらない脳容量ながら顎が大きいという特徴を持ったその頭蓋骨が、当時のイギリスの人類学会でひと悶着を引き起こしました。発見時の状況や頭蓋骨の鑑定から“偽物”を疑った学者もいましたが、結局は人類の直接の祖先たる類人猿という結論が出されました。フランスでは類人猿の化石が出ているのに、当時イギリスにはあまり類人猿の発見例がありませんでした。それがゆ

え、このイギリス発の類人猿は驚きと称賛を以って迎えられました。そうしてその類人猿はピルトダウン人と呼ばれるようになりました。が、発見から四十年ほど経って、ある衝撃の事実が判明するので

す。

ピルトダウン人は、何者かによる捏造である――。

端緒は発見時からありました。ピルトダウン人を持ち込んだのはアマチュアの学者だったのですが、その発掘に本職の学者が参加した様子はありません。また、“発見者が自宅で骨を加工していた”とする目撃証言も当初からあったのです。

さらに、やがて人類学も成熟してきます。化石人骨の発見例も多くなっていくに従い、進化の流れもやがて判明してきます。一般に、化石人骨は時代が下るに従い脳容量が増していき、それに反比例するように顎が小さくなっていきました。顎が大きく脳容量も多い、という特徴を持ったピルトダウン人は、ようやく出来上がった人類進化のテーブルから見ても、異端の存在と化してしまいました。この頃になると、「ピルトダウン人は、もしかすると当初言われていた年代よりも新しい化石人類なのかもしれない」とか、「何らかの原因で新旧様々な骨が入り混じってしまったのかもしれない」といった論考が出始めました。

が、そんな好意的な論考さえも、やがて1950年に否定されます。

ある研究者がピルトダウン人骨を研究した結果、ピルトダウン人のうち脳部分は限りなく現生人類に近い人類の骨であり、大きいとされた下顎に関しては人類のものではなく、オランウータンのものとされたのです。そして、本来ならくつつくはずのない上顎と下顎は、現代人の手による加工がなされているという報告がなされました。また、人類の特徴であるとされた咀嚼跡に関しても意図的につけられたものであり、また、経年劣化しているように見せかけるために、骨全体に特殊な薬品を塗りつけていたことが分かったのです。これが、イギリスの人類学を揺るがせた、ピルトダウン人事件と

呼ばれる事件のあらましです。

この事件、未だに犯人が判明しておりません。

最初にピルトダウン人を持ちこんだ人物が一番の容疑者とされていますが、中にはコナン・ドイルが犯人だ、という眉唾な説もあつたりしまして、なかなか犯人百花繚乱状態です。が、この捏造が発覚したのが発見から五十年経っていまして、名指しされた人は全員死んでいましたし、ピルトダウン人を本物だと太鼓判を押した学者さんたちも墓の下でした。というわけで、イギリスの人類学者さんたちは、過去の同業者の失敗に対して頭を下げる羽目になったのです。

この件において重要なのは、“なぜ最初期に、捏造であることが見抜けなかったのか”という点です。

もちろん、それは当時の人類学がまだまだ未成熟で、反論しようにも元となる資料がなかった、という点もあります。確かにこの事件は、現代のように発掘例が増え資料がそれに応じて増えている現代においては起こりにくい事例でしょう（起こりにくいだけで、特定の条件によつては起こりえます）。

けれど、一番の原因は、イギリスという国が抱えていた島国根性によるものでしょう。

ピルトダウン人“発見”当時、フランスでは化石人類が発見されていたという事実は説明させて頂いたとおりです。そして、フランスと昔から仲が大変悪いイギリス、さまざまなことでフランスと張りあう節があります。実は、その一環として化石人類の発見があったのです。

「なに？ フランスで化石人類が！？ くそう、どうしてフラ公どものところで出土して、我が大英帝国では出土しないのだ！？ いや、今はまだ発掘されていないだけだ。イギリスのどこかに、フランスに負けないほど古い化石人類がいたに違いない……」。

こんなメンタリテイがイギリス紳士の中にあつたものと考えられ

ます。そして、そのメンタリティを後追いするようにピルトダウン人が“発見”され、事実として受け入れてしまったという歴史があるのです。

このピルトダウン人事件は、人間という生き物が信じたいものを信じてしまう生き物であるという事実を如実に示しています。

P・S・

なお、この事件、日本人は笑えません。

2000年の事ですからかれこれ十年前のことになりますでしょうが、日本中を騒がせた「旧石器捏造事件」、あれとピルトダウン人事件は非常によく似た事件です。あの事件において石器や遺跡を捏造した方も捏造した方ですが、あんなリアリティのない数字を事実と受け入れていた筆者のような歴史ファンも存在したわけです。

「日本の旧石器時代は古くあつて欲しい」という意識が筆者たち、ひいては日本人の中になかったかと問われれば、答えに窮してしまします。

筆者、こうやってご高説を垂れておりますが、その実際の姿は信じたいものを信じてしまった人間の典型なのです。

26、「人は信じたいものを信じる生き物です」（後書き）

なお、日本の「旧石器捏造事件」は本エッセイで三回にわたり取り上げる予定です。11月から12月頃になる予定です。

27、「やけに一般受けのいい歴史上の人物」

うーん、ちょっとこのエッセイにおける最近の流れに反省を致しております。

なんといいですか、真面目すぎますよね。

いや、「真面目なお話が大好きです！」って人もいらっしやるんじゃないかと思うんですが、きつと皆さん、筆者に真面目は話なんか求めていないと思うんですよー。

そう考えると、筆者は皆さんのニーズに応えていないということになってしまい、サービス業たる戯作者として極めて遺憾なので、今まで通り、くだけたフランクな作風を目指しますです。

閑話休題。

歴史バカたる筆者、時折一般の方と歴史談義をすることがあります。大河ドラマなんかを見ていて、「そういえば、坂本竜馬ってさあ……」と水を向けられることがあるんですね。筆者のように歴史バカであることを隠していない歴史バカには割とよくある光景です。そして、向こうが求める以上の知識を披歴してしまい、相手をドン引きさせるのも歴史バカの方なら「あるある」ネタですよ（いや、これは筆者に社会性がないだけかもしれないけど）。

そうやって一般の人と会話していると、時折齟齬が生じることがあります。

なんといいですか、歴史バカから見るとそんなに評価されていないのに、やけに一般受けがいい歴史上の人物がいるんです。

いや、その逆はよくあります。一般人が知らない偉人というのは、過去から現在にわたり様々な歴史小説家が紹介してくれています。たとえば、幕末の長岡藩家老・河井継之助さんという人がいるんですが、この人は司馬遼太郎先生の『峠』という作品によってイメージが定まった歴史上の人物と言われています。また、坂本竜馬だって然り。坂崎紫瀾という人の『汗血千里駒』という伝記により大枠

のイメージが定まり、やっぱり司馬遼太郎先生の『竜馬がゆく』によつてそのイメージが国民に膾炙しました。

では、そういった偉人たちの逆、「高名だけど歴史バカ的には評価の低い偉人」たちを、ちょこつと紹介したいと思います。

まずは、「それでも地球は回っている」という名言を残したと言われる、ガリレオ・ガリレイ。

ガリレオさんといえば、アリストテレス以来絶対的な定説だとされていた天動説を否定して、地動説を主張したことによつて宗教裁判にかけられた科学者として今日的に有名です。日本では、国語の読みものの主人公になっています。確か筆者も国語の授業中に読んだ記憶があります。

でもこの人、実はあんまり高い評価を受けていません。

その証拠は月面にあります。正確には、月面クレーターに。

実は、月面にあるクレーター。あの大小様々なぼつぼつには、一つ一つに名前がついています。月の研究に業績がある人の名前を遣うのが慣例だった為、月面クレーターには天文学者の名前が沢山ついています。さて、ガリレオといえば月を観察し、当時完璧な球形だとされていた月にクレーターを発見した（つていうか、ガリレオは「クレーター」という語の命名者です）偉人なわけですが、そんな偉人のクレーターなら、恐らく滅茶苦茶大きいものに充てられているのでは、と思っちゃいますよね。

けど、実際にはまるで違います。

クレーター「ガリレイ」は、直径15キロメートルのクレーターでしかありません。

え？ それがただだけのものか分らない？ たとえば、ティコ・ブラーエというガリレオより一世代前の大天文学者の名を冠した「ティコ」というクレーターがあります。これ、直径が85キロメートルあります。また、地動説の再発見者として高名なコペルニクスの名を冠した「コペルニクス」は、直径が95キロメートルもある

ります。しかも、“ティコ”と“コペルニクス”は肉眼でも見えるほど非常に目立つクレーターですが、“ガリレイ”は望遠鏡で見ないことには見つからないクレーターです。

なぜガリレオがこんな扱いなのかというと、これ、ガリレオさんの業績に関係があります。ガリレオさんの天文学上の業績って、実はあんまり存在しないんですよ。そりゃ確かにあの時代に先んじて地動説を支持したのは先見の明があると言えますが、天文学の研究史からすると、彼は先駆的であるだけで、重大な発見をしたとは看做されていません。ガリレオさんよりちょっとあとの研究者であるケプラーさんによるケプラーの法則の発見の方がガリレオによる地動説支持よりも重大なことでとされているんですね。なので、世間一般の称賛の声とは裏腹に、ガリレオのクレーターはひっそりと月面に佇んでいます。

あと、野口英世さんもそうです。

野口さんといえば黄熱病の研究で名を為した日本人で、「日本人は眠らない」という風聞をアメリカ人の間で流行させるほどに研究に打ち込んだ細菌学者さんです。ようやく野口さんの顔をした千円札に慣れてきた、というオールデイズな方も結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

けど、実は野口さんの最後の研究である黄熱病研究は、今日的には間違いであることが分かっています。

野口さんは黄熱病の原因は顕微鏡で観察可能な細菌にあると考えていましたが、実際には、その細菌よりはるかに小さいウイルスによる病気であることが判明したのです。もちろん、野口さんがそれに気付けなかったのは、ウイルスを発見するためには必要不可欠だった電子顕微鏡が発明されていなかったという事情があります。けれど、歴史的に見れば、野口英世さんの黄熱病研究は間違っていた、あるいは正解へと至る道程のよくある失敗の一つだったのです。

なので、現在、野口英世という研究者の名前は、日本や南米、ア

フリカの一部を除いては、すっかり忘れ去られています。

けど、歴史バカとして、この二人はすごく魅力的です。

最先端を行ったがために、弾圧された研究者・ガリレオ（とはいっても、実際には地動説にかこつけた教授たちの権力闘争だった、という説も出ていますけど）。実験マシーンと後ろ指を指されながらも研究を重ね、時代の壁にぶつかって「僕には分からない」と口にした野口さん。どちらも人間としてひどく魅力的です。

きっと、彼らが未だに有名なのは、彼らが人として恐ろしく魅力的だからではないかと歴史バカとしては思うのです。

28、「コナン・ドイルという多面的人物」

前々回、ビルトダウン人の話をさせて頂いた際に、ビルトダウン人捏造の犯人についてコナン・ドイルの名前が挙がっている、という話をさせて頂いたと思います。

コナン・ドイル。19世紀から20世紀にかけて活躍した小説家です。世界最高の名探偵・シャーロック・ホームズの活躍を描いたホームズシリーズはとりもなおさず、歴史小説やSF小説にも多大な影響を残した、近代小説史において重要人物の一人と目されています。また、推理小説の世界においてはエドガー・アラン・ポーと並び黎明期の推理小説を支えた功労者です。

きつと、これをお読みの皆さんは疑問でいっぱいだと思います。

「え？ どうしてコナン・ドイルが人類学の話題に顔を出しているの？」と。

実を言うと、コナン・ドイルが生きたビクトリア朝時代を勉強すると、全然関係なさそうなトピックスであってもコナン・ドイルの名前が出るがあります。

なんとというか、コナン・ドイルさんって現代で言うコメンテーターとしての側面があったのではないかと思うんですね。

コナン・ドイルが生きたビクトリア朝時代というのは、マスコミの黎明期でした。

産業革命を最初に成し遂げたイギリスは、鉄道網も世界で最初に発達しました。鉄道による遠隔移動が割と容易に行なわれるようになりました。ただ、いかにせん電車での移動は時間を持て余してしまいます。そういう人々の暇つぶしとして発達したのが、当世のニュースを伝えた新聞であり、フィクションの代表である小説だったんです。

コナン・ドイルは、そんなビクトリア朝時代の申し子です。

彼は1884年、新聞に実際に起こった事件をモチーフにして書いた小説を投稿しました。それが新聞の編集部に認められ、最初は匿名でその作品が新聞紙上に載りました。彼の端緒からして、近代的なマスコミともにあるのです（なお、この作品に描かれた事件こそ、マリー・セレスト号事件という、現代ではオカルティックに語られる事件です。ちなみにこの事件のあらましの多くは彼の描いた小説の創作部分までも引きうつしたものとなっています）。

そしてその後、彼はシャーロックホームズシリーズの成功により、押しも押されもせぬ大作家になるんです。

ただ、このあたりからコナン・ドイルには、小説家以外の仕事が増えてきます。

書いている小説もまづかっただんです。世界最高の私立探偵・シャーロックホームズ。劇中で鮮やかに事件を解決する姿を見ているうちに、読者側に誤解が生まれるんですね。「あんなに鮮やかな推理が出来る名探偵の生みの親なんだから、作者にもものすごい推理が出来るのではないか？」と。

ドイルさんは医者でした。今も昔も、医者というのは教養の間われるエリート職でした。さらには薬学的知識、検死知識なども豊富でした。

さらに、彼は戦う小説家でした。当時のビクトリア朝イギリスでは都市型の凶悪犯罪が数多く起こる半面、警察制度の未整備が甚だしく、えん罪と疑われるような裁判も数多くありました。それに対し、ドイルさんは独自の推理を展開して冤罪を声高に叫ぶのみならず、えん罪防止のための措置を図るように国に働きかけ、事実それが成功します。

こんな数々の条件が揃った人物を、マスコミが放っておくはずがないんです。「高名」「推理が出来る」「知識が豊富」「医者・エリート」。このようなイメージのおかげで、ドイルさんの言葉にはある種の説得力があっただんです。なので、新聞記者たちは不可解な事件が起こるとドイルさんに事件の話を持ちこむようになります。

そんなわけで、新聞記事には、専門家・コナン・ドイル談としていろんな話がかつてしまったんですね。なお、ドイルさん、当時流行していた大量殺人者・切り裂きジャックの犯人を推理しています。

（ちなみにビルトダウン人事件において犯人だと疑われている理由は、？医学や法医学・薬学といった知識を多数有している、？骨の接合などは専門家にしか出来ないだろうという判断、？同時代人である という程度のもんです。有名人である故に犯人に名指しされている感があり、この事件においてはちょっと可哀そうです。

けれど、実はドイルさんにはもう一つの顔があります。

それは、オカルトファンとしてのドイルさんです。

彼は科学の申し子でありながら、一方で心霊現象やオカルトめいたものに対する興味も持ち続けていました。当時流行していた交霊会（イタコさんを使って死んだ人呼び出すアレのイギリス版です）に傾倒し、様々な不思議に挑んでいたんですね。

ところがドイルさん、オカルト活動で終生の失敗をしています。

少女二人が「カメラに収めた」として持ち込んできた妖精の写真を探り、ドイルさんはその写真が本物であると太鼓判を押しています。ところがこれは少女二人による悪戯であることが判明しました。それでもなお、ドイルさんは自分の判断が間違いであったことを認めず、結局そのまま死んでしまいました。この事件をコティングリー妖精事件といい、イギリスのオカルト史においてかなり有名な事件となっています。そしてこの事件と共にコナン・ドイルの名前も刻まれることとなったのです。

コナン・ドイルさんを眺めていると、なんだかエネルギーに溢れているような気がするのは筆者だけでしょうか。

色んなところに顔を出しては持論を述べたり、あるところでは政府に対してえん罪防止策を提案したり。その傍らで小説を書き、妖

精の写真に本物の太鼓判を押していたんです。

おかげで現代からみると、コナン・ドイルさんって随分と一筋縄でいかない存在だということになっております。

でも、面白いじゃないですか。

シャーロックホームズの作者さんが、実はオカルト好きで少女たちのトリック写真にまんまとだまされてしまったなんて。実は、歴史バカをしていて見えてくるのは、こういう人物たちの生の姿だったりします。

29、「時代考証家という人たちと作家」

世の中には時代考証家という方がいらつしゃいます。

現在ではいぶん減ってきましたが、かつて時代劇は日本テレビドラマ界のドル箱でした。一週間のテレビ欄を見れば十作は放送されていましたよね。「水戸黄門」「大岡越前」「遠山の金さん」「暴れん坊將軍」「必殺仕事人」「木枯らし紋治郎」「大江戸捜査網」「座頭市」など……、けれど現在ではスペシャルドラマを除いてしまえば、殆ど全滅ですもんね。いや、大河ドラマも大別すれば「時代劇」ですけど、ちよつと肌合いが違ふんであんまり時代劇とは呼びたくないですよ。……という個人的な感想はさておいて、そついった時代劇を作るにおいて、当時の習俗や習慣、服飾などのアドバイスをする人々のことを、時代考証家と呼びます。時代考証家には色んな人がいて、現職の学者さんの場合もあれば、考証の世界で知られたアカデミックにあらざる人もいます。どちらにせよ、めちやくちや当時の習俗に詳しいんですよ。

けどまあ、なかなか時代考証家さんたちは、口舌が鋭いです。

最近では団塊世代の隠居に伴いそついった本の需要が上がっているのか、時代考証家による「時代考証、嘘ホント!？」とか、「考証家の裏話」みたいな本が佃煮にするほど出回っております。まあ、筆者もそついった本を手当たり次第に読んで勉強をしている面はありますので、足を向けて眠れないところはあります。

けど、そついった本の前書き、妙に熱いんですよ。

色んな考証さんがいらつしゃいますが、大体どの時代考証家さんも口を揃えて言う言葉があるんですよ。

「脚本家とか演出家はあまり時代考証に熱心でない。テレビや映画などで、もつと正しい習俗や習慣を反映すべきではないか。テレビという浸透力の強いメディアにおいては、正しい時代像を描くのも一つの社会的役割ではないのか」

中には、「大人の事情もあるんでしようけど」と創作側のことをおもんばかりながら控え目に仰る方もいますが、一方で「これだから創作の連中は……」という向きもありまして、どちらかというと創作側に属している筆者としては「本当にすいません」なんです……。

今回は、歴史バカという視点よりも、歴史小説の書き手という視点でのお話です。

そもそも、時代考証を厳密にやり過ぎてしまうと、現代人にそぐわないお話が出来あがっちゃうんですよ。

邦画「隠し剣・鬼の爪」のラストについて、「身分違いの恋は当時タブー化されており、あのラストは絶対に存在しない」「主人公があまりに現代人的すぎる」などの時代考証寄りのレビューを見かけました。いや、これ、時代考証的には正論なんですよ。武士が自分の身分を捨てて身分違いの想い人と共に蝦夷に行く、なんていうのは、きわめて現代的な感覚です。時代考証的なことをいえば、身分を捨てる事も出来ず、想い人に思いを伝えることもできずに日々を送るようになる、というのが「隠し剣・鬼の爪」における時代考証的に一番おちついたラストです。

けど、作家として言わせてもらえば、「それって面白いですか？」ってことになってしまっただけですよ。

いや、この時代考証的に正しいラストがつまらないとは言いません。これはこれで味わい深い作品になったはずですが（つていうか「隠し剣・鬼の爪」におけるあの安直なラストには、個人的に一作家として疑問があります）、時代考証の為に創作の幅が狭まってしまうのはなんだか納得できないものがあります。創作というものは大なり小なり特殊な人々を取り上げて描くものなので、「そういう現代的な感覚を持った主人公だからこそ、こうやって作品にする意味があるんだ！」と居直りたくもありません。

それに、時代考証を厳密にやって誰が得するの？ という問題も

あります。

筆者には演劇をやっている友人がいて、「劇で使いたい」と言うので、その方に日本刀の下げ緒（鞘についている長めの紐の事です）の結び方や使い方をレクチャーしたことがあるんですが、結局「ごめん、下げ緒はナシにするよ」と言われてしまいました。

時代考証的には、刀を差している時には下げ緒の結びを解いて帯に差しこんだりあるいは垂らしたりし、刀掛に掛ける際には浪人結びや本結びといった結び方で結んで始末するのが正式です。けれどもはつきり言って、その劇を見る人たちのうち、下げ緒の始末の仕方を正確に知っている人なんてどれだけいるんでしょうか、って話になります。時代劇なんかでも下げ緒を結んだまま刀を差している時代です。わざわざ下げ緒を解いて帯に差し込む姿を見て、「おお、こいつ分かってるじゃん」と膝を打ってくれる視聴者がどれだけいるか、って話です。

正直、そんな枝葉末節に拘るくらいだったら、劇の練習に時間を割いた方がクオリティの高い、面白い劇になるんじゃないかなあ、という話になってしまふんですよね（なお、この劇において下げ緒は帯の間にはさんでもらいましたが、刀掛に刀を収めるシーンは割愛する流れとなりました）。

本当に細かい話ですが、江戸時代、男性の髪型も女性の髪型もあまり固定的ではありませんでした。よく考えれば当り前の話で、現代において、髪型って色んなものがありますよね。確か十数年前にシャギーっていう髪型が流行りましたが、今現在、それを意識的にやっている人は少ないんじゃないかなと思います。あるいはいわゆる「聖子ちゃんカット」なんて絶滅寸前でしょう。江戸時代だって同じこと。髪型は流行によって移ろっています。

なので、時代考証的には、江戸中期が舞台の「水戸黄門」と、江戸後期が舞台であるとのめかされている「必殺シリーズ」で同じかつらを使うことは出来ません。

けど、誰がそんな細かい話に気づくかい！　って話です。

そんなところに予算を使えるか！ というのが包み隠さぬテレビマン達の本音だと思います。正直、費用対効果の面であまりに厳しいものがあります。かつらって結構高いものらしいですね。

時代考証家さんたちの言い分は常に正しいんです。まあ、中には「あれ？」な事を言う人もいますが、おおむね正しいことを言っています。

でも、「正しい」ことが創作物の面白さを担保してくれるわけはありません。

現代人に、「お齒黒をべったりつけた若奥さんに萌えてくれ」と言ってもドタイ無理な相談です。創作物っていうのはあくまで感覚を扱うものであり、時代考証はあくまで事実を扱うものであるがために、時折二者が交わらないときがあるんですよ。

時代考証と創作物。

出来るだけ両立できるようにはしたいんですけど、なかなか難しいものがあるよなあ、というのが一創作人としての筆者の感想です。

30、「フリーメイソンという秘密結社」

はい、突然ですが皆さん、「フリーメイソン」なる組織をご存知でしょうか。

最近はとみに日本人の間でも有名だと思っんですよね。都市伝説の人なんかがかツかツと外国の博物館を闊歩しながら、「ほら、ここにもフリーメイソンのマークが……」みたいに解説する図、2010年の年末番組でちよつと見ました。きつとアレを見て、「フリーメイソン」を知った方も多いんじゃないかなあと。

けど、フリーメイソンという組織ほど、いい加減に語られてきた人たちもありません。ユダヤ陰謀論（簡単に言うと、ユダヤ人たちが世界を支配しようとしている、という陰謀論）やほかにも様々な場面で語られる陰謀論において、フリーメイソンは悪の秘密結社のようになっています。

フリーメイソンが秘密結社だというのは本当です。けれど、陰謀論で描かれるような、特撮ヒーローモノ的な秘密結社とはずいぶんと意を異にしています。

今回は、フリーメイソンのお話です。

そもそも、秘密結社とはなんでしょう？

ざつくばらんに言ってしまうと、「世間に対してある秘密を有している結社」ということになります。けれど、この定義だと普通の会社さえも秘密結社となりえてしまいます。どの会社にだって他人に知られては不味い秘密がありますよね、そういうことです。

なので、秘密結社はその秘密の度合いによっていくつかに分類できます。入社の秘密結社、目的的秘密結社、存在的秘密結社の三つです。入社の秘密結社というのは、その結社の存在は知られていますがその構成員が入社すること又はそれに伴う儀礼を公に隠す秘密結社のことで、893さんなんかがこれに当たります。目的的秘密

結社というのはその結社の具体的な活動を秘されている秘密結社で、フリーメーソンは目的的秘密結社に分類されます（一部に入社秘密結社の要素もあり）。そして、存在的秘密結社というのは、そもそも世間に存在さえ秘匿してしまう秘密結社のことで、シヨッカーなんかがこれに当たります。

つまり、フリーメーソンは存在を隠してもいないし構成員に関してもそこまで隠してはいないので、その活動について世間から色々と隠している組織だということです。

こう書くと、「え？　なんだか怖いなあ」という向きもあるうかと思います。

が、フリーメーソンのやっていることを追ってみると、案外大したことをやっていません。

よく言うのが、紳士たちの互助会程度の存在だということです。サロンのようにして緩い人脈を広めたり、正規でないルートで顔売ったりすることのできる組織、それがフリーメーソンなんです。フリーメーソンが世間から隠しているものは二つ、「伝わる秘儀」と「フリーメーソンの会合で話し合ったこと」についてだと言われています。

フリーメーソン内部には階列があります。そして、その階列はメーソン内で人望のある者が上に登る仕組みになっているのですが、その際に付属するものが「秘儀」と呼ばれる儀式です。この内容に関して、フリーメーソンはその情報を殆ど隠しています。けど、これって宗教的な儀礼においてはありがちな事です。例えば、天皇陛下が毎年執り行なっておられる「新嘗祭」も、基本的には非公開です。ある種宗教的な匂いのあるフリーメーソンが秘儀を隠すのはそんなに突飛な事とも思えません。そして、基本的にフリーメーソンにおいては、会合の時に喋ったことを外に持ち出さず、逆に外でのことをメーソン内に持ち込まない、という決まりがあります。

まあ、はっちゃけた言い方をすれば、フリーメーソンってちょっとお堅い町内会とか、あるいは消防団みたいなものなんですよ。ま

あ、町内会とか消防団には明確な目的があつて、その目的を公開していますけど、フリーメイソンはその辺りを隠しているってだけのことです。

ただ、フリーメイソンが歴史を動かしたことが二回あります。

フランスの市民革命と、アメリカ独立運動です。

フリーメイソンが誕生したのは近世のことと言われています（フリーメイソン自身はそのルーツを中世の石工ギルドに求めています）が、現代まで続くフリーメイソンは近世より遡ることはありません。その構成員の多くはブルジョワ階級でした。本来ならば付き合うことのあまりなかったブルジョワたちに、横のつながりが出来たんですね。そして、権力に隠れて色々と話が出来るというフリーメイソンの特徴を生かし、反王政運動を展開するんですね。けれどそれ以上に大事なものは、絶対王政の下にあつて、近代的な思想を醸造する場としてフリーメイソンの存在意義があつたということなんです。裏でああでもない、こうでもない、と議論するうちに、近代的な人権思想が誕生していった、伝播して行つたんです。そしてその結果が「ベルサイユのばら」の世界だったわけです。

アメリカ独立運動についても同様です。アメリカ独立に尽力した人々の中には、フリーメイソンの構成員が沢山いました。なお、初代大統領のジョージ・ワシントンもフリーメイソンの会員でした。テレビなんかで「ードル紙幣にフリーメイソンの意匠が多く紛れ込んでいる」という指摘がありますが、それは本当です。アメリカを建国した際に、フリーメイソンたちが自分たちの近代思想を紙幣の中に刷り込んだんです。

フリーメイソンが歴史を動かしたのは、近世から近代への過渡期でした。その頃のヨーロッパは絶対王政から次の時代への過渡期でした。絶対王政の次。それが何なのか、当時の人たちは思いあぐねていましたが、その次を描き出し、思想的に近代を創出したのがフリーメイソンなんです。

裏を返せば、近世から近代への過渡が完了した段階でフリーメーソンはその歴史的意義を終えた、とも言えます。事実、現代ではほとんど政治に影響を与えず、ひっそりとした活動をしています。

とは言いまでも、実はフリーメーソンが善からぬことに手を染めてしまったという事件もありました。

政治家やマフィアが多数籍を置いていたイタリアのフリーメーソンの某支会が、裏で色々と非法活動に手を染めていたとして、検挙された例もあります。しかもそのあと、その支会がマジで存在的秘密結社と化してしまい、大騒ぎになったというオチまでついています。

そうやってフリーメーソンの秘密主義を用いて悪いことをする輩はいますが、基本的には紳士の仲よし集団、これがフリーメーソンの実態だったりします。

31、「坂本竜馬フリーメーソン説について」

突然ですが、歴史バカには大きく分けて二つの軸が存在します。

歴史バカというのはつまるところ、「歴史的なトピックスを面白がる事が出来る人」のことなんです。歴史バカにも二つくらい類型があるんですよ。

一つは筆者言うところの「原典主義派」。つまりは、“歴史的事実はどうであつたか？”を追求するのが面白い人です。学者さんなんかのスタンスがこちらです。二つ目は筆者言うところの「物語受容派」。歴史という物語を楽しむ人たちです。「戦国BASARA」などの世界観を楽しんでいる人や、大河ドラマに登場するような“物語”の上に乗っかって存在している歴史上の人物が好きな人です。これ、どっちが悪いわけじゃありません。どっちも派閥は違いますが、その根っこにあるのは「歴史的トピックスを楽しめる人」であり、本来は同根のものです。筆者としても、どっちの派閥にも面白さはあると思っていますし、筆者自身どっちも大好きです。

と、前置きを打ちまして。

最近、坂本竜馬がフリーメーソンだった！という説が有名になりました。

加治将一さんという小説家が発表したこの説、かねてよりサブカルチャーの世界で有名な「フリーメーソン陰謀説」や「ユダヤ陰謀説」を上手く利用し、一定の支持を得ています。しかも、体裁としてノンフィクションなので、結構本気にしてしまった人が多かったとも言えます。

ちなみにこれを書くにあたり、「加治将一」でwikipediaに当たってみたんですが、坂本竜馬「フリーメーソン説」を発表した著作は小説扱いでした。

いや、小説としては面白いんですよ、坂本竜馬「フリーメーソン説」。憂国の士である坂本竜馬が、実は西洋列強の、フリーメーソ

ンの手足として働いているだけだったとしたら。明治維新以来日本人が作り上げてきた「坂本竜馬」の人物像を根底からひっくり返すダイナミックな仮定なんです。それは、「物語受容派」の面も多分に持ち合わせている筆者にも分かります。ただ、これが事実かと言われると少々怪しいものがあるのではないかというのが筆者の感想なんですよ。なので、今回は「物語受容派」としての筆者を封印し、「原典主義派」として、この竜馬「フリーメーソン説」に当たってみたいと思います。

加治さんの言うところはこうです。

“坂本竜馬がフリーメーソンであったかは分からない。だが、坂本竜馬は操られていた。誰に？ イギリスの商人、トーマス・グラバーにである。当時若手の貿易商であったグラバーは、イギリスのフリーメーソンの意を受けて、日本の交易・政治に干渉するべく坂本竜馬を手なずけ暗躍させて薩長同盟を成立させたのである”

当時、江戸幕府と一番良好な関係を築いていたのはフランスでした。当時のフランス皇帝ナポレオン三世が徳川家に贈り物をしている記録もありますし、徳川幕府の兵制もフランス式に改められていることから、幕府とフランスの癒着をお分かり頂けると思います。日本という極東のマーケットは、殆どフランスの手に落ちていたと考えても間違いではありません。

そこに割り込もうと他の西洋列強は方々手を尽くします。よく言われることですが、戊辰戦争は薩長土肥に協力したイギリスと、旧幕府軍に協力したフランスとの代理戦争という側面もありました。

そして、話に出てくるグラバーさんというのは、イギリス出身の商人です。元は武器商人として日本に入ってきて、雄藩に武器の供与を行っていたまさしく死の商人なのですが、明治維新がなったのちは三菱の相談役や炭鉱の経営などに尽力し、日本に骨を埋めることになる人です。ちなみに、今でも日本四大ビルメーカーの一角を占めているキリンビールという会社がありますが、この誕生に

も深く関わっています。キリンビールの苦い味わいにずっと魅せられているおじさま方、一度はグラバーさんの墓に参った方がよろしいかと思えます（なお、墓は長崎にあります）。

グラバーと竜馬の付き合いは確かにあります。薩長同盟成立の前、竜馬が長州へ武器輸出をした際、竜馬はグラバーの会社であるグラバー商会から武器を買い入れ、それを薩摩に売り、薩摩を仲立ちにする形で長州へ横流ししています（こんなまどろっこしいことをしたのは理由はありますが、ここではその経緯は割愛）。そして、この武器輸出の一件をきっかけとして薩長同盟が成立します。

この薩長同盟がきっかけとなって反幕府的な活動が大きなうねりとなって、結果として明治政府が誕生したわけです。ここに、グラバーの、つまりイギリスの意向がなかったか、というのが加治説の骨子なんです。

筆者としては、薩長同盟の裏にイギリスの意志がなかったかと問われれば、「分らない」というのが正直なところです。正確には「さもありなん」というところです。グラバーが何らかの理由で以って、幕末期の日本の政局に干渉して来たとする言説に関して、そこまで反対するものでもありません。

けど、グラバーさんがフリーメーソンだったかという点、ちょっと怪しい気がしています。

いや、もちろんグラバーさんがフリーメーソンであつたかもしれない。基本的にフリーメーソンは自分がメーソンであることを隠す必要はありませんが、隠していたっていいんです。何らかの理由で以ってグラバーさんがメーソンであつたことを隠していたとしても不思議ではありません。

が、逆にグラバーさんがメーソンであつたという証拠もありません。加治さんの著作を読むと分かりますが、加治さんもグラバーさんがメーソンであつた証拠を示してくれません。読んでいくうちに「当時の有力者はすべからくメーソンだからグラバーもメーソンだ

ったのだろう」という、なんだかぶっ飛んだ理屈をつけてきます（これ、いわゆる「循環論法」ってやつです）。「原典主義派」としては、証拠がないんで何とも言えませんね、ということしか言えません。

っていうかこの説、グラバーさんがフリーメーソンでなくとも成立する説なんですよ。「グラバーさんがイギリスの国家的意志によって日本の政局に介入していた」という説にフリーメーソンなんていう色をつけてしまったがためになんだかアヤシゲな説になっているんです。

いや、誤解してはいけません。アヤシゲなのは、創作の世界ではあります。つまりは「物語受容派」としては言うことなしです。

ただ、「原典主義派」としては、「証拠のないことについては“証拠がない”って撥ね退けないとだめだよ」という立場なんですね。

歴史の受容っていうのは、その立ち位置によっても変わりますよ、っていうお話でした。

32、「コロポツクル説から見える明治日本」

皆さん、コロポツクルってご存知でしょうか。

アイヌの伝承にある小人で、アイヌに様々な道具をもたらした存在として知られるものです。アイヌの伝承によると、あるアイヌ青年が無礼を働いてしまったがために二度と姿を現さなかったと伝わっています。もちろん、現在ではアイヌの民話に残されている架空の人々とされています。

が、このコロポツクルの实在が取り沙汰されていた時代がありました。

それが、結構最近の事です。なんと、明治時代。

明治時代といえば日本の近代。清国や帝政ロシアに勝ったそのころに、コロポツクルの实在を主張する人々がいたんです。筆者の祖父母が明治末年生まれなので、筆者からしてもさして昔ではありません。

実はこのコロポツクルの实在説には、当時の日本が置かれていた学問的状況が深く影を落としています。

話は、モースさんの大森貝塚発掘に遡ります。

東京は品川にある大森貝塚。この発掘が日本考古学の旭日と言われています。お雇い外国人・モースが指揮を取って進んだこの発掘は、日本にも西洋と同じく石器時代があったことを如実に示すものでした。それが明治十年の事です。

ところが、当時の歴史学会はこの貝塚（というか、石器時代人たち）の扱いに弱り切ってしまいました。

日本には「日本書紀」「古事記」という、疑わざるべき「正史」がありました。この正史から逸脱することはあつてはならない、そういう雰囲気がありました。当時の日本の政権は（今でもそうですね）、天皇家の日本開闢、天皇の万世一系の元に成立して

いる政権でした。なので、その歴史観に反するようなことを言いづらい空気があったんです。しかもその上、他の遺跡でのちに発見された石器時代人の人骨の中には、「人為的」とされる損傷がありました。当時の考古学・人類学者たちはそれを「食人」によるものと示唆しました（現代的な視点で見れば、その損傷は人為的なものではありません）。当時の歴史学会には、石器時代人を自分たちの祖先と認めづらい風潮があったのです。

その中で、日本の考古学はこんなタイムテーブルを考えました。

“日本には石器を使っていた先住民がいたのだが、金属器を使っていた大和民族が先住民を駆逐した”

こう考えれば記紀との整合性も図れる上に、“祖先が食人集団だった”という汚名までそそげます。そんなわけで、その先住民探しに躍起になりました。

その中でやり玉に挙がったのがアイヌだったのです。

アイヌの使っている文様と当時発見された石器群の文様の類似性などから、当時の学界はアイヌこそが日本の先住民であり、それを大和民族が駆逐したのだ、と考えるようになりました。現代的な言葉で言いかえれば、縄文人「アイヌ、弥生・古墳時代人」大和民族、という説を取ったんです。

が、この説にも無理がありました。

そもそも、石器時代人とアイヌを結び付けるものがせいぜい「文様が似ている」程度のものでしかなく、当時から疑問が上がっていたんです。

そんななか、モースさんがある仮説を提示します。

プレ・アイヌ説とされるものです。

簡単に言くと、アイヌの前にも先住民がいたんじゃないの？ という仮説です。

歯の配列などの人類学的見地、アイヌたちの生活様式と石器時代人たちの生活様式に違いがあり過ぎること、特にアイヌたちが土器を作っていないこと（これは後に否定され、アイヌも土器を作って

いたことが判明します）を論拠にして、石器時代人たちはアイヌとは別のグループだったのではないかと主張したのです。モースさんの頭では、プレ・アイヌ↓アイヌ↓大和民族というタイムテーブルを取ったんです。

つまり、大森貝塚などで発見された石器時代人（縄文時代人）たちをアイヌと同一視するか、あるいは別の民族的グループにするかで論争が起こったんです。（そうすることで、大和民族＝食人民族という図式を払拭したんです。）

そんな中、ある人類学者がアイヌの伝承・コロポックルに注目します。かつてアイヌと交流していた小人たちが仲違いしてアイヌの元から去っていったとする伝承を、民話的な比喻だと考えたんですね。つまり、アイヌがコロポックルを駆逐したのだと。

これを以って成立したのが、石器時代人＝コロポックル説なんです。

これ、当時の人類学会の長である坪井正五郎さんという人がパウ・プッシュしたことにより、一気に学会での有力説となりました。（ちなみに当時の論文を読むと、想定されているコロポックルはやはり小人という扱いです。）

ところがこの説も、やがて他の学者さんから総ツツコミが入ります。

「伝承と現実をごっちゃにするなよ」とか、「いや、なんでコロポックルを想定する必要があるんだよ」と結構こき下ろされています。しかも、コロポックル説の前提であるプレ・アイヌ説さえそのうち疑問符が付きます。アイヌにもかつて土器が存在するという事実が判明するに至り、コロポックル説より先に前提の説であるプレ・アイヌ説が倒されてしまったんですね。

本丸が先に陥落してしまった感のあるコロポックル説ですが、しばらくはその命脈を保ちます。その主唱者である坪井正五郎さんという人は、前述の通り当時の人類学・考古学会の長老だったので、誰も正面切って否定できなかったんですね。いや、正確には学者さ

ん皆で（中には匿名で論文を発表してまで）総ツツコミをしていたんですが、長老さんは首を縦に振りませんでした。

そうして、主唱者が死んで初めて、コロポックル説は倒されたのです。

この事例、明治という時代の難しさを如実に伝えてくれます。

天皇制と考古学は元々相性が悪いんです。それが証拠に、現皇太子殿下が大学で古代史・考古学を専攻しようとして侍従たちに泣きつかれ、仕方なく中世史に宗旨替えしたというエピソードから分かります。考古学という学問は時として“歴史”という物語を根底から破壊してしまうことがあります。現在保護されている天皇陵に考古学のメスが入れば、天皇家の万世一系にも疑問の光が投げかけられるかもしれません。

それがゆえ、当時の考古学はトンデモない足かせをいくつもはめられて存在していたんです。

現代から見ると奇異な説に映るコロポックル説ですが、その背後には明治時代という必ずしも自由ではなかった時代の空気と、それに翻弄された学者さんたちの悲鳴にも似た叫びを聞くような気持ちになります。

32、「コロポツクル説から見える明治日本」（後書き）

注釈

以前も書いた記憶があるんですが、アイヌ語は「B」と「P」の区別がいまいで、日本語表記をした時「コロポツクル」「コロポツクル」二つの表記が出てしまいます。このエッセイでは語感の可愛さを優先し、「コロポツクル」を採用しています。

33、「現代のコロポツクル説・騎馬民族征服説」

前回、コロポツクル説という明治期ならではの学説を紹介させて頂きました。

おさらいすると、当時の歴史学の世界には「記紀」という重石があつて、その重石から逸脱するような論考を発表しにくい空気があつた、自身を食人民族と見なしたくないがために石器時代人を大和民族の外に求めた、という話をさせて頂きました。

現代的感覚からすれば「当時の常識にとらわれて事実を追求しないなど、学問にあるまじきことだ！」となつてしまいますが、ちょっと待って下さい。

学問なんてものは往々にしてそういうものです。特に人文系の学問というものは研究対象が極めてあやふやなものであることが多く（その辺りは以前のチャプターを参照してください）、その時代その時代の影響をもろに受けます。だから、どの学問でも「その学問とは何であるか？」というメタ研究がなされるんですね（余談ですが、日本の歴史学会はあまりこのメタ研究を好みません。メタ研究というのは往々にして先人の学者たちの失点を暴く作業なので嫌われるんです）。

何が言いたいのかというと、現代日本で息づいている学問にだって、明治の頃のように重石があるんです。明治と比べれば見えづらくなつてはいますが、学問という世界は先人たちの研究の上に成り立つ学問なので、どうしても先人から受け継いだ重石が存在してしまいます。

皆さま、騎馬民族征服説をご存知でしょうか。

一時期は歴史の教科書にも注釈の形で載ったことがあるそうなのでご存知の方も多いかと思いますが、古墳時代における政権交代の仮説で、江上波夫さんという考古学者によって主唱されました。

その説の大略はこうです。

『古墳に副葬されている遺物を検討すると、古墳時代前期と中期の間に隔絶がある。具体的には前期は鏡や勾玉などの文官的な装飾品が主であったものが、中期になると武具や馬具などの武人的装飾品が主となる。この結果から、古墳時代前期と中期の間に被葬者の性格が大きく変わったのではないか。もっと言えば、前期に支配者層であつた人々が、馬具などを持ち込んで日本にやってきた渡来人・騎馬民族によつて駆逐され、それ以降の支配者となつたのではないか。そして騎馬民族が天孫一族（天皇家）に連なつていくのではないか』

面白い説です。ちなみに手塚治虫さんなんか『火の鳥（古代編）』において騎馬民族説をとりいれて話を展開しています。いや、なにしろダイナミックじゃないですか。大陸を駆けていた騎馬民族が、極東の島国に乗り込んできて日本を征服したなんて仮説。

ただこの説、正直眉唾ものです。

騎馬民族説への反論はこの説の発表当時からありました。ネット用語的に表現すればまさに『フルボッコ』の『涙目』状態でした。けれど、主唱者はめげずに騎馬民族説を補強していきました。学会から相手にされなくなつてもなお。実は九十年代にある有名な考古学者さんが騎馬民族の主唱者と何度も論陣を張つたんですが、その学者さんは騎馬民族説を指して「融通無碍（ぶんつうむがい）」と表現しています。つまりところ、主唱者さんの手によつて、きわめて反論するのが難しい学説になつちやつたんです。ここで誤解してはいけないのは、反論しにくいからといってそれが正しい説とは限らないことです。ぐうの音も出ないほど正しい事に対して反論しにくいのはもちろんですが、中にはどこをツツコンだらいいのか分からず反論しにくい、という説も存在します。（余談ですが、この説が反論しにくい他の理由として、主唱者の人柄が挙げられます。主唱者・江上さんは上下の分け隔てなく誰にでも親しい人だったらしく、論陣を張つた件の学者さんも「学問上のこととはいえ人のいいあの人に論陣を

張るのは忍びない」旨の発言を残しています。なお、その学者さん
もまた考古学史上において人の良さで伝説になっています。）

なおこの説、既に主唱者の江上さんがお亡くなりになっておりま
して、下火になっています。そして、九十年代に江上さんに対し論
陣を張っていた考古学者さんも、既にこの世の人ではありません。
恐らくは、あと十年もすれば皆から忘れ去られる説となっているで
しょう。

実はこの説の誕生の背景には、発表当時の歴史学の動向がありま
した。

日本が戦争に負け、明治以来存在した『記紀』という重石から歴
史学は解放されました。かつてはばかりのあった記紀への疑問や
正史への異議申し立てが行なわれるようになったのです。

その中で、歴史学会にはあるブームが起こるんですね。

「万世一系つて怪しいんじゃないの？」説です。

記紀をお読みの方ならご存知のことかと思いますが、記紀には首
をかしてしまふような記述がいくつもあります。初代神武天皇と
十代崇神天皇の業績に驚くほど類似性があることや、武烈天皇から
継体天皇への皇位継承が何だか不自然な点とか。かつてはスルーさ
れていたそういう疑問点を指して、「これは何を意味するのか？」
という議論が戦後に沸き起こるんですね（マニアックな話になって
しまふんですが戦前にもこういう動きがありました。津田左右吉さ
んという戦前の研究者は、記紀にツツコミを入れるというスタイル
のせいで当時の政府に弾圧を受けていました）。

その中で、水野佑さんの「三王朝交代説」や、それを受けた井上
光貞さんの王朝交代説など、さまざまな王朝交代説が雨後の筍の如
く誕生します。

これ、今にして思えば戦前日本による抑圧への反発がなせるブー
ムでした。

騎馬民族説というのも、このブームの文脈に乗ったもののなの

です。

考古学の世界もまた戦前は抑圧されていました。もしかすると歴史学以上に。戦争に負けて記紀という重石がなくなった考古学も自由に歴史を語りたかったのです。その結果、海外から騎馬民族が攻めてきた、という学説になったのです。あと、これはある考古学者さんの言葉ですが、この騎馬民族説の裏には、戦前に東アジアを侵略した日本の行為への裏返しもあるのではないか、という論考も存在します。確かに、日本の外から他民族が攻めてきて侵略された、という歴史観は、帝国主義のままにアジア諸国に干渉していった戦前日本の裏返しです。つまり、歴史でもって罪滅ぼしをしようとする（無意識中の）意図があったのでは、という意見もまたあります。

筆者、この騎馬民族説を見ると、非常にコロポックル説に似ているような気がしています。

どちらもその時代の空気をモロに受けてしまったがために後世から見ると奇異な説となってしまっています。そして、主唱者が鬼籍に入ったことによりようやく説が下火になったこともよく似ていると言えます。

けれど、こういったことはこれから起こるでしょう。歴史は常に繰り返すのです。

そして、一介の歴史バカたる筆者は、たとえあだ花として消えてしまふ運命にあるこのような説も、興味の目を以って見つめ続けています。

33、「現代のコロポツクル説・騎馬民族征服説」（後書き）

注釈

騎馬民族説にあまり信憑性のない大きな理由として、いわゆる騎馬民族が必須の知識として持っていた馬の去勢技術が日本に根付いていない点が挙げられます。それに、歴史的に見て、日本は決して馬の遣い方が巧い人々ではありません。

34、「。。。を用意する時代、という視点」

歴史っていうのは常に連続です。

学校で歴史を勉強すると、どうしても連綿と続く歴史から、目立つ点ばかりを取り出して覚えさせられてしまいます。たとえば、1600年に徳川家康と石田光成が関ヶ原で激突するわけですが、そこに至るには二者の長年の対立や意見の違いがあるわけです。歴史を勉強していると、つい「関ヶ原の戦い」という地点にばかり目が向いて、その前フリがなおざりになってしまうことが往々にしてあります。

けど、そうやって点で歴史を捉えてしまうのは、実につまらない！歴史を眺めていて見えてくる目立つポイント（＝事件）というのはあくまで結果に過ぎません。実はその前フリはずっと前になされていたりするので。小説を読み慣れている人からすれば、「あ、そこに伏線があったんですか！」という驚きになるんです。

この、「。。。を用意する時代」という視点、歴史を眺めるにおいて重要なポイントの一つになります。

例えば、鉄砲伝来つてあるじゃないですか。

種子島に漂着したポルトガル人によってもたらされた火縄銃が、わずか二十年ほどで大量にコピーされ、戦国大名の持ちモノとなったのは皆様ご存知のことと思われます。

実はこれ、世界的に見ても珍しいことです。

そもそもですね、新しい文物がもたらされて、それを見様見真似にコピーを作り出すなんていうのは並大抵のことじゃありません。現代だってそうですよ？ 途上国に技術提供する時には、その先端技術もさることながら、その技術を支える基礎的な技術も同時に伝えなくてはなりません。新技術を受容するためには、まず基礎的な技術を持ち合わせていないとならない、というのは古今東西変わ

りのない真理です。

なのに、火縄銃をコピーできた日本。WHY？
これ、日本の製鉄技術の賜物です。

日本は古来より、独自の製鉄技術を保持し、発展させてきました。日本刀を作る際に使われる最上級の鉄である玉鋼の製造技術、繰り返し火と水にくぐらせて鉄の炭素含有率を整える鍛鉄技法は世界最高峰のものと言われています。この技術はもともと鎧職人や刀鍛冶といった武器職人、刃物職人などのための技量でした。

つまり、当時の日本は火縄銃を作れるだけの素地があつたんです。火薬の爆発に耐えられる強度を持った鉄、その鉄を狂いなく定型に収める冶金技術。そして、複雑な力クリ部分を組み上げる職人芸。当時日本では火薬を作る技術はありませんでしたが（というより材料がない）、一説には当時日本は火縄銃の保有数において世界一位だつたと言われています。

おわかりでしょうか。実は、火縄銃の爆発的浸透の陰には、古来より続く製鉄技術という前フリがあつたんです。

あと、「尊王攘夷論」ってあるじゃないですか。

簡単に言つと、幕末の頃に猛威を振るつた思想で、「天皇大好き！ 外国は打ち払え！」っていうスローガンのことです。この単純なスローガンにより、幕末期には死ぬ必要のなかった人が数多く死んでいます。そういう意味ではきわめて罪作りなスローガンとも言えます。

この尊王攘夷、教科書を読むと幕末期にポツと出てくるんですが、実はこの尊王攘夷論にも、長い長い前フリがあります。

なんと、そのスタートは水戸光圀にまでさかのぼります。

水戸光圀さんというと諸国を漫遊している暇なお爺さんというイメージが人口に膾炙していますが、実際には領国である水戸と江戸を行ったり来たりしたり、あるいは少し鎌倉に旅をしたくらいで、むしろ引きこもりの気がある人でした。そんな光圀さんが引きこも

って何をしていたのかというと、歴史書の編纂でした。「大日本史」という本なんです。この編纂にあたり、水戸光圀さんが足利尊氏をこき下ろします。「後醍醐天皇からの命に背いて幕府を作るとは、儒教道徳に照らして許されるものではない！」というスタンスを表明したんです。まあ、徳川氏は一応後醍醐天皇側についた新田氏を名乗っているのです。水戸光圀的にはそれでOKなのでしょうが、この叙述姿勢が後に、「天皇と將軍だったら、天皇の方が偉いんだね！」という論理展開につながり、やがて尊王論が誕生します。

で、もう一人、尊王論に影響を与えた人がいます。

松平定信です。松平定信といえば、寛政の改革を行なって幕府の改革を行なったとされる人ですが、この人、幕府の権威を高めようとしたのか、こんなことを言っています。

「幕府の政治大権は、天皇から信任を得て与えられているものなのだ！ だから、幕府の命令は天皇の命令も同じ！ そして、天皇も一回信任したからには幕府の命令を聞いてもらうぞ！」

実はこれ、「大政委任論」という名前がついています。最初は公家勢力への幕府の政治介入を正当化する理論だったのですが、裏を返せば「幕府の政治大権は、天皇から信任を得なければ剥奪もできる」という風にも解釈できます。事実、この松平定信のこの説は尊王論の大きな柱になります。そして、この説の元に、大政奉還がなされるのです。

そして、松平定信の時代、外国船が日本近海に現れ始めます。これに危惧を抱いた学者・林子平さんにより「海国兵談」という本が著され、その林さんの影響を受けた学者、蒲生君平さんにより「不恤偉」という本が著されます。どちらも異国船の脅威を説いて水際防衛の大切さを繰り返し述べています。

それまで、幕府は正直異国船への対応については殆どスルーを決め込んでいました。そもそもそれまでは、極東の島国に用のある異国など殆どなかったのです。ところが、江戸時代後期ともなると世界的な捕鯨ブームにより極東の捕鯨基地が欲しいという各国の意志

の元、さまざまな国の捕鯨船がやってくるようになります。

そんなこんながあり、幕府は「異国船打払令」を出します。こうして、攘夷論も完成します。

そして、いつのことだか、本来は全く別々だったはずの尊王論と攘夷論がくっつきます。一説には往時の帝・孝明天皇が「まろは異国が嫌いでおじゃ」と発言したことが両者を結びつけたとされていますが、その辺りの細かい事情は未解明の部分が多くよく分かっていません。

なんと、攘夷論は江戸時代の後期、尊王論に至っては江戸時代の前々中期にはその黎明があるのです！　なんと長い前フリであることか（笑）

歴史を見るにおいて、「。。を用意した時代」という観点を導入すると、今までの固定観念的な歴史観が翻ることがあります。そして、「つくづく歴史は流れなんだなあ」と再確認することが出来ます。

P.S. なお、このエッセイの中でも、チャプター19〜22くらいは「。。を用意した時代」という観点で歴史を語っています。ね？　違った時代像が見えてきますよね？

35、「日本刀の振り回し方」

日本人の魂、日本刀。

そういうことをいうと、「何たる時代錯誤!」、「お前もエビバリサムライスシゲイシャ(？米米クラブ)の回し者か!」、「えー、なんだか矢車さん、目が据わってて怖い」などと非難轟々を受けてしまいそうですが、大事なことなので、もう一度言いましょう。日本人の魂、日本刀、と。

“主に両手で使う片刃の湾曲刀”であることが日本刀の特徴だとすれば、その黎明は奈良時代にまでさかのぼることが出来ます。そののち、武士の武器として定着し、現在我々が想像するような日本刀の形が誕生するのが平安時代のこと。そしてそののち何度かの変化を経て、江戸時代に武士が差すような日本刀になっていくのです。そう考えると、我々日本人と日本刀とは千年以上の付き合いがあるということになります。やっぱり、日本人の魂ですね、日本刀。けれど、その日本刀の操作法、すなわち剣術には未解明の部分が多いのです。

どういうことか。本日はその話です。

日本刀が武士たちの武器となった平安時代頃、合戦の中心兵器は弓でした。

意外に思われるかもしれませんが、日本の合戦史を追っていくと、殆どが弓戦であることが分かります。たとえば大友皇子と大海人皇子(後の天武天皇)の激突であった壬申の乱において、大友皇子・大海人皇子両軍とも、弓を運用しただけで勝敗が決してしまいました。もちろん、歴史書の潤色である可能性はありますが(あんまりエグいことを書き遺したくなかった可能性はありますね)、飛鳥時代から戦といえば弓だったということが分かります。そしてそれは平安時代になって、武士が台頭してくるようになって変わらませ

ん。やはり、戦の主武器は弓でした。

その証拠は、残っている防具にもあります。当時の防具である大鎧という鎧、良く見ると、胸部分の防備が少々心もとないように見えます。詳しくはググって頂いて大鎧の図を参照してもらいたいのですが、右胸と左胸に小さな板をぶら下げているだけです。これはどういうことかというところ、弓をつがえる時に邪魔にならないように、その部分の防備を薄くした結果なんですね。証拠はそれだけではありません。当時の鎧は緞鎧といって、小札という小さな革製の板を糸で結んで配列し防禦とするものでした。これは刃物に対する防備にはあまり向きません。むしろ、矢への防備に向いている具足と言われています。また、当時より武士の表芸が弓であるとされていた点からも、当時の武士の主武器が弓であることが分かります。

じゃあ、当時の日本刀はどういう扱いだったのでしょうか。

実は、セカンドウエポン扱いだったと言われています。

弓戦でも決着がつかなくなると、当時の武士たちは組み打ち戦といって、相手を馬から引きずりおろして組み伏せて首を取るといった戦闘法に切り替えました。その際の武器として刀の出番があるので、その時に使うのは長い刀ではなく、馬手刺（鎧通）と言われる厚手の短刀でした。

つまるところ、相手を柔術で組み伏せて後、動けなくなったところに馬手刺を鎧の隙間にぶっ刺す、ということです。うーん、結構血ナマ臭い話になってきましたねー。ってか、現在に伝わる剣道とはまるで刀の使い方が違うような……。

ともかく。これが平安時代における日本刀の使い方でした。

しばらく、日本の合戦史は平安時代式のそれと大差がありません。が、元の二度にも渡る来襲や、楠正成に代表される悪党の台頭によって、少しずつ武士たちの戦い方も変質してきます。鎌倉武士たちの多くは騎兵でしたが、やがて徒歩で戦闘に参加する者たちが増えてきます。それに伴い、多少の技量が不可欠な弓も絶対的な武器

ではなくなってきました。もちろんそれでも弓が戦場での主役だったことには変わりありませんが、それ以外の武器を使うものも出てきます。この時代辺りから、「雑兵」が誕生し始めたんです。

そうして戦国時代には、歩兵が戦の中心となります。そして、戦の主役武器にも変化が訪れます。弓から鉄砲へと変化が訪れるんですね。が、この頃になって、ようやく剣術というものが歴史の表舞台に登場します。でも、ここでもなお、剣道のような剣術ではありません。

俗に、この時代の剣術を指して“介者剣術”と称呼します。腰を深く落として構え、脇や首元、股などを狙う剣術です。この介者剣術は、相手が軽装の鎧を着ていることを想定しています。剣道の有効打突には「面、胴、小手、突き」の四打突がありますが、戦国時代の足軽でさえもその打突は効きません。頭にも胴にも防具をしています。介者剣術の狙う脇や首元、股というのは鎧の隙間で、介者剣術はその鎧の隙間を狙う剣術として発達するのです。

じゃあ、「面、胴、小手」の剣術が発達するのはいつなのかといえます。実は、江戸時代の中期まで待たねばなりません。

徳川家康により天下が平らかとなり、戦が起こらなくなってもなお、剣術はしばらく介者剣術の流れでした。中にはそうでもない例（柳生新陰流など）もありますが、しばらくは介者剣術が剣術界における主流でした。それは、当時の稽古法が木刀による形稽古であったことも影響しているでしょう。

しかし、また剣術は変化を遂げます。

そもそも、介者剣術の想定している「鎧をまとっている相手との戦闘」という前提が成り立ちにくくなったほど、江戸時代は平和でした。むしろ想定しなくてはならなくなったのが、「平時での戦闘」でした。つまり、防具をまったく付けていない相手と戦うという風に、剣術の掲げる前提条件が変化したのです。こうして、素肌剣術が誕生します。

具体的には竹刀の発明によって試合形式による剣術鍛錬が可能となりました。試合形式になったことで剣術のスピード化・技術重視化が進み、動き回るに不利とされた介者剣術の腰を落とした構えは忌避されました。そして、他流派との試合の中で、ある程度ルールが必要ということになり、その中で決まってきたのが有効打突という概念なのです。

ちょっと駆け足で説明してしまった感がありますが、剣術も大きく変容しているのです。

剣術、といいますか、武術というのは往々にしてその時代の兵制、防具の製造技術、武器の抱えている特徴などに大きく左右されます。なので、一口に剣術と言っても、その内実は時代によって違いがあります。剣道部出身の皆様、戦国時代にタイムトラベルの際には剣道的な方法論（＝素肌剣術）は通じないので、現地で介者剣術を覚え直し下さいませ。

36、「アマテラスとツクヨミが存在する意味」

イザナギがイザナミと永久の別れを遂げて黄泉から戻って来た時、イザナギはみそぎ（水で体を清める行為。今でも手水としてその名残があります）を行ないます。その際に、左目を洗った際にアマテラスが、右目を洗った時にツクヨミが、そして鼻を洗った時にスサノオが生まれました。これを見たイザナギは、「非常に優れた三子が生まれた」と喜んで、アマテラスに高天原・昼の世界を、ツクヨミに夜の世界を、スサノオに海原の世界の支配を委任しました。と、これがイザナギ・イザナミ二神による「神産み」の最後のだります。

これ、一般には古代日本の天文観を示したものとされます。すなわち、アマテラス＝太陽、ツクヨミ＝月、ということですね。そして、その二つの天体が昼と夜を管理しているという世界観を示すものとされているんです。

けれどもこの神話、ちょっと意味深なのです。

え？ どういう意味で意味深なのか、って？

ちよいと説明させて頂きましょう。

江戸時代の法典である公事方御定書（かの大岡越前がまとめたアレです）において、こんな決まりがあります。

“夜の盗みは昼の盗みと比べて罪が重い”

当時の刑法だと、同じものを盗むでも夜の盗みの罪が重かったのです。「寝静まった頃に泥棒に入るなど卑怯の極み」という武士の一分的な理由が表立った理由です。

けど、現代的な視点で考えると変ですよ？

現代的な法概念だと、昼だろうが夜だろうが同じものを盗んだらやはり被る罪は同じです。もちろん、現代でも非常事態において乗的に窃盗や強盗を行なった場合には重罪になるんですけど、そ

の法律の背景には「緊急事態に犯罪に手を染めるのは、明確な社会上の害悪だから」という治安維持上の理由があります。「卑怯だから」というような倫理的な問題ではありません。

何が言いたいのかというと、昔の人たちは、昼と夜、別々の法体系・倫理体系に縛られていたのではないかということです。

中世、大体鎌倉時代頃の事です。

当時の鎌倉武士たちは、きわめて威風堂々・正々堂々たる戦いぶりが知られています。古典に通じた方たちなら、平家物語で描かれる武士たちの名乗りや、扇的のを射てみよなどという風流な戦いぶりが頭を掠めるのではないでしょう。

「やあやあ我こそは生国は。父は名に聞こえた何某、八幡の加護を得て」と大見得を切って音の鳴る矢、鎗矢をつがえて放ち馬に鞭をくれる武士像、それが世に膾炙した鎌倉武士かと思えます。

もちろん平家物語はフィクションを多く含んでいるものと思われま。なので往時の歴史を知りたいと紐とくには注意が必要ですが、かなり色濃く当時の武士たちの気分を表しているものと考えられます。

それに、鎌倉武士たちが正々堂々たる戦い方を好んだのは、元寇における記述にも明らかです。一々名乗りを上げてから鎗矢を放って一騎駆けで突撃してくる武士のことを、元の兵卒たちが嘲笑って弓で射殺したという記録も残っています。

けれど、そんな正々堂々たる戦い方をしている鎌倉武士ですが、夜になるとまったく正々堂々から外れた戦い方に手を染めます。

夜討ち・火付け・奇襲攻撃何でもござれ。正々堂々たる武士を描いた平家物語の中にさえ、そういった“夜間にだけ”卑怯な武士が時折見受けられます。けれど、これは卑怯なのではなくて、実は往時の倫理観に拠るものなのではないかという説が出ています。

つまり、昼間は卑怯な事をしてはならないけれど夜だったらOK、という倫理観があったのではないかと。言い方を変えれば、昼間に

は昼間の倫理観があつて、夜には夜の倫理観があつたのではないか、という説が出ているんです。

昼間の倫理観？ 夜の倫理観？ そう書くと、なあにそれ、と戸惑われる向きもあるかと思いますが、これ、実は現代にも僅かながら残っている習慣です。

例えば、夜に口笛を吹くモノじゃない、とか、爪切りをするもんじゃない、と怒られたりしませんでしたか？ あれはもちろんご近所迷惑になるとか暗い中で爪切りをすると怪我しやすいからという実際的な理由もあつたりしますが、一方で“夜にしか適用されない倫理観・法概念”による縛りとも捉える事が出来ます。

あと、かつて五十年ほど前までは農村部に存在したとされる“夜這い”も“夜にしか適用されない倫理観・法概念”の内側に存在するものです。

夜這いとは、男の人が女の人の家に忍び込んで性交渉を持つ行為で、かつて日本に存在した結婚制度である通い婚の名残としても解釈されていますが、男の人がその目的を達成するためには当然のことながら他人である女の人の家に侵入する必要があります。いくら昔といえどやはり他人の家に無断で入るのはまずいこととされています。当時はプライバシーという概念は存在しませんが、自分の家と他人の家という概念は当然ありました。

が、夜になるとその事情はがらりと変わります。夜の闇にまぎれて男の人は他人の家に上がり込み、女の人は男の人を迎えていたんです。それを黙認する空気、言い換えれば倫理観や法体系が夜という時間帯には存在したんです。

随分と遠回りしましたが、ようやく結論めいたものが見えてきました。

実は、アマテラスとツクヨミが昼の世界と夜の世界を受け持ったという神話は、昼夜で異なる倫理観・法体系が存在する起こりとして挿入された神話なのではないかということなんです。

昼間の最高神と夜の最高神がいるということは、その元で展開される森羅万象の振る舞いに変化することです。昼と夜では支配者が異なるゆえに、運用される法律も違つし適用される倫理観も異なる、ということなんです。

昔の人たちの世界観と、現代人の世界観は我々が思う以上に異なっている。言い方を変えればまるで現代人とは異なる世界観の元に昔の人たちは生きていたんです。

37、「大きな柱穴」高層建築？」

十年ほど前の事です。島根県の出雲大社にて発掘がおこなわれ、その中でかつての出雲大社の柱穴が発見されて大騒ぎになりました。それが、ただの柱穴じゃなかったんですね。直径135センチの木材を金輪で寄りまとめ一つの柱となしていたんです。使われている木材一つでも、人の抱えることが出来ない大きさです。それが三つも寄り集まっているとなれば、その大きさは推して知るべし。考古学的見地から見ても、かなり大きな建造物があったと見なされています。さらに進んで、かつては48mもの本殿が建っていた、という説が提出されました。

あと、青森の三内丸山遺跡。縄文時代中期の大規模遺跡である当地からも、規則的に並んだ大きな柱穴が発見されています。現在、その柱穴を元に三層の掘立柱建物が復元されています。

けど、一歴史バカとしては、出雲大社とか三内丸山遺跡の高層建築物説に対して懐疑的です。

そもそもですね、筆者がこの件に関してそもそも懐疑的なのは、「実物が残っていないから」なんです。

考古学の世界には「理論遺物」という概念があります。たとえば、土の下から石の矢尻（石鏃）が出土したとします。けれど、石鏃はそれ単体では存在しません。石鏃はあくまで矢の一部として存在するものです。恐らく、その石鏃が活躍していた時には、有機物（具体的には木）で構成された矢の部材と共に存在したはずなのです。そして、考古学においては、そういう「出土しないもの」を想定しないといけませんよー、というのが理論遺物という概念の概略です。ただこの理論遺物を考える際に注意しなくてはならないのは、そうやって「ある」と見なされているものの実際の形が見えてこないということです。

どういうことか。

今回の柱穴の件に則して言えば、柱穴があるということにより、そこに柱が立っていたことは分かりますし、その上に何がしかの人工物が立っていたことは分かりますが、ではその上にいかなる建物が建っていたかとなると「分からない」としか言いようがないんですね。

三内丸山遺跡の場合なんかはまさにその「理論遺物」の取り扱いで紛糾しました。太い柱穴がなにを意味するのかで議論になったんですね。中には「柱が建っていたただけだったんじゃないの？」という意見もありましたし、「いやいや、恐らくは三層の物見櫓だったのだらう」という意見もありました。結局意見をまとめることが出来ずに、折衷案的な屋根のない三層の物見櫓が復元されました。

文献資料の存在しない考古学において、一度失われてしまった「理論遺物」を復元するのは恐ろしく難しいのです。

では、出雲大社の方はどうでしょうか。

実は、出雲大社本殿に関する文献資料はかなり量が残っています。とは言いましても、古代の資料というのは元々数が少ないので、「比較的」という限定条件が付きませんが。

出雲大社における最初の文献は、なんと記紀です。

出雲大社の祭神であるオオモノヌシが天孫一族に屈服する時に、「従ってやつてもいいけど、ぼくらの生活は保護してよね！ 立場は保証してよね！ 家も作ってよね！」と条件をつけ、天孫一族がそれを飲むくだりがあります。その中で、「あんたらが住んでいるような背の高い家を作ってくれたら、ずっとオレ、そこで自宅警備員をしてるからさ！」と大きな建物の建築をオオモノヌシは天孫一族に頼んでいます。

そして、平安期の貴族向け教科書である「口遊」という文献には、「建物で高いもの、出雲大社が一番、東大寺が二番、京都御所の大極殿が三番（意識）」と謳われています。

また、平安期の歌人である寂蓮法師という人も、出雲大社の天を衝くような大きさを謳った歌を残しています。

こうやって見ていくと、文献資料的にも出雲大社は高層建築だったと思えてきますよね。現在、出雲大社高層建築物説の文献資料的証拠は以上でして、さらに考古学的証拠である大きな柱穴の発見がこの説を補強する形になっています。

ただ、この文献資料にどれだけの信憑性があるのかというと微妙なところですよ。

古事記の記事については、（もちろん一定数の事実が含まれていると見なすべきでしょうが）その運用には慎重を期する必要があります。特にオオモノヌシの時代となると神話の時代のことです。これをそのまま事実と受け入れるには無理があります。もちろん、後世に起こった何かを仮託して書かれた逸話だという可能性はありますが、このまま事実として扱うのは危険ですよ。

また、「口遊」や寂蓮法師の歌については、早い段階から反論が出ています。「口遊で歌われているのは出雲大社ではなく、後ろの山だったのではないか？」とか、「当時の和歌は多分に当時の貴族たちの美意識の元に作られており、事実を反映しない場合が多い」などなど。

こういった論理展開もまた危険なんです（こういう論法を大々的に使ってしまうとそもそも古代史の文献史学的研究ができなくなってしまうので）、史料的に出雲大社が高層建築物だったのかというと「わからない」というのが現在の研究成果でしょう。

いや、筆者は別に出雲大社や三内丸山遺跡の柱穴群を「断じて高層建築物の跡ではない！」と主張したいわけではありません。筆者のスタンスは、「高層建築かもしれませんが、そうじゃないかもしれません」程度のものだけありません。

なぜ筆者がこういうスタンスを取るのかといえば、そっちの方が面白いからです。

あの柱穴跡を高層建築物の跡だと認めてしまった段階で、あの柱穴は高層建築物の一部となつてしまします。そうすると、想像の余地がないんです。例えば、三内丸山遺跡の柱穴が、本当はトーテムポールみたいなものの痕跡だったら？ とすると、やっぱり縄文人とインディアンにはある種の関係があるのかしらん、というような歴史ロマンをくすぐるような想像の余地を奪つてしまします。

「くだ！」と断定することは、学問においては大事な事です。それは学問が「くだ！」を積み上げて存在している知識体系だからです。けれど、我々アマチュアがそんな学者のお約束に従う必要はありません。

歴史バカという人種は、正しい歴史を楽しんでもいい人種ですし、面白い歴史を楽しんでいい人種でもあるのです。その辺りは、各個歴史バカのスタンス次第ということなんですネ。

38、「トリックスター・陰陽師」

日本の平安時代を舞台とした創作物には、かならずといっていいほど「陰陽師」という人たちが出てきます。

式神を使役したり魔方阵を描いたりして妖怪変化の類を追い払ったりする姿は、いまや日本の平安時代ものの文芸・映像分野では一つの定番と化しています。恐らく、陰陽師ブームを作ったのは夢枕獏さんの「陰陽師」シリーズからでしょうがいずれにせよ、陰陽師という存在が市民権を得て久しくなりました。

けど、陰陽師という人たちは、なぜこんなにもクローズアップされているのでしょうか。

実は、この陰陽師人気というのは、日本人と陰陽道との関わり方に根差したもののなのです。

本来陰陽道とは、中国の民間信仰である道教から派生した卜占術であるとされています。正確には、古来より中国に存在した「陰陽」の二項対立的世界観を元に、その二者の配置を感知することにより吉凶を占ったり先行きを見通そうとした学問でした。

これも後世ののですが、「風水」が陰陽道の基礎的な形だと思っ
て頂けるほど当たります。

が、陰陽道はやがて、「自然を感知する」のはもちろんのこと、「自然を操る」のを志向するようになります。

さつき、陰陽道は「陰―陽」の二元論の支配下にあると書きました。陰と陽二者がどういうバランスで配置されているのかを考えることによって自然を読もうとしたのが本来の陰陽道でしたが、やがて、「人工的に陰と陽を吉祥な処に配置すればいいんじゃないかね？」ということになります。こうして陰陽道はやがて、吉祥に合わせた振る舞いを人々に求めるようになります。吉祥に合わせた振る舞い、つまりは呪術的な側面が出てきたんです。

しかしながら、こういった変化がどこで起こったものなのかは良く分かっていません。昔は中国でこういった動きがあったのではありません。近年では中国から 陰陽 二元論や五行説を取り入れた日本が、独自に展開させたとも言われています。

日本に陰陽道が伝来したのは聖徳太子の頃です。

当時は仏教と神道との血で血を洗う闘争が展開されていた時代ですが、陰陽道は地味だった（さらに言えばあまり中国本土でも流行していなかった）こともありその争いの渦中に入ることはありませんでした。仏教が舶来宗教として頑張っている間に陰陽道はのらりくらりとやり過ごし、なんだかんだで律令時代にまで到達しました。律令制下において、陰陽道は方技と呼ばれる特殊技能として扱われました。その業務は天文を眺めて物事の吉凶を調べたり、あるいは天文観測を元に暦を作ったりしていたんですね。こうやって陰陽師たちに役割が与えられた奈良時代のあたりでも、まだまだ陰陽師は地味な存在です。なんでかという、この頃の日本宗教史を眺めてみると容易に分かります。奈良時代といえば東大寺の大仏建立。そうなんです。飛鳥時代に神道を相手取って竜虎合い食む戦いをしていた仏教が、苦難の時代を超えてもてはやされていたんです。国家的に仏教に帰依するのが当時の朝廷の方針だったんですね。

陰陽師が日の目を見るのは、平安時代に入ってからです。

平安時代。794うぐいす平安京。なにやら優雅なイメージですが、実態は決して優雅などではありません。

度重なる加茂川の氾濫、人が集まったことにより起こる疫病の蔓延、京のきらびやかな空気に魅せられて現れた強盗や山賊・追剥。芥川の『羅生門』的な世界が当時の平安京の実態でした。

さらに、平安時代は（奈良時代もですけど）貴族たちによる権力闘争の時代でした。朝廷で出世するためにライバルを蹴落としたり、無実の罪を着せたりなどなど日常茶飯事。そうやって蹴落とされた側は、当時死刑制度が停止されていたので地方に配流されました。

恨みを買つと疑心暗鬼に陥るのは今も昔も同じ。蹴落とした側は、「もしかして、あいつに恨まれてるんじゃないな」と夜がな震える日々。そして日ごろの偏食・運動不足がたたつて幻聴や幻覚を見るようになります。そうやって衰弱している中で疫病が流行したりして死んでしまつたりすると、「もしかして、あいつの祟り！」と、配流された人たちの怨念による祟りだとされるようになります。怨霊思想の誕生です。

ことがここに及び、ようやく陰陽道が日の目を見るようになります。

仏教思想では怨霊に対抗できないんです。仏教は宗派の違いこそあれ、大抵は輪廻（生まれ変わり）を説いています。恨みを抱いた人であっても、みなすべてが輪廻の輪に取り込まれるというのが仏教の基本的な考え方です。そう、怨霊思想に対し仏教には打つ手が存在しなかつたのです。打つ手というより、そのようなものは存在しないというスタンスなのですからね。

その二ツチを埋めるべく名乗りを上げたのが陰陽道だったので。陰陽道はただ吉凶を占うト占術ではありません。中国の道教から取り入れた呪術のノウハウがあります。中には相手を呪つたり、あるいは誰かからの呪いから我が身を守る術まで心得ています。疑心暗鬼にかられる貴族からすれば、こんなに頼りになる存在はありませんでした。自分の身を呪術的に守ってくれるのみならず、相手まで呪い殺してくれるとあれば一石二鳥。というわけで、殿上人と言われる帝との拝謁可能な貴族たちでさえも、陰陽師のアドバイスを聞いて行動するようになります。

ここで、陰陽師と貴族の關係に、一種のねじれが誕生します。当時の身分制度である官位制からすれば、陰陽師と貴族には大きな身分格差がありました。当時の陰陽師は官職として存在しましたが、その頭である陰陽頭以外はかなり低い官位です。中には世襲ではなく民間人から登用されたこともあつたと言います。身分の低い陰陽師が、身分の高い貴族に対して「今日はこの方角が危険なので、

そっちには行かないで下さいね」とか「運動をしない方がいいよ」なので、蹴鞠などは慎み下さい」と指示を出す格好になっているんです。

お分かりでしょうか。

陰陽師って、当時の身分制度の中にあって、きわめて変な位置にいる存在なんです。

陰陽道という特殊技能を駆使して、現実世界での有力者である貴族たちを相手に対等にものを語る。その姿はさながらトリックスターなのです。

ときどき実社会でもいますよね。特に会社の中で権力を持っているわけではないのに、皆が恐れるカタブツ部長に直言できるような人。そういう人は疎まれる半面、一方でガチガチに固まった組織の情報の流れを攪拌する役割を有しています。

その特殊な立ち位置こそ、陰陽師が繰り返し文芸・映像上で再生産されている理由なのです。

39、「天照大神という神様の存在は何を示すのか」

アマテラスオオミカミ

天照大神。日本神話における最高神にして、皇室の祖となる大いなる女神。

太陽の化身とも目され、のちには大日如来の仮の姿としても理解される、日本神道における最大最強の神様です。

最高神だけあって逸話にも事欠きません。弟のスサノオが父・イザナギの怒りを買って天下ることになったときには、姉である自分に挨拶に来たスサノオのことを誤解して、女性らしからぬ鎧姿に身を包んでスサノオを迎えたというドジっ子っぷりを見せています。そしてその後、スサノオの乱暴者振りに嫌気がさして天岩戸に隠れるという行動に出ます。きっとこれ、日本文学史上初のひきこもりです。

とまあ、そんな天照大神様ですが、昔は最高神ではなかった、という説があります。

タカミムスヒ

高木神という神様がいます。記紀を読むとたまーに顔を出すあんまり目立たない神様なんですが、この神様、時折不思議な存在感を発揮することがあります。たとえば、出雲の大国主命を屈服させる戦いであつた平定戦において、出雲によこしたはずの使者がすっかり籠絡されてしまったとき。その使者のだらしなさにキレ、弓で射殺してしまいます。また、この高木神様、実は天照大神の孫であり天孫降臨の主役であるニギハヤヒの外祖父です。で、そのニギハヤヒの天孫降臨のあたりで、高木神様が天照大神をさしおいてニギハヤヒに命令を下している外伝も存在します。「実は昔は高木神が最高神だったんじゃないの？」という説はそれなりに支持者のある説です。

でも、ここで疑問がわきます。

じゃあどうして、天照大神が最高神として叙述されているのか、という謎です。

実はこのお話、歴史学という学問が神話とどう向き合うべきなの

かを示す好例なのです。

明治のころ言われていたのは、「天照大神」卑弥呼」説です。

当時の歴史学は「記紀に書かれていることは疑うべからず」な空気があったため、基本的に記紀の記述は事実の反映と見なされました。とはいってももちろん「神様が本当にいる」ということではなくて、ある実在の人物がいて、それが神格化されたのではないかと。

そこで、卑弥呼に白羽の矢が立ったのです。卑弥呼＝天照大神ならば中国の三国志（魏志倭人伝）に記された邪馬台国とヤマト政権が一つの線としてつながります。すつきりとした説になるんです。

ただこの考え方は現在ではあまり主流ではありません。

現在では、神話として語られるものを事実として扱うことにきわめて懐疑的です。そもそも、記紀というものの自体が、皇室の、ひいては日本国のアイデンティティを他国に示すために叙述されているので、多くの潤色が混じっているものとされています。

神話が確かに事実を反映している可能性はありません。けれども、伝わってきた物語から事実と虚構を仕分けするには、少々古代という時代は遠いのです。

現代ではむしろ、「なぜこのような神話、歴史が叙述されたのか？」という問いの下に、古代史の文献研究は進んでいます。

最近主流なのは、「天照大神・ニニギの関係と、持統天皇・文武天皇の関係を重ね合わせようとしているのではないか？」という説です。

どういうことか。

これ、記紀が成立した当時の政治状況を説明させていただかねばなりません。

記紀成立当時、皇室の血筋は天武天皇系で占められていました。壬申の乱で天武天皇が天智天皇の子・大友皇子を退けてからというもの、天智天皇系の血筋はしばらく皇位継承から離れていました。

実はこの傾向は奈良時代の後半まで続きます。794年の平安京遷都も、実は天武系から天智系に皇統が移り、天智系の天皇だった桓武天皇が天武系の都・平城京を嫌ったゆえとも言われています。

が、その天武系皇統にあつて、持統天皇から文武天皇の政権はちよつとだけ肌合いが違います。持統天皇は天武天皇の皇后ですが、同時に天智天皇の娘でもあります。そして、持統天皇と天武天皇の孫である文武天皇は、天智・天武両方の皇統を伝える天皇だったんです。その微妙な地位がなせる技でしょうか、持統天皇から文武天皇の時代は非常に不安定な時代です。皇位継承に当たり何度も謀反が起こっています。そして、そのたびに持統天皇は肅清を重ねています。

そのころに記紀が編まれた――。そう、そこに政治的な意図があったんでは？ と。

つまり、持統天皇―文武天皇ラインは、神話で自らの正当性をアピールしたかったのではないかと考えられているんです。大いなる女神が孫である天孫を後見して日本を平定していくという神話は、まさに持統天皇と文武天皇の関係そのものです。そうやって神話と現実をオーバーラップさせることで、持統天皇・文武天皇ラインの正当性を主張しようとしたのではないか、という説なんです。

お分かりでしょうか。

現代の歴史学は、決して神話を無価値なものとはみなしていません。ただ、現代の歴史家たちは神話を事実とはみなしていません。「神話という物語が紡がれ、受容されたのはなぜか？」という視点をもとに、神話から歴史を見つけ出そうとしているのです。

【注釈：卑弥呼】

実は、現代歴史学においては、「神功皇后・卑弥呼オーバーラップ説」は有力なものとされています。

つまり、魏志倭人伝を読んだ日本人が、それに合わせて神功皇后

の話を作り、倭人伝との整合を図ろうとしたのではないかという説です。

神武天皇即位が今でいう紀元前660年に設定されており、神功皇后の登場するあたりはちょうど卑弥呼が活躍したころなんです。

卑弥呼＝天照大神としてしまうと、紀元前660年に神武天皇即位という記紀の歴史観に反してしまいます（系譜上、神武天皇は天照大神の子孫に当たる為）。むしろ記紀は、卑弥呼を神話の時代の人物としてではなくて歴史の時代の人物として扱おうとしているわけです。

40、「大正時代のプロジェクトX・明治神宮」

皆様、原宿に行かれたことはおありでしょうか。

竹下通りを挟んで高名な服飾店が軒を連ね、一本裏路地に入ればオリジナルブランドの服飾店や雑貨屋、古着屋さんがひしめきあっています。そして行きかう人たちも最先端の流行に身を包み、軽やかに行き交うこの街は、さながら日本のシャンゼリゼ。

……あー、いえ。筆者にとっても思い出深いところなんですよ。学生時代、学校が東京にあったこともあって渋谷から原宿・新宿あたりでよく遊んでいました。念のため言っておきますが、学生時代も現在も「イモっばい」と評される筆者、オサレ街原宿で見事に浮いていたのは言うまでもありません。

いや、このエッセイは筆者の思い出を喋るものではありませんでしたね、失礼しました。

これは歴史エッセイなので、歴史ネタで喋りたいと思います。

東京に土地勘のない方だとアレですが、原宿駅の山手線外延部には森があります。正確には、神様のおわします森である「杜」なんです。そう。原宿には明治天皇を祭る明治神宮が隣接しています。実は、この明治神宮、明治から大正、昭和現代に至る大プロジェクトが隠れているのです。

というわけで。

プロジェクト、エーックス（あの声を当てて下さい）。

1912年。幕末から維新にいたる諸改革を見守り続け、わずか四十年の内に西洋列強に肉薄する国力を見につけた大日本帝国の君主としてあり続けた明治大帝が、この年に崩御あそばされました。人々はこの明治大帝の崩御を特別な目で見ていたようです。乃木大将が妻と共に自殺するのも明治天皇の崩御を受けての事です。恐らく当時を生きた人からすればひとつの時代の終焉を思わされたので

しょう。

当然、明治大帝の葬儀（大喪の礼）は盛大に開かれました。日本初の立憲君主、そして大日本帝国の最高権力者の死です。国を挙げた大葬でした。そして、明治大帝の意向もあり、京都伏見に古墳に倣った陵に葬られました。

さて、そうやって明治大帝の崩御に伴う葬礼が全て終わった後に、日本の国内で「明治天皇の遺徳を偲ぶプロジェクトをやるうではないか」という機運が高まります。明治大帝は大日本帝国の生ける象徴でした。崩御あらせられても尚、大日本帝国の象徴たる御姿を期待されてしまったんですね。

そして、明治大帝の皇后（つまり大正の御代にあつては皇太后）の昭憲皇太后も1914年に崩御あそばされます。

昭憲皇太后の崩御もあり、明治大帝と昭憲皇太后の遺徳を偲ぶ何かを作ろう！ という動きが国民的な運動となりました。

そうして、代々木にお二人を祭る神社を作ることが決定し、そうして1920年に明治神宮が完成したのです。

こういう経緯で生まれた神社なので、当然その造営にあたっては国家的な威信がかかっていました。

明治大帝とその皇后を祭る神社が粗略なものであつてはなりません。そのため、建築から何から、すべて当時最新鋭の技術、最新理論が用いられました。

そして、明治神宮造営の際に一番注意を払われたのは「杜」でした。

古来より、神様は山や森におわすものとされました。神社などで本殿の後ろに山が控えていたり、あるいは森を背負っているのはまさにその意識の反映です。それも、人間の手が入ってしまったような林ではだめで、原生林的な森がよしとされています。ほら、映画「もののけ姫」で原生林的な森に森の神々がいて、人間が森を切り開いていくうちに神々が消失していく、というのは神道が持っている「原生林原理主義」が現れていると言えましょう。

話は翻って明治神宮です。

当時、明治神宮に定められた原宿あたりは井伊家の下屋敷があつた辺りで、当時は原っぱでした。そもそも原生林なんて期待できなかったんです。けれど、明治天皇を祭る神社においてそれ相応の杜がないということになれば、それこそ国家の威信にかかわりますし明治大帝に失礼です。

そんなわけで、明治神宮造営にあたり、日本の植物学者が集められました。そして、「原生林を作れ！」という無理難題を吹っ掛けられてしまったわけです。

もちろん、何もない原っぱにいきなり原生林を作ることは出来ません。なので、植物学者たちは原生林を作る過程を早回しにして杜を作ろうと計画しました。

実は、原生林の完成にはいくつかの段階を踏むことが分かっています。原っぱから日の光を浴びて育つ木々が根付き、やがてその木々が大きくなるに従い陰にあつても背を伸ばす木が増えてきて、最終的には陰の中で生きることのできる木々が最初の木々を駆逐していきます。そしてあとは陰の中で生きることのできる木々たちによって森の組成が定まり、最終的にはこれ以上植物組成が変化しないところに行き着きます。これを極相林というのですが、当時の学者たちは明治大帝の杜にふさわしい森の形として、極相林を考えたのです。

そうして明治神宮極相林化計画が始まりました。まず植えたのは日差しが存在しないと生きていけない木を植えました。そしてその木が大きくなつた頃を見計らい陰に強い木を植えて人工的に森の組成を変えて行き、出来るだけ速やかに極相林に近づくように手を入れ続けたのです。

そして、このプロジェクトXは未だに続いています。

実は、まだ明治神宮の杜は極相林ではないとされています。あと二十年ほどで極相化するだろうという見通しは立っています。裏を

返せば、未だ明治神宮は変わり続け、極相へと至る時空の旅を続けているのです。

もはや明治から百年が経ち、明治大帝がおわしました時代は随分と遠い時代になってしまいました。

けれど、自然の営みから鑑みれば百年などあつという間のことなのでしょう。先の戦争の敗北を以って、「大日本帝国の威信」などというものに意味はなくなってしまうました。しかしながら、人間の事情など知ったことではないかのように、明治神宮の杜は極相化に向けて少しずつ変わり続けています。

そして、その事業の裏には、当時の植物学者さんたちの苦心が隠れているのです。

永遠を手に入れようという人間の意志。

そして、技術者たちのあくなき努力。

是非とも原宿にお越しの際は、明治日本の夢を背負った杜に思いを致してみてください。

41、「博物館の実情」指定管理者制度に寄せて」

皆さん、歴史の研究って大学の学者さんがやっているものだと思いますませんか？

いえ、もちろん大学の先生も歴史を研究していますが、歴史研究というのは大学によつてのみなされるものではありません。大学の先生が一番目立った活動が出来るというだけのこと（予算的な関係で）、実は歴史の研究者という存在は沢山います。変な話、歴史小説家だつて研究者になりうる側面を持ち合わせています。歴史小説家の唱える説にはたいがい面白さを付加するために多少のフカシがあるのでそのまま定説となることは稀ですが、歴史小説家だつて歴史という学問を支えている人たちです。それに無視できないのはアマチュアの研究者。平日は普通に仕事をして、休日は研究者として過ごしている人なんて沢山います。

そして、何より歴史という学問を支えているのは博物館です。

博物館は、ただ遺物を保存するための倉庫ではありません。

市民に遺物を紹介する、扱っている遺物を研究する、その研究成果を特別展示として展示する等々。よく博物館の学芸員の間では「展示はその展示者の論文同然」と言われていまして、つまり博物館というところは常に新しい説を外に向かって発信している存在なんです。

そして、博物館はアマチュアとプロの研究者を結ぶ存在でもあります。

とまあ、歴史という学問において重要な役割を抱えている博物館ですが、ここ十年でだいぶ様変わりしてしまいました。今日はそのお話です。なお、今回のお話において、筆者はかなり憂国の士となつております（笑）。

1990年代初めのバブル崩壊によつて、日本は空前の不景気に

苛まりました。いわゆる“失われた十年”です。今にして思えば、日本はよくあの時代を乗り切ったものだとか妙な感慨にも襲われます。銀行はどこに対しても貸し渋りをするようになり、国内消費が冷え切り、バブル経済を支えていた土地・不動産の売買が停滞化しました（バブルの昔、十億円もの土地売買がFAX一つで済まされてしまったという逸話を聞いたことがあります。バブルが異常だったのかもなあ、と思うところではありますけど）。

あの時代に吹き荒れたリストラ。リストラとは本来は「組織の再構築」を意味する言葉でしたが、日本においては首切り程度の意味で安易に用いられ、実に多くの人がリストラの憂き目にあいました。そうやって会社から追い出された人々の中にはバブルの頃に組んだ住宅ローンの返済がままならず、家を手放したり、あるいは自殺して生命保険を得てまでローンの返済をしようとする人々まで出ました。

そうやって、失われた十年の間に日本企業は痛みを伴いながらも曲りなりに「組織の再構築」を完了させました。

さて、そうやって民業がとりあえず一息ついたところで、民業の皆さんに周りを見渡す余裕が出てきました。その中で目に留まったのは、公務員だったのです。

「あいつら、俺たちが苦労している時に、のうのうと楽そうに働ikyagatte!」

実は筆者の父が地方公務員だったので実情をよく知っているのですが、公務員って結構大変なんです。こう言ってはなんです、バブル景気に国中がウハウハだった時代、猛烈に貧乏くじを引いた人たちが公務員です。丸の内〇しがマハラジャで扇子を振っている同じ社会で、シケた給料を持って帰りつつましい生活を送っていたのが公務員なんです。公務員は安定していると言いますが、実はそれって“良くも悪くも”であり、景気がいい時には全然儲からない商売なんです。公務員で儲かっているのはごくごく一部です、断じて！ というのはさておきまして。

ともかく、官業に関してもスリム化を推し進めるべきなんではないか？ という風潮が世論を支配し始めます。それが従前から存在した官僚への不信感と結び付き、一つのムーブメントとなるわけです。

そうして、あの男が日本政界で頭角を現したのです。

平成のライオン宰相・小泉純一郎です。

アメリカの新自由主義（ブッシュ政権のように、経済活動を市場に任せて政治が介入しないことで経済を発展させようとする考え方）を日本人向けに「構造改革」と書き換えて改革を押し進めた宰相です。後の歴史が彼をどのように叙述するかは現代を生きる筆者には預かり知らぬところですが、いずれにせよ日本史上に名を残す「ユニーク」な宰相だったことは確かです。

そんな彼が押し進めた政策は、「出来るだけ民間に事業を移管する」というものでした。いわゆる「郵政改革」などはその流れです。採算がとれるのなら民間に移管してもいいじゃない！ という理屈がその根幹にはあります。

実はこの考え方こそが、博物館を危機に陥れています。

指定管理者制度という制度です。

簡単に言うと、自治体の行なっている事業について、企業が希望すれば自治体に代わり運営できるという制度です。たとえば、市営プールの運営について、ある民間企業が指定管理者になればその運営を行なうことができるんです。ただし、黒字運営であることが常に求められますが。

この制度は、公営の博物館にも適用されています。そして、公営の博物館についても黒字運営が求められるようになりました。

が、そもそも博物館事業というのは儲からないんです。

だって博物館の収入って寄付金や自治体からの予算を除けば博物館の入館料だけです。それに対して出費がバカになりません。博物館は資料を保護する観点から様々な対策が取られます。つまりお金がかかるんです。特に、収蔵している資料に重文・国宝なんてあつ

たら一大事。それこそ維持管理にお金がかかります。こう言っちゃなんですが、博物館事業は金食い虫なんです。

けれど、この博物館事業は金食い虫だからといって仕分けしてはならないところです。

歴史というのは、特定のグループによって共有される物語です。そして、そのグループがその物語を手放してしまった瞬間に、歴史という知の体系は消滅します。歴史というのは、我々のご先祖が残してくれた遺産なのです。そして、その遺産を次代に伝える事業は民業では完璧には果たすことは出来ません。官民一体、歴史バカたちが一丸となって、さらには皆さんに身銭を切って頂いてようやく果たせる大事業なのです。

最近とみに政治の世界では「行政のスリム化」や「ムダ排除」の声が聞こえますが、政治家の皆さんがやっている「スリム化」「ムダ排除」なるものは切りやすいところを切っているに過ぎません。2010年の仕分けでも話題になった宇宙開発事業などもそうです。官業でしか出来ないことなのに、身銭がないからという理由だけでそついった金食い虫な事業を切っていく日本という国の在り方に、筆者は疑問を感じているところです。

P・S・

もちろん、一有権者として現状の国家運営の乱脈ぶりに問題があり、スリム化していかなくてはならないと考えるひとりです。が、歴史バカとして、博物館事業をスリム化することに反対なんです。言説なんてものは、立ち位置によっても変わってしまうものなのです。

42、「戊辰戦争」という誤解させられた戦争―東北の新政権―

戊辰戦争。

我が国が経験した最後の内戦であり（筆者、西南戦争は一種の一揆と見なしています）、恐らくは日本史上最大の内戦でした。約二年にわたり繰り広げられた、旧徳川幕府勢力と薩長土肥を始めとする新政府軍との戦争です。現代日本の政治権力を形作った、けっして自分たちに関係がないわけではない重要なものです。

でもですね、この戦争ほど色々と誤解されて理解されている戦争はありません。誤解というよりは、政治的な意図によって戊辰戦争の歴史的意義が歪曲されている、と換言してもいいと思います。どういうことか。ご説明したいと思います。

そもそも、戊辰戦争とはどういう戦争かというところから始めましょう。

当初、戊辰戦争は薩摩藩と旧徳川幕府との小競り合いでした。京都で行なわれた鳥羽伏見の戦い、これは当初薩摩にさんざん嫌がらせをかまされて暴発した旧幕府軍と、何の後ろ盾もない薩摩との私的な戦争だったんです。が、明治天皇を始めとする禁裏が薩摩を支持したことにより、私的なはずの戦争だった鳥羽伏見の戦いは、遂に官軍対賊軍の様相を呈し始めました。賊軍の将となるのを嫌った旧幕府の徳川慶喜は政治的敗北を悟り、側近を連れてさつさと謹慎してしまいます。

その後、薩摩に加勢する形で他の雄藩が参加を始め、旧徳川幕府の勢力を無効化しようと江戸まで進軍し始めます。最初新政府軍は江戸を総攻撃する頭だったようですが、当時新政府を支援していたイギリスの反対があったこと、高橋泥舟・山岡鉄舟・勝海舟のいわゆる「幕末の三舟」による交渉、そしてその交渉に西郷隆盛が迂闊にも乗ってしまったこと（筆者、実務者としての西郷さんをあんま

り買っていない。参考までに）など様々な原因により結局江戸城は無血開城となり、旧幕府本体は維新政府によって武装解除されました。

と、ここまでは皆さんのイメージ通りの戊辰戦争なのではないかと思います。

が、実はここから、歴史の教科書の語る戊辰戦争は歪曲されているのです。

歴史の教科書は、このような叙述をしているはずで。

“ 徳川恩顧の東北諸藩が奥羽越列藩同盟を成し、新政府に対決姿勢を明らかにした。それに対し新政府は軍を向け、奥羽越列藩同盟を解体していった”

歴史に詳しくない方にはキツイかもしれませんが、丁度江戸城にて無血開城に向けた話し合いがもたれていた頃、東北にも動きがありました。簡単に言うと、江戸を迂回した新政府軍の先触れが仙台に入り、仙台藩に対して「会津を攻撃しろ」と迫っていたのです。ところが、その先触れたちの不手際によって仙台藩は新政府に対し疑念を抱くこととなり、結果として仙台が反旗を翻すこととなったのです。

大体歴史の教科書において、この時期の東北の動きを“ 旧幕府勢力の残滓” 程度に捉えています。実は、この視点は必ずしも間違いではありません。事実、東北諸藩が奥羽越列藩同盟を成したのは、新政府が幕府恩顧であった会津藩や庄内藩の扱いに対し強硬な姿勢を示したことに端を発しています。そして、東北諸藩が会津庄内を救済しようと成立したのが奥羽越列藩同盟です。

ただ、それだけで説明できないことがあります。

そもそも、奥羽越列藩同盟の首班である仙台藩、幕府恩顧ではありません。仙台藩は伊達政宗さんの子孫が代々領主を務めている、いわゆる外様藩でした。一般に外様藩というと譜代や御一門と比べて冷遇されているというのが歴史教科書的な理解です。と、実は奥

羽越列藩同盟に参加している藩の中には徳川恩顧でも何でもない藩が多く含まれています。

そしてもう一つ見逃せないのが、奥羽越列藩同盟による皇族の推戴です。

北白川宮能久親王というお方があらせられました。元は江戸寛永寺の住職、明治に入りドイツに留学中に勝手に婚約をご発表なさりやんちゃなお姿を国民にお示しあそばされ、岩倉具視に叱られた挙句に謹慎あそばされたのち、陸軍畑をお進みになられます。そして軍人として台湾に滞在中、そのまま薨去あそばされたというドラマティックなご経歴をお持ちの皇族であらせられます。

で、この北白川宮様、戊辰戦争時にも数奇な運命をたどっています。もとは江戸寛永寺の住職だと書きました。寛永寺は徳川氏の菩提寺なので徳川氏の帰依厚く、元々幕府寄りです。そういった立場のゆえに、北白川宮は戊辰戦争の早い時期から朝廷とのパイプ役を期待され、事実朝廷に対し旧幕府への寛典を要請しています。が、それはなりませんでした。しかも、住職を務めていた寛永寺が上野戦争の戦火にさらされることとなってしまい、焼け出される格好となった宮は仙台に身を寄せました。そして、仙台によって、奥羽越列藩同盟の盟主へと祭り上げられてしまったのです（なお、宮はこの責任を追及され、戦争終結後に蟄居の憂き目に遭いましたが明治三年に許され復帰しています）。

筆者がなにを言いたいのかというと、この東北での戊辰戦争は、東北から北海道にかけての諸藩による独立戦争という性格があったのではないかということです。事実、奥羽越列藩同盟の結成の際、仙台の家老が「この戦いはアメリカの南北戦争である」と演説を打ちました。南北戦争といえば、アメリカ北部のアメリカ合衆国と、合衆国から離脱したアメリカ南部のアメリカ連合国との戦争でした。この演説からは、奥羽越列藩同盟が志向しているものは朝廷への異議申し立てではなく、むしろ朝廷からの自立という目標が見えてきます。

で、なんです。

現在、歴史の教科書ではあまりこの辺りの動きを説明していません。筆者は政府の人間では断じてないのでどういう意図で歴史教育をしているのかはさっぱり分からないわけですが、野次馬根性をもつて眺めてみると、なんとなく政府の意図が見えてくるような気がします。

政府っていうのは、今も昔も多元的な権力を認めないものです。仮に混乱期であれ、一時的に自国内に自分とは異なる権力構造が存在したという事実は承服しがたいものがあるでしょう。事実、アメリカの南北戦争は現代的には「civil war」、つまりは内戦扱いです。アメリカ合衆国は、アメリカ連合国という国家の存在を出来るだけ矮小化して叙述しているんです。

明治政府の権力構造をそのまま受け継いでいる現行の政府としても、東北の独立運動を認めたくないのではないかなあとも考えられるんです。

実はこのお話、「権力がどう歴史を叙述するか」という歴史学において非常にデリケートでかつ、永遠のテーマの片鱗を明らかにしてくれる事例なんです。

43、「日本を作った天才・藤原定家」

このエッセイにおいて、実はあんまり人物伝を書いていません。何でかというとなんな理由があるんですが、人物伝を書いてしまふと歴史のダイナミズムがあんまり出てこないのがその最大の理由です。いや、もちろんダイナミックに生きてきた偉人たちを語るのも面白いんですが、そのダイナミックさは所詮ひとりの人間の枠に収まってしまいます。例えば坂本竜馬は明治日本を切り開いた偉人の一人ですが、彼の人生を俯瞰しただけでは明治維新という時代のダイナミズムは見えてきません。彼もまた、明治維新という舞台の上でくると舞ったアクターの一人です。他にも様々な偉人や変人、はたまた凡人や悪人たちが折り重なって歴史という舞台は作られるのです。

が、時折、「この人の存在を抜きにして歴史を語れない」という人物が現れることがあります。

ある意味独力で歴史を作り、後々までの影響を残している人物が。

今回筆者が紹介するのは、藤原定家（1162〜1241）です。平安末期の院政期から平家の台頭、日本初の本格的武家政権である鎌倉幕府の成立、さらには承久の乱までも目の当たりにしています。武家政権側から見れば栄華の時代でしょうが、貴族の側から見れば落日の時代だったとも言えます。次第に新興勢力である武士に政治的な力を奪われていっていたのが当時の貴族でした。

その時代に生きた定家は、政治的野心を持った貴族でした。家格や彼の家庭の事情により、あまり出世が見込めない状況ではありましたが、彼の著作には彼の栄達への憧れが見て取れます。が、何の皮肉か、彼は「京極中納言」と渾名されますが、決して貴族として栄達はしませんでした。随分歳を取ってから権中納言（中納言よりちょっと下の官職）に就いたのが最高位で、これ以降の出世は叶い

ませんでした（上司との軋轢があつたといわれています。どうも定家さんは気性の荒いところがある人だったようです）。

政治家としては凡庸の内に終わってしまった定家ですが、彼には才がありました。その才ゆえに、彼は日本史の中で目立つ存在となってしまうのです。

定家に備わっていた才、それは「美意識」でした。

当時は政治的激動期でした。

その時代の故でしょうか、当時の貴族文化は繚乱期です。政治的に弱体化したがゆえに、むしろ文化の側にエネルギーが向いたのかなとも解釈できるのではないかと思います。それまでの和歌とは少々肌合いの違う歌風が誕生し始めます。

そして、定家はその歌風をリードすることによって、結果的に日本文化にその歌風を定着させることに成功したのです。

彼の持っていた美意識、俗に「幽玄」「有心」といいます。

「幽玄」というのは定家の父である藤原俊成によって主唱された概念ですが、定家もその美意識を引き継ぎます。どういうものかという、和歌の中において明確に感情を語らずに、和歌を見渡した後に仄かに立ち上ってくるものを提示しようという美意識です。これ、和歌に大きな影響を与えています。たとえば、「なりけり」を極力使わない、という姿勢です。皆様、是非とも高校時代の古典の授業を思いだして頂きたいんですが、「なりけり」という言葉は「
　　」なのだなあ」という、語り手の感慨や感動を端的に示す言葉です。ところが「幽玄」論が膾炙するに従い、「なりけり」を使うのは野暮だ、ということになり、使用が控えられるようになります。実はこれにも弊害があつたようで、「なりけり」を使った和歌は駄目な歌、とレッテル張りされるようなこともあつたようです。古典には、「なりけり」を使う和歌には秀作がない！」と賢しらに述べる上司に対して、「秀作とされているあの歌もなりけりが入ってますけど」とやり返す部下の話があつたりします。

そんな弊害があつたからでしょうか。定家は父親の幽玄論を引き継ぎつつも、新たな歌論を導き出しました。それが「有心」です。

これ、かなり難しい概念なので説明しにくいですし、その道の人からするとどんな説明をしても的外れとされてしまうのでアレなんです。その核心的なところは「和歌の核になるのはその歌の持つ、仄かな艶でしょう」という考え方です。当時の和歌は割と技巧に寄り過ぎてしまい、それに対する批判があつたんです。それへの答えとして定家は「歌の中心にあるのはハートだ！」と言い放つたわけですね。

とはいいまでも、彼は彼で技巧的な歌を多く残しています。けれど、彼が技巧をこらしたのは常に、僅かな言の葉で情景を切り取る和歌において、「ハート」を示すための方便だったのではないかとも思えます。

そして、定家はさらにその美意識を広げる大事業に参画することになります。

勅撰和歌集である「新古今和歌集」の編者参加、そして「小倉百人一首」の選出です。後に新古今和歌集の選考基準は「新古今調」と称賛され、後の歌道に深い影響を残します。そして「小倉百人一首」の選出は、後に他の選者による「百人一首」選出ブームにもつながります。しかしながら、やはり定家の百人一首は別格とされ、最終的には小倉百人一首が後世名高い百人一首となっています。

で、この定家の美意識は、歌道のみに影響を与えたわけではありません。

後に発生する能。これの中心的な美意識は「幽玄」「有心」でした。歴史の教科書だと能は室町時代の文化であり後まで続かないような印象がありますが、そんなことはありません。歌舞伎が盛んになっても尚、武家では能が演劇文化の中心でした。徳川家光の能好きは有名で、時折能を演じることさえあつたと言います。何が言いたいのかというと、武家文化のなかにさえ「幽玄」「有心」が浸透

するんです。さらに江戸時代は町人たちにより文化がけん引される時代となりまして、長屋に住みながら和歌の研究をしたり古典の勉強をする人たちが現れました。元は特権階級である貴族の美意識「幽玄」「有心」が、いつしかひたひたとさまざまな階級の方々に浸透していくんです。さらには本居宣長さんにより、そういう「幽玄」「有心」に対し、「中国文化の影響を受けたもので、本来の日本人が持っていた文化ではない！」と批判されたことにより（正確には本居さんが批判したのは漢学的な心の在り方なんですが、どうも本居さんは「幽玄」「有心」まで漢学的な心の在り方だと見なしていた節があります）、逆に「幽玄」「有心」が日本文化の核であるという意識が誕生しました。

そして、現代人の間にもその「幽玄」「有心」は息づいています。例えば小説を読んで、「うわあ、この小説、キャラクターの心情を語り過ぎだよ」とか、「どうもこの小説には艶がない」と思うことってありますよね。これって「語らぬが花」という「幽玄」、テクストから自然と湧き上がる艶を感知する「有心」の在り方そのものです。

実は現代人、定家さんの考え方をそのまま引き継いでいるんです。

44、「一歴史バカが戦争反対を口にする理由」

筆者は戦争反対論者です。

いつか誰だかが「戦争とは政治家が取りうる最悪の外交手段である」と口にしましたが、実にその通りだと思っています。無論、それは政府による国民への暴力である白色テロや、何の罪のない人々を巻き込んで行われるテロも同様に、筆者は反対の立場を取っています。

なんといいますが、あまりに筆者、「和をもって貴し」という聖徳太子の教えが染みついているせいで、そもそも争い事が嫌いだという側面もあるんですが。

けどですね、筆者、一歴史バカとして戦争に反対する理由があるのです。

今日は、戦争が歴史にもたらす影響というお話です。

さて突然ですが、「古風土記」というものをご存知でしょうか。

奈良時代、律令制下の日本において、朝廷が各国の様子を知るために、当時国ごとにおかれていた国衙に「自分の国の様子を報告してまとめて来い！」と命令を下しました。そして、その命令のもとに、各国の国司たちがその国の歴史や地理、特産物などをまとめた報告書を上げました。これが古風土記と呼ばれるものです（正確には、“風土記”と呼ばれています。が、江戸時代にも同名の地理書が編まれた関係もあり、奈良時代のそれを“古風土記”、江戸時代のを“新編風土記”と歴史学上区別しています）。なお、現在では出雲国、播磨国、肥前国。常陸国、豊後国の風土記しか残っていません。しかも、ほぼ完本であるとされている出雲国風土記を除いては、残っている風土記でさえも断片的だったりします。

さて、この古風土記、なぜこんなにも残りが悪いのでしょうか。

古いから？ いえいえ、そうではありません。

実は、これに戦争が絡んでいるんです。

室町時代、京都にて、将軍の後継問題や守護の対立による大きな戦が起こりました。応仁の乱です。京都を主戦場にしたこの戦により京都に残っていた公家勢力がおおいにその力を弱め、後の本格的武家政権である織豊政権、徳川幕府にまで繋がるのは歴史的な皮肉ですね。

しかし、この乱によって失われたのは、公家の勢力だけではありませんでした。

当時、朝廷には長らく様々な報告書が残っていました。日本の朝廷は（表向き）一度も血統が絶えていないので、自らの正統性を主張するためにも、古くから色々な報告書が残されていたんです。もちろん、その中には古風土記も多数あったものと思われています。

が、京都を主戦場にした応仁の乱により、それらの報告書は戦火に晒される羽目になりました。そうして古風土記は戦火の中に消え、今では殆ど残っていないという次第なのです。

恐らく、戦火の中に消えたのは古風土記だけではありません。現代の我々が感知していないだけで、もしかしたら日本古代のイメージを根底から覆すような史料が存在した可能性もあります。しかし、それらが戦火に消えて幾星霜。もはや現代人の我々に、消えてしまった史料を復元することは出来ません。そして、史料が語り出すはずだった「歴史」もまた、我々の前から永遠に姿を消してしまったのです。

実は、現代において日本古代史の研究が進まないのは、応仁の乱による史料の散逸によるものとされています。

戦争により消えてしまった「歴史」は他にもたくさんあります。

例えば安土城。天下布武を旗頭に戦国時代を駆けた織田信長の居城です。史料を見ると、当時第一級の絵師に依頼し襖絵を描かせたり、金装飾やきらびやかな調度など、実に贅を尽くした建物だったと伝わっています。もしも現代に残っていれば、恐らく城自体が美

術館扱いだったのではと思えるほどです。が、この城も信長が討たれた後、明智光秀により焼き討ちに遭い、灰燼に帰しています。

そういえば、この前お話ししました天下三名槍・「御手杵」も、戦火に消えたものです。

現代でもこのようなことは起こっています。

2001年の同時多発テロにより発生したアフガニスタン戦争、そしてその余波として発生したイラク戦争。この際、イラクでは大規模な歴史の消失が起きました。

イラクはメソポタミア文明の地です。なので、当然のイラクの政権であったフセイン政権はメソポタミア文明関係の遺物を沢山所持していました。博物館に収めるという形で。

しかし、あの戦争によって略奪が横行し、遂にはメソポタミア文明関係の遺物まで略奪の憂き目に遭いました。これ、実は途轍もないことです。普通の遺物と違って、考古遺物というもののほど来歴を重要視されるものはありません。要は、どこで・どの地層で発掘されたものがわからない考古遺物に、歴史的な価値は半減してしまします。そう、メソポタミア文明史という物語が、あの戦争によって破壊されてしまったのです。

そしてこの歴史の破壊は、今このエッセイを書いている現在でも起こっています。

これを書いているのは2011年の2月なんですが、この頃、エジプトで革命が起きました。当然このチャプターを書いている筆者は2011年2月の時を生きる人間であり、この革命がいかな結末を迎えようとしているのか、未だに分かりません。が、この現在の地点で、エジプト文明の考古遺物（ツタンカーメン絡みの遺物）が盗まれた、というニュースが入っています。どうやらその遺物は戻ってきたようで何よりなんですが、エジプトの政局が不安定な現在、また同じようなことが起こらないとも限りません。そうやって、戦火の混乱によって、歴史はいともたやすく失われてしまします。

歴史を眺めていると、「なぜ歴史家は歴史を紡ぐのだろう」と考え込んでしまうときがあります。

人間の行なってきたことを残す学問、それが歴史です。なのに、なぜ歴史はかくも儚い存在なのだろう、と。戦争の劫火の中にあつては、紙の上には残らないものなど無価値なはずなのに、と。

だからこそ、筆者は戦争に反対しています。

戦争はかくも容易く歴史という物語を破壊してしまいます。後世に残さねばならなかったものが、こうも容易く消えてしまいます。歴史はただ我々現代人のものではありません。未来永劫すべての人類の財産です。現代人の我々は、後世に歴史を残し手渡す義務があるのです。

イラク戦争やエジプトでの革命を見るにつけ、歴史を後世に手渡すことのむずかしさを痛感しています。

だから、筆者は戦争に反対なのです。

45、「時代区分の弊害」

歴史という学問は、人が何世代、何十世代にわたって積み重ねてきた営みの縮図です。本来、一人一人の行動には確たるベクトルは存在しません。まるでブラウン運動をする微粒子のように、右にフラフラ左にフラフラしているに過ぎません。が、それら人々の行動を離れた目で見てみるとなんとなく流れが存在するんじゃないか？というのが、歴史という学問が我々に示してくれる世界観だったりします。

言うなれば、深く淀んだ沼の中になんともない流れを見つけ出してなぜそつちに水が流れていったのかを考えるのが、歴史という学問なのです。

そのため、歴史を勉強するとよく「時代区分」を見かけます。歴史家たちが、前時代とその性格が変わってしまつたと判断し別の時代として扱いましよう、という意図を以って歴史年表上に示すマイルストーンの役割を持っています。が、この時代区分という枠組みが、歴史を分かりづらいものになっている場合があります。今日はそのお話です。

さて皆さま、突然ですが、日本において「古代」っていつのことまでかご存知ですか？

「古代」なんて言葉を聞くと、結構古そうな印象ですよ。イメージ的には飛鳥時代くらいまでを指しそうですね？ が、違んです。実は、日本の古代の終焉は、1192年、源頼朝が征夷大將軍に任命され、武家勢力が幕府という権力構造を構築した時を指しています（なお、最近の学説では頼朝の將軍宣下より前、守護・地頭を全国に置くことを許された段階で鎌倉幕府が実質成立したとみなし、そこから中世と数える人もいます）。凄く長いですよ。古代という時代区分は大体「文献資料の誕生から封建制度の誕生まで」

を指し示す区分なので、日本では12世紀にまで至ってしまいます。日本史においては、あまりに「古代」が長いので、上古（上代）・中古・近古と古代をわざわざ三つに分類して理解しているほどです。これ、「古代―中世―近世―近代」という歴史観が、ヨーロッパ史を語る際に使われる用語だったモノだったことに由来している弊害です。

ヨーロッパにおける古代から中世への移行って分かりやすいんですよ。具体的には、ヨーロッパの西半分を占めていた大帝帝国である西ローマ帝国の皇帝が、ゲルマン人傭兵であるオドアケルによって廃帝された476年を指しています。まあ向こうの歴史学者から言わせると、このことを以って西ローマ帝国の滅亡と見なすのは早計らしいのですが、一般にはこれを以って西ローマ帝国は滅亡したものとされています。

その後、西ローマ帝国の版図の中にあつた領地は群雄割拠の様相を呈し始めます。そして、群雄割拠の中で、王様たちが部下と結んだのがいわゆる封建制度なのです。

ヨーロッパ史において、ここで時代区分をすることには意味があります。共和政ローマから続いていたローマ的な政治機構がここに終わり、次なる政治機構に移行したのです。実はその次なる政治機構もローマを参考にして国造りをしていくので、実はローマ的なものを受け継いでいくのですが、それでも基礎にあるものは別だともなされているんです。

確かに、日本の「古代―中世」への移行は政治機構の変化を思わせます。が、実際には少々事情が異なります。日本の場合、朝廷という権力構造と、幕府という権力構造が並び立って存在しているだけです。「古代―中世」というヨーロッパ史の時代区分を無理矢理日本史に導入してしまったがために、逆に事実関係が分かりづらくなっているんですよ。

また、時代区分が歴史を分かりづらくしている例に、奈良時代が

ら平安時代への移行があります。

一般に奈良時代から平安時代との移行というと、桓武天皇が平安京に遷都した794年を指します。

が、この時代区分は歴史的にみると大事な事実を見逃しているようにも見える時代区分です。

これを説明するためには、当時の皇統について説明しなくてはなりません。

飛鳥時代、壬申の乱が起きました。天智天皇の子である大友皇子と、天智天皇の弟である大海人皇子との戦いでしたがこの戦いに大海人皇子が勝ち、天武天皇として即位します。そして、それからしばらくは天武天皇の血を引いた皇統によって天皇位が占められました。

が、その傾向は奈良時代末期に終わりがやってきます。天武天皇の皇統が絶えてしまったのです。井上内親王という皇女はいましたが、基本的に男子はいませんでした。これは今でもそうですが、父方が皇統でない限りにおいて、皇女から生まれた子供は皇統を有しません。つまりですね、これを以って天武天皇を父祖とする、天武天皇系の皇統が絶えてしまったんです。

とはいってもなんとか天皇家は存続させなければいけなかったもので、擁立されたのが井上内親王の夫であつた光仁天皇です。彼自身は天智天皇を父祖とする系だったので本来は立太子されることなどまるで想定されていませんでしたが、天皇家の継承権は有していました。確かに天武天皇系の皇統は絶えてしまいますが、井上内親王との間に子供が出来てその皇子が天皇となれば、母方ではいえ天武天皇系の血も入ります。そういった意図を以って光仁天皇が即位します。

実を言うと、ここで以って皇統は天武系から天智系に移っているんです。王朝において血統に変化が生じた場合重大な変化と見なされて、場合によってはそれを時代区分の境目にしてしまうことさえあります。が、日本史学者さんたちはむしろ、光仁天皇の子による

桓武天皇が実施した奈良の貴族・寺社勢力との決別を大きな歴史的变化と捉え、平安京遷都を時代区分の境目にしています。

そのせいで、皇統の変化という重大な事実が少し分かりづらくなっています。

時代区分というのはあくまで後世の学者が作るものです。

そして、歴史というのはある境目によってぱっと変わってしまうことはありません。奈良時代から平安時代への変化というのは平安京遷都によってなされたものではなく、実はさまざまな要素が少しずつ変わっていくことによってなされた変化なのです。

時代を区分してしまうこと。これはやらねばならないことです。でなければ、歴史バカたちは歴史を語ることができなくなってしまう。けれど、時代区分というのはあくまで参考程度のもものと心得て、時代は少しずつ変化していくものだということも意識しなくてはなりません。

そして、時代は急には変化しない、という事実気付いた瞬間に、やっぱり歴史というのは人一人一人が作り上げていくものなんだなあ、という当たり前の結論に気付かされ、やっぱりほっこりとしてしまう今日この頃なのです。

46、「徳川幕府旗本という不思議な武士集団」

お旗本。江戸時代における徳川家の武士の区分です。

元は將軍の（というより大将の）近辺を警護する役割を持った武士のことを「旗本」と称しました。戦国時代の兵制を考えた時、大抵は一つの軍の中に特定の人数で揃えられた隊があり、その隊ごとに有機的に兵を動かしていました。当然大将にもその直属の部下を揃えて一隊となしていたんですね。戦国時代において旗本は勝ち戦の時にはあまり華々しい武功に恵まれません（大将の警護が主任務なので、基本的に前線では戦わないのです）、負け戦の時には命を賭して大将の命を守りました。よくドラマなんかで敗残の将が「ここでよい」と供の者に介錯を頼むシーンがありますが、あの供の者が旗本に当たる人たちです。

戦のなくなつた江戸時代、徳川家は色々な武士と主従関係を結ぶことによつて幕藩体制を完成させました。例えば薩摩の島津、長州の毛利、仙台の伊達などの外様雄藩とて、形の上では徳川幕府に臣従した上で領知を安堵されました。つまり、將軍と諸大名たちは直接の主従関係にあるとみなされています。

そういう意味では、將軍家と大名の関係と、將軍家と旗本家の関係はよく似ています。將軍に直接臣従する形で従い、徳川幕府によつて領知を安堵されています。大名と異なるのは、与えられている領知の広さの違いくらいです。これはあくまで一般論であり例外もあります。徳川將軍と直接の主従にある者のうち、石高が一万石未満の者を指す」というのが歴史学における旗本の定義です。で、なんです。

実は、江戸時代の旗本って、仔細に見ていくと実に面白いんです。もちろん、戦国の昔に神君家康公の警護にあたつた者たちの子孫も多いのですが、そういった旗本とは少々毛色の違つた旗本も結構存在します。

まず、今川氏。

今川というと、あの今川義元。そう、家康公を人質にとり不遇の少年時代を送らせた、あの今川義元の子孫たちです。徳川氏からすれば不倶戴天の敵のはず。なのに、江戸時代には旗本家として存続しています。これいかに？

実はこれ、ある歴史的事実があります。

今川義元には息子がいました。今川氏真という人です。この人、蹴鞠が大好きだの和歌が得意だの当時流行していたダンスに夢中になっていたのと、現代的感覚で言えばまさにリア充を地で行く人だったのですが、父親の義元が横死したことによってやがて大名として没落の一途をたどることになります。ところが人生不思議なもので、彼の風流好みが後の彼の人生を大きく左右します。風流人として卓越した彼は、父の敵である信長に対面した際に得意であった蹴鞠を披露したという逸話を持っています。そしてそれから、風流を武器にして京都を中心に文化人として人脈を構成していきます。やがて、その人脈に徳川家康が目をつけます。文化人として名を成すうちに朝廷とのパイプが出来上がりつつあった氏真は、徳川氏と朝廷とのパイプ役を期待されたのです。そのおかげもあって徳川家康によって領知を安堵され、また朝廷との交渉に功がありさらに加増。典儀典礼を司る高家旗本として明治維新まで家名を繋ぎます。芸は身を助けるを地で行く人だったんですね。

実はこういう形で徳川氏に臣従している旗本は多くありました。具体的には鎌倉時代から続くような旧家や室町時代の足利將軍家に連なるような名家や守護大名家、戦国時代に台頭した戦国大名の血筋を伝える家。そういった家々の内、大名としては没落してしまつた家を囲つておくという意味合いで領地を与えられた旗本が実に多くいたのです。ちなみにこの中には、吉良上野介を輩出した吉良家（高家旗本）も含まれています。

ちなみに、こういった旧家であつたゆえに旗本に編入された家に、

福島氏があります。福島というと賊ヶ岳の七本槍の筆頭に数えられる福島正則さんの子孫です。正則さんといえば豊臣滅亡後も有力な外様大名家として広島を安堵されていましたが、広島城の無断修理のかどにより改易されたという経歴の持ち主です。けど、実はその子孫はしっかり旗本家として存続しています。つまりどういうことかというと、正則さんの領知をすべて取り上げたのではなくて、その大半を取り上げた、ってことなんですね。もちろんそれによって家格も随分落ちますが、素浪人にして足蹴にするようなことはしなかったんです。そんなわけで、福島正則さんの系である福島氏もまた、旗本家として明治維新を迎えています。

（余談ですが、もし島津氏が関ヶ原の戦いの際に西軍に与していたことが問題視され改易の憂き目に遭っていたら、恐らくは今川氏と同じように旗本家として存続したことでしょう。島津氏は鎌倉時代から御家人として存在し続けたものすごい旧家です。）

あと面白いのが、徳川家の本家筋にあたる松平郷松平氏です。

徳川氏はもともと三河の土豪・安祥松平氏だったんですが、その安祥松平氏というのが元々は松平郷松平氏の分家でした。正確には、三河に数多くある松平氏はすべて松平郷松平氏からの分家筋です。つまり、本来ならば松平郷松平氏が松平氏のトップなのです。が、戦国時代に至り、安祥松平氏（徳川氏）が力をつけていくのに対し、松平郷松平氏は特に野心を持ち合わせず最後まで一地主として戦国時代を乗り切ってしまいます。まあ、こういったことは戦国時代を見渡せばよくあることです。むしろ、こういった下剋上が出来た時代こそが戦国時代だったんですね。

どうやら分家筋の徳川家もこの本家の扱いに難渋したようで、形の上では五百石あまりを安堵された旗本家という扱いを取りましたが、扱いを大名並にしてやることによって（交代寄合といい、旗本なのに参勤交代を行なうことが出来たり、老中に差配を受けるなど、大名として扱われるという特別待遇を与えて）バランスを取ってい

ました。

実は、旗本家の中には徳川氏と血統を有した家がいくつもありま
す。幕末に活躍した小栗上野介という官僚がいますが、彼の家であ
る小栗氏も元々は松平氏であったものが分家して家臣化し小栗を名
乗るようになったことに端を発しており、徳川氏から見れば遠い縁
戚です。

結局、旗本という制度は、戦国と江戸時代で随分様相が変わって
しまったんです。

大将の警護役であり大将の直属の部下であった旗本は、平和な時
代となると高貴な血統を伝えるための制度と化していたり、あるい
はどう遇したらいいのか分からないような家柄を便宜的に抑え込ん
でおくといった、非常にフレキシブルな使われ方をし出すのです。

そして、この旗本制度こそ、ある意味で幕藩体制を裏から支えて
いるものでした。

こう言うてはなんですが、高貴な家柄というのはそれだけで為政
者からすれば脅威です。覇者によっていともたやすく担がれてしま
うんです。そういったことを避ける目的でも、徳川氏内部に高貴な
家柄を囲っておくことに意味があったんですね。

47、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その1」

日本で起こった考古学史上類を見ない大汚点、「旧石器捏造問題」。

ただ一名のアマチュア考古学者によって引き起こされた（とされる）この大事件は、日本考古学のみではなく、世界の考古学を騒がせました。この「旧石器捏造問題」により、一時は六十万年前にまで遡るとされた日本の旧石器時代が十万年を遡らないのではないかと言われるほどにまで後退しています。

でも、皆様、こんな疑問が湧きませんか？

「つてか、どうして学者さんたちは捏造を見抜くことが出来なかったんだよ？」と。

実を申しますと、かつては筆者もそんな疑問を持っていました。けれど調べるうちに、この問題は当時の日本考古学に根差す非常に根深い問題だったということが分かったんですね。

一歴史バカとして、ご説明させて頂きましょう。「旧石器捏造問題」を。

なお、このエッセイにおいて、アマチュア学者さんに関しては名前を伏せさせて頂きます。ということは、この捏造を行なったとされるアマチュア学者についても名前を伏せるといことです。ただし、既に鬼籍に入られた方、プロの学者さんに関しては名前を明記するという方針を取ります。この問題を語るには、少々時期尚早な面があるのです。

さて、そもそも旧石器って何か、というところから説明させて頂きます。

「旧」があるということは、「新」もあります。新石器です。では、旧石器と新石器ってどう違うの？ という話になります。

けど実は、これ、皆さん歴史の授業で教わっているはずなんです

よ。まあ大抵歴史の授業ってつまらないので、覚えていらつしやらない方が多いだけのことです。なんで、教科書に書かれているそのままを書きます。

一般に旧石器というと、打製石器。新石器というと磨製石器のことを指します。

ハイ出ました、打製石器と磨製石器。その違いについて簡単に説明します。

打製石器というのは、自然石を他の石に打ち付けてその表面を大まかに剥離させていき、大まかな刃を作った石器の事です。

そして磨製石器というのは、打ち欠いて作るだけの打製石器からまたもうひと手間をかけます。鹿の角なんかでこまかく表面を剥離させたり、あるいは他の石にこすりつけたりして表面の凹凸を消し、より道具として使いやすく寿命の長いモノを作り出しました。つまり、打製石器より手のかかった石器なんです。

なので、その登場も同時ではありません。基本的には、打製石器（旧石器）から磨製石器（新石器）へと変遷していくのが世界史的なタイムテーブルとなっています。

日本の考古学史は、明治時代より前には遡りません。

もちろん歴史という学問は存在しましたが、「遺物を元に歴史を構成する」という自然科学的アプローチを取る考古学はあまり一般化しませんでした（念のため書いておくと、例外もあります。例えば徳川光圀などは部下の佐々宗淳（さっさむねあつ）助さんこと佐々木助三郎のモデルです）に命じて古墳の発掘をさせています。また、石製の矢じりや青銅製の剣が出土することがあるというのは江戸時代を通じて知られていました。しかしながら、それらの活動は散発的であり、その姿勢を学問にまで昇華しようという動きは誕生しませんでした。

なので、日本の考古学は西洋からの輸入によって誕生しました。

その頃には西洋の考古学はかなり進展しています。当時西洋列強の考古学者は自国史のみならず、エジプトなどの外国にも足を伸ば

して研究をしているほどです。なお、日本考古学に深い影響を与えた学者さんにフリンダース・ピートリさんという学者さんがいますが、この人、エジプト研究において高名な学者さんです。なお、このピードリさんの弟子に、あのツタンカーメン王墓を発見した学者・ハワード・カーターさんがいます。

つまり、日本が考古学を導入した頃には、考古学という学問自体がかなり完成していたんです。

日本考古学は、西洋考古学の培ってきた方法論を利用することによって誕生したのです。

その中で、日本考古学史上でずっと論争になっていたのが、「日本に打製石器しか使わなかった時代はあったのか？」という疑問でした。

明治の中ごろになると、日本においてわりと考古学の研究が進みます。そうして調べていくと、どうもかつて日本列島には、土器を使い磨製石器を主に使った人々がいたことが分かってきました。しかしながら、打製石器のみを使い生活していた人々については未発見でした。

考古学的な言葉を使えば、「明治時代当時、日本の新石器時代は承認されていたが、旧石器時代については未確認」となっていたんですね。

で、そのうち地層などの研究が進むうちに、「きっと日本には旧石器時代なんてなかったんだろっ」という意見が主流になります。旧石器時代の地層は火山灰の堆積によって出来たものとされており、非常に酸性値の高い土壌でした。「こんな環境では、木々が育つはずもなく、そうなれば狩猟採集を行っていただろう旧石器時代人が暮らせるわけがない」と考えられるようになったのです。

そんなわけで、日本最古の人類は縄文人たちだとされていたのです。

この傾向は、太平洋戦争（大東亜戦争）が終わり、学者さんたち

が世代交代しても尚根強い意見として日本考古学会にありました。言葉は悪いですが、この時期の考古学会は日本の旧石器時代に対し、「あるわけがない」という頭ごなしな態度を取っていた節があります。

まあ確かに外国から考古学が輸入されて五十年。それまで本格的な旧石器時代の遺跡報告が存在しなかったのですから、「ない」と考えるのは必ずしも突飛なことはありません。ただ、ここで言わせて頂きましょう。日本の考古学者の多くが旧石器時代は「絶対に存在しない」と杓子定規な態度を取り続けてしまったことが、後の旧石器捏造問題に深く根をおろしています。

が、事実として日本には旧石器時代が存在しました。それが判明するのが1949年のこと。戦後間もなくの事です。

この発見によって、ようやく日本の旧石器時代研究が始まるのですが――。

続く次回！

47、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その1」（後書き）

補足

もちろん、戦前、日本に旧石器時代があった、あるいはその可能性を模索していた学者さんはいました。ただ、学会の主流では「ない」という立場だったんですね！。

48、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その2」

さて、続きです。

戦前の日本考古学は旧石器時代をかたくなまでに否定していました。しかしながら、戦後間もなく、それを覆すような大発見があったというところで話が終わっています。

さて、それからどうなったのかといいますと――。

1949年。日本考古学史上、大発見がなされます。日本考古学上、存在しないとされていた旧石器時代の遺跡である岩宿遺跡が発掘されたのです。

その発掘にあたってはあるアマチュア学者さんの名前を出さなくてはなりませんまい。

あいざわ ただひろ

相沢忠洋さんです。

この方は元々考古学に興味を持ち合わせていたものの、諸事情により高等教育を受けることが出来ず、行商をしながら、行商で歩いている群馬県にて考古学の勉強をずっと続けていました。絵にかいたような苦勞人。そう思っ頂けるとイメージが当たります。

1946年、相沢さんは群馬県のある切り通しである石を拾います。興味ない人からすればそれはただの石でしたが、考古学の目から見ればそれは立派な石器、しかも日本には存在しないとされたはずの旧石器時代を想起させるものでした。

その価値に気付いた相沢さんは、東京は明治大学に石器の鑑定を頼みます。実はこれには裏話があります。普通アマチュアの学者さんはアマチュアサークルに参加して研究発表をするものなのですが、相沢さんはアマチュアサークルに入っていませんでした。いえ、正確には入らせてもらえなかったようです。戦後間もなくの当時、歴史の研究に精を出せるような一般人というと、やはりお金持ちばか

りだったのです。一方の相沢さんは地付きの方ではありませんでしたし、「行商人」と軽んじられている節がありました。なので相沢さんは地元のアマチュア学者さんたちを信用せず、東京のプロ学者さんの門を叩いたのです。

さて、その相沢さんと面会したのが、後に旧石器捏造問題において多大な影響を与える学者である、芹沢長介さんせいざわ ちやうすけという人でした。当時芹沢さんは縄文時代研究をしていた大学院生だったのですが、相沢さんの持ってきた石器を見せられた芹沢さんは「これは旧石器時代の遺物に違いない」と判断し、その旨を師でもある明治大学考古学研究室の助教授・杉原莊介さんすぎはら じゆうすけ（当時の弥生時代研究の権威であり、静岡県の登呂遺跡発掘の最高責任者として高名です）に報告します。そして杉原さんが肝煎りとなって、相沢さんの発見した切り通しの発掘がなされます。そしてその崖の旧石器時代の地層から遺物が発見されるに至り、「どうも日本にも旧石器時代があるらしい」となってきたのです。

と早回しに説明しましたが、ことはそんなに簡単ではありません。実は、この岩宿遺跡の発掘に絡み、色々なことが起きました。

一つに、明治大学の杉原さんはあまり発見者である相沢さんの功績を認めませんでした。杉原さんの理屈だと相沢さんはあくまで情報提供者であって「発見者」ではない、発見者は我々明治大学のクルーたちだ、という意識があるようだったのです。しかし、その態度は弟子である芹沢長介さんに失望を与えます。相沢さんの功績をありのままに認めむしろ相沢さんに同情的だった芹沢さんは、この岩宿発掘を境にして杉原さんとの間にしこりが生まれました。

また、当時の考古学界の反応も冷やかかなものでした。

最初に岩宿の発掘報告を行なった時には、学会は無視を決め込みました。発掘が進展しても尚、「そんなバカなことを信じるんじゃないぞ」と振れ回っていた学者もあつたと言います。「それ、縄文時代の打製石器なんじゃないの?」「土器は存在したんだけど、酸性土壌のせいで溶けちゃったんじゃないの?」というツツコミから、

暗に発掘技術の稚拙さまで取り沙汰されます。それも、幾年度にも渡る発掘報告書と研究の進展によって薄まっただけなのですが、当初の考古学会の反応はヒステリックであつたとさえ言えます。その洗礼をモロに浴びてしまったのが、岩宿遺跡の発掘責任者であつた杉原荘介さんだったので。

（なお、これ、あんまり大きく書けないんですが、岩宿遺跡発掘当時、ある高名な考古学者が杉原さんの遺跡宿舎に殴り込みをかけてきたという事件がありました。一説には、オート三輪をふかしながらやってきて、「君たち、こんなものは旧石器ではない！ 今すぐ発掘をやめたまえ！」と一喝したと伝わっています。まあ、この学者さん、日本考古学史において最重要とされる学者の一人ですが、なにぶんこういった“伝説”が多く、その功績と共に言動のエキセントリックさで知られた方なので、考古学にお詳しい方からすれば「さもありません」なネタなんです。ともかく、そんな事件があるほど、当時の旧石器時代研究は異端の研究だったんです。）

しかしながら、やがて杉原・芹沢両氏による旧石器時代研究が緻密化していくに従い、もはや「日本に旧石器時代が存在しない」という言説が成り立たない状況にまで至りました。こう言つてはなんですが、一例が見つければ、似たような方法論を用いれば二例目、三例目も出てきます。こうして、日本にも旧石器時代があつたんだということがあんなにかたくなだった学会の中でも承認されるに至ります（実を言いますと、それでもすぐにはコンセンサスが取れたわけではありませんでした。中には土器が存在しないだけで、実質は新石器時代だったのではないかと、言い出す研究者もありました。そういう人たちは、日本の旧石器時代を土器の存在しない時代、「先土器時代」と称呼しました。ちなみに杉原さんも、その姿勢を取るようになってゆきます）。

ともかくも、岩宿遺跡の発掘によって、日本にも旧石器時代が存在するのは確実視されることとなりました。

ところが、この発掘はさまざまな禍根を残しています。実はこの禍根によって日本の旧石器時代研究は少しずつ歪なものとなってゆき、最後には捏造を生んでしまうような空気を醸造してしまいました。

二人三脚で旧石器時代研究を進めていた杉原・芹沢両氏が、やがて袂を分かつ時が来ます。

そして、師である杉原さんと袂を分かち、一人立ちをした芹沢さんの御膝元で、あの発掘捏造問題が起こるのです。
というわけで。

続く次回！

48、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その2」（後書き）

ところで、「オート三輪で発掘現場にやってきた学者さん」というお話をさせていただきましたが、実はこれ、色んな因縁の結果でもあります。

その「オート三輪先生」は縄文時代の土器を並べて縄文時代の古さを仮定するという『型式論』の大家なのですが、芹沢長助さんは『炭素14法』という放射性炭素の半減期を利用した時代鑑定を導入したんです。そして、その二つの示す結果が食い違っていたために、二人は対立しています。

この「オート三輪先生」、後世から見ても笑える逸話やエキセントリックな言動などのおかげで考古学の世界では有名なのですが、それ以上に学問上の功績の方が多過ぎて（ちなみに、縄文土器についている文様が縄をこすりつけたものであることに気付いた最初の学者さんでもあります）未だに考古学の世界では神様扱いなので、あからさまにその人物像を楽しむことが出来ないというちょっと残念な学者さんでもあります。

49、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その3」

さて、前回、岩宿遺跡の発掘により日本にも旧石器時代があったんだということが判明しました、というところで終わっています。そして、その岩宿遺跡の発掘において、色々な禍根が生じたところまで説明させて頂きました。

では、これからどうなるかといいますと――。

日本において旧石器時代が承認されました。中には頑なにその存在を否定する人もいましたが、「縄文時代よりも前に縄文文化と異なる文化様態を持った時代が存在する」という方向で、日本考古学会でもコンセンサスが取れ始めたんですね。

そして、日本に旧石器時代が存在すると分かった後、考古学者たちの興味は「では、日本の旧石器時代はどこまで遡るのか？」が話題の中心となってゆきます。

もちろん、杉原莊介さん、芹沢長介さんのコンビもその命題に答えるべく、発掘を繰り返してゆきます。

しかしながら、この発掘のさなか、杉原さんと芹沢さんが袂を分かっ出来事が発生します。

「偽石器」問題です。

おさらいですが、旧石器時代に作られた打製石器は石を打ち欠いて作ったものと説明しました。磨製石器と比べるとはるかに素朴な作りなんです。しかも、時代が下っているならばまだしも、凄く古い時代となってくると、何回か打ち欠いただけで石器として使用されているものもあるんです。それだけ素朴なものとなってくると、人間が加工したものなのか、それとも自然に石が割れてしまっって石器っぽくなってしまっているのか分からないときがあります。そうして一見すると石器に見える石のことを「偽石器」と呼びます。

要は、凄く古い地層（前期旧石器時代の地層）から出てきてしまった石器のようなものに対して、杉原さんと芹沢さんの間で意見が割れたんです。杉原さんは「これは偽石器だろう」と考え、芹沢さんは「本物の石器だろう」と考えたのです。その後、杉原さんは「日本にはそこまで古い旧石器時代は存在しなかった」と主張するようになります。しかし、芹沢さんはその主張に反し「日本には古い時代の旧石器時代が存在する」と主張して、杉原さんと袂を分かってしまいました。

そして、杉原さんは「SUGIHARA'S HYPOTHESESを破ってほしい」という論文を発表します。その論旨をかいつまむと、日本に旧石器時代（先土器時代）と呼びうる時代が存在するのは確かだが、10万年以上前の日本はヒト科生物が生きていたような状況ではなかったのではないか、というものです。つまり、前期旧石器時代は日本には存在しないという主張をここに繰り返したわけです。そして、この論文が大体の考古学者の持つ日本の旧石器時代像となっていくます。そして、杉原さんと袂を分かった芹沢さんからすれば、この論文を破ることこそが終生の目標となっていくのです。

この事件をきっかけにして、前期旧石器時代研究は少しアバンギャルドな研究となってしまうました。確かに杉原さんの言う通り、比較的新しい時代の旧石器は出土が続いたものの古い時代の旧石器出土例はあまりなく、しかもそのほとんどに偽石器の疑いがあつたのです。なので、前期旧石器時代否定論者さんたちは、「その石器、偽石器じゃね？」と批判するのが常となりました。こうなると売り言葉に買い言葉、前期旧石器時代の研究者たちは、「外野が文句を言うんじゃない」とばかりに殻にこもるようになり、発掘された遺物を反対論者たちに閲覧させないようになっていきました。こうして、日本の前期旧石器時代研究は、外野から発言がしにくい研究分野となってしまうました。

さらに、考古学という学問はどうしても仲間意識の強い学問です。

皆で地面を掘り返して汗水を流す発掘作業がその中心的な研究アプローチとなる考古学にあつては、同じ飯を食った仲間のことを批判しにくい空気があるんです。批判するにはその研究グループから飛び出さなくてはならないくらいだったといえます。つまり厳しいことを言えば、閉鎖的な空気の上に自浄作用もなかったんですね。

その状態で登場したのが、あのゴッドハンド氏だったのです。

彼は芹沢長介さんを囲むアマチュア研究サークルの一員でした。が、体系的な考古学を学んでいなかったと言います。学問よりも、むしろ発掘という作業が好きでな方だったのでしょう。いえ、発掘作業は面白いんです。特に、重大な発見があつたりするとその雰囲気さがらりと変わり、作業効率まで変わってしまうくらい。

ゴッドハンド氏の真意は今となつては分かりませんが――。彼は古い地層に縄文時代の打製石器を仕込んで発掘するようになります。つまり、捏造に手を染めてしまいます。

そして、彼の捏造の裏には、芹沢長介さんの言葉がありました。芹沢さんはかねがね、「はやく前期旧石器時代の石器を発掘しろ」と周囲に漏らしていました。それが後押しとなつて、捏造に手を染めてしまったという見方もあるくらいです。

しかしながら、やはり前期旧石器時代の石器発掘について当初は批判もありました。「いや、この石器は縄文時代のものが混じっているだけじゃないの?」とか、暗に「アマチュアの仕事だから杜撰なんじゃないの?」という批判が出ます。しかし、それをゴッドハンド氏と芹沢さんはそれぞれに潰してゆきます。ゴッドハンド氏はゴッドハンド氏で、反対論者の管理している発掘現場に参加してやはり捏造をして古い地層から遺物を掘り起こして見せ、反対論者の口を塞いでゆきました。そして芹沢さんは芹沢さんで「出土層位は型式に優先する」という昔の考古学者の名言を引いてそれを絶対化したり(この言葉、つまりは“遺物の古さを考える時には出土地層を最優先に考えなさいよ”)という言葉なのですが、本来的には遺物

の外形により古さを鑑定する“型式論”にだけ依拠しちゃいけませんよ、という戒めの意味が強い言葉です）、「アマチュアだからといって杜撰な仕事をするわけがないだろう」と反論します。もしかすると、岩宿遺跡の発掘において杉原さんにすら認められなかった相沢忠洋さんの姿と、アマチュアながら偉大な“発見”を繰り返すゴッドハンド氏を重ねていたのかもしれませんが。この芹沢さんの援護射撃のおかげで（さらにいえば、前期旧石器時代は存在するという芹沢さんの主張の証拠として用いられる形で）、縄文時代の打製石器が「古い層位から出ているんだから古い石器なんだ！」と主張され前期旧石器時代の遺物とされてしまったのです。反論をしていた人々も、やがて反論のすべを失ってゆきます。

そして、この捏造が明るみに出たのです。しかも、考古学内部からの自浄ではなく、新聞記者によるすっぱ抜きという外部からの圧力によって。

変な話ですが、歴史の研究というのも遠くから眺めれば歴史です。そして、歴史となってしまう研究にも、やはり人間の息吹があります。もちろんこの例は到底許されるものではありませんが、筆者はどこか研究者という人たちの人間臭さのようなものを感じずにはいられません。

49、「旧石器捏造問題を語ろうではありませんか その3」（後書き）

補足

この『旧石器捏造問題』、ここに挙げた以外にも様々な問題が明るみに出てしまいました。紙面の都合上、考古学の研究史から見た問題点を挙げましたが、本当はもっと根深く面倒な問題が控えています。まーここからはマニアックな話になってしまうので、興味があるの向きは考古学者がものにした捏造問題関連本をお読み頂くことをお勧めいたします。

50、「なんで中世は分かりづらいのか」

はい、このエッセイも随分佳境になってきましたが、実はあんまり触れていない時代があることにお気づきでしょうか。

その一つが近現代。この頃は未だ日本国民の間で共通のイメージを創れていないので、どういったことを書いても反発を受ける恐れがあるがゆえにあえて書いていません。このおちゃらけですます体で描いていくには、あの近現代という時代はナーバスなのです。

けれど、筆者があえて踏み込んでいない時代がもう一つあります。中世です。

日本で言うと、源頼朝が幕府を開いてから豊臣秀吉が天下を統一するまでの間を指す時代区分です。が、実はあんまりよくその全体像が見えていない時代でもあります。逆にいえば、古代や近世が割と判りやすいんです。あとで書きますが、古代にせよ近世にせよ特定の権力構造によってある程度画一的に支配されている面が大いにあります。が、中世という時代はまさに奇奇怪怪の百鬼夜行状態です。

なぜこんなことになっているのか、説明させていただきます。

まずこれを語るには、奈良時代に施行されたある法について説明させていただかなくてはなりませんまい。

それまでの日本において、耕作地はすべて国のものでした。国が持っている土地を民に与えて耕作させ税を取る、という毛沢東もびっくりに社会主義的な政策を取っていたんです。これ、律令制っていいまして、中学校の歴史教科書にも太字で出るくらい大事なところですよ。覚えておきましょう。

が、この律令制にも限界がやってきます。あまりのシヨバ代の高さに農民が逃げてしまったんですね。で、困った当時の政府である朝廷は、「自分で開墾した土地だったら、三代までは自分の土地つ

てことにしちゃっていいよ！」と通告します。ただ、これもあんまりパンチが強くなかったのか、後に「自分の開墾した土地だったら、いつまでもあなたのものだからね！」という法律を作ります。これを墾田永年私財法といひまして、律令制の根幹である「土地の国家保有」を根底からひっくりかえすものとされています。

こうして、律令制度という分かりやすい制度が崩壊し、代わりに「荘園制」という面倒な制度が立ち上ってくるのです。

この「荘園制」というのが、中世をややこしいものになっている原因です。

そもそも荘園とは何かといいますと、簡単に言うと「墾田永年私財法で開墾された私有地」のことです。が、ことはそう簡単ではありません。

そもそも、土地の開墾っていうのは非常に労力を使います。変な話、誰も開墾していない土地を耕すためには色々な農具が必要で、し人員も必要です。裸一貫で開墾なんて到底できないんです。今も昔も、コンスタントに儲けることができるのは元々資産を持っている人と相場が決まっています。当時資産を持っている人たちというと、貴族と寺社が相場でした。もともと恵まれた特権階級である彼らはさらに自分の資産を増やしていきます。そして、このころ発生した武士の登場により、小さな土地開墾者たちが圧迫される時代がやってきます。そういう人たちは、土地名義を貴族や寺社に移して（寄進という形になります）、自分はその実質的な領主につく、といったことも増えてきます。かくして、どんどん貴族・寺社が太っていきます。……と、このようにして出来上がった貴族や寺社の私の領地を「荘園」といふんです。

が、ここで注意しなくてはならないのが、今まで通りに存在する土地です。ほら、墾田永年私財法には「開拓地についてはその所有を認める」とあります。つまり、それまでに開墾されていなかった土地についてはやはり国が管理していたんです。

つまりこの時代、国が管理していた領地と、寺社や貴族が管理し

ていた荘園が並び立っていたんです。

この時点で分かりづらいのは必定なんですが、さらに分かりづらくなります。

源頼朝ら武家勢力が、この荘園や国家領に少しずつちよっかいを出すようになります。

具体的には、地頭の設置です。

地頭とは何かといいますと、これ、荘園を管理している実質的な領主とほぼイコールの存在です。荘園をもっている貴族や寺社は自分では荘園管理をせず、その土地の元の持ち主に管理させていたんですが、その管理者の選任を鎌倉幕府が行えるようにしたんです。

さらに、地頭は国家領にまで設置されます。つまり、地方の土地や税を管理している中間管理職の多くに鎌倉幕府の息のかかったものがつくようになったのです。実は、公家勢力が歴史が下るにつれ弱まっていくのは、この中間管理職である地頭の存在が挙げられます。

また、地頭と同時に設置された守護という職もまた、当時の土地政策に多大な影響をもたらします。元々守護は地頭の監督をする程度の役職でしたが、やがて時代が下るにつれその権力を大にします。やがて、臨時に作物を徴収してもいい権利や地頭たちの調停を出来る権利を付与されるに至り、やがて守護の権威が高まっていきます。やがて守護たちは地頭たちを自らの支配下に入れ、守護を中心とした権力体制が出来上がります。というのが、守護大名から戦国大名あたりの権力史です。

が、ここで注意しなくてはならないのは、この段階に至っても荘園・国家領が存続しているという事実です。実質的な荘園領主や国家領の名目的管理者である国司の言うことを聞かない地頭も多かったのですが、一方でずっとそれら旧来の権威に従っていた荘園もいるのです。そんなわけで、実は戦国時代の末期になってもなお、寺社や貴族がそれなりに荘園を保持して権威を保っていましたし、戦国大名たちは荘園や他の大名の領地を奪って版図を拡大していたの

です。

そして、そういった荘園が廃止されるのは、豊臣秀吉による太閤検地まで待つ必要がありました。

お分かりでしょうか。中世という時代は土地制度が統一されていなかったのです。地域によってばらつきがありすぎて、一概に語る事が出来ないんです。そしてその一概に語る事の出来ないという性格が地域間の格差を生み、バラエティ豊かな地域性を生み出しているのです。

けれどそれって裏を返せば難しいということでもあるんですね。画一的な決まりが存在しないために、今一つ後世の歴史家が位置づけを定めることができないのです。が、スタジオジブリの映画「もののけ姫」のようにその地域間格差を利用した創作物も登場しているので、一概に難しいと言い切ってしまうのももったいないような時代のように思えますねえ。

51、「原形をとどめていませんよね？」

意外に思われることかもしれませんが、何物も当初に与えられた役割を忘れがちなものです。以前のチャプターで、自分の役割を忘れてしまってもなおなんとなく存在し続けている「ゲシュタルト崩壊を起こしたもたち」を紹介させていただきましたが、今回のお話はそれによく似ています。

当初の役割を忘れてしまうのは、何も物だけではありません。実は人間が属する組織というのも、気づけばその役割を忘れてしまい、全く別の文脈で理解されることもあるのです。

というか、世の中の組織は大概がそうやって別の文脈によって理解されて現代に至っています。

アメリカで大統領や要人を護衛する役職であるシークレットサービスという組織があります。「見せる警護」によって一躍世界でも知られ、レーガン大統領が銃撃された際にも身を盾にして大統領を守り大統領の命を救ったことでも知られている組織です。実はこの人たちが元は偽札の摘発に当たっていたというのは池上さんの説明によってご存知の方も多からうかと思えます。

でもこれ、アメリカに限った事じゃありません。

日本の組織だってそういったことが起こっています。

有名どころを上げましょう。

征夷大將軍がまさにその典型です。

征夷大將軍というのは日本独自の職（令外官）です。中国には大將軍という職や、北將軍などのように方面を指揮する將軍はいましたが、“夷を打ち払う”という目的の職は存在しませんでした。どういうことかというと、白村江の敗北以来すっかり自信を無くしてひきこもった日本には、基本的に打ち払うべき存在がいなかったの

です。が、奈良から平安時代になってくると、東北地方に住んでいたアイヌたちとの軋轢が生じるようになり、アイヌを討伐するための役職として新設されたのが征夷大將軍という官職なのです。

もちろん、アイヌを討伐するために征夷大將軍に任命された人も多いのですが、やがてこの職は別の利用のされ方を始めます。

その使い方の初例が源頼朝です。

つまるところ、武士社会のトップに君臨する人物が征夷大將軍の位を与えられる、という風に征夷大將軍位が運用されるようになります。最終的には幕府の首班としての位として定着し、なんとそれが二百年前まで続く制度となっていたのです。

なお、これは大いなる余談ですが、幕末期になって征夷大將軍という肩書が將軍たちを悩ませるようになります。どういうことかという、幕末期になって諸外国がやってくるようになり、外国人への反発から尊王攘夷運動が起こった時に、「征夷大將軍とは元々夷狄を打ち払うために任命されている官職なのに、今の征夷大將軍は打ち払うべき異国に対しておもねっているではないか！　なんたる弱腰だ！」という風に、開国に舵を切っていた幕府を批判する材料になっていたりします。

まあそれはともあれ（上の例は、揚げ足取りに近いものがあるのでもともとは異グループを打ち払うだけの地方官だったものが、気づけば実質的に日本の政治を行なうに至ったのです）。

あと有名どころですと、江戸町奉行所たちの役人が挙げられます。江戸町奉行所の役人である与力や同心というと、普段は黒の羽織に着流し一丁、いなせな細髭を結い十手を袖に忍ばせて、町を歩いている人たちです。現在でいえば警察官兼裁判官をやっていた、江戸の治安維持にかかわる役職でした。

が、彼らは当初、元々は別の仕事をしていました。

町奉行所の役人さんに限らず、徳川幕府内の役職というのは、元々は軍役でした。つまりは、戦国時代には軍隊の中で特定の役割を

与えられていた人たちが、のちに平和になり手が空いてしまったがために別の仕事を割り当てられている、そういう例が結構多いのです。

では、町奉行所の役人たちのご先祖が何をしていたのかというところ――。

実は、鉄砲を撃っていました。

つまりですね、（いろいろな意味で乱暴なことを言ってしまうが）町奉行所の役人たちのご先祖さんたちは、長篠の戦で武田騎馬軍を撃ち落としていた人たちだったんです。

戦争時には一定の価値が置かれた彼らですが、戦いが終わり平和な時代がやってくるとその価値が薄れました。皆が武器を櫃に収めるようになった頃、鉄砲屋さんたちも自分の武器を捨てて、やがて江戸の治安維持にあたる人員として存続して至るのです。でも実は町奉行所が元々鉄砲を扱っていた役職だったという名残は随所に残っています。たとえば、町奉行所の玄関を上がると、正面に立てかけられた鉄砲が並んでいるさまを見ることができたそうです。つまり戦時にはこれで戦うぜ！ という自己主張をしていたんですね。

あとマニアックなところだと出雲国造いづみこくぞうを挙げることができます。

以前も書いた気がしますが、出雲国（現代の島根県）には大化の改新より前に存在する地方官である国造こくぞう・くわのきみが残っていて、しかもそれを中央の朝廷が認めていたという歴史があります。もちろん最初は出雲国を治めるまさに国造だったのですが、時代が下るにつれてその権力を失っていき、最後には出雲大社の神主さんに収まります。が、それでも出雲国造という肩書は名乗り続けています。そう、国造制度ってなにも大化の改新でなくなっただけではなく、実は現代にも残っている制度なのです。

なぜこんなことが起こるのかというと、ポストを新設するのが面倒だからです。

変な話、ポストを新設するのはいろんな意味で覚悟が要ります。予算を確保しなくてはなりませんし、そもそも名前を決めるという面倒な作業も控えています。また、組織においてどういう位置に置くかを考えるのも面倒です。だったら手の空いている人たちを組織ごとそのまま横滑りさせてしまったほうがはるかに楽なのです。かくして、元は偽札摘発を行っていた人々がボディガードをするようになったのですし、かつては鉄砲を撃っていた人たちが気づけば泥棒や辻斬りなどを追う警察官になっていたりするのです。

51、「原形をとどめていませんよね?」（後書き）

注：出雲国造について

普通、国造は「こくぞう」と読むのですが、出雲国造は「こくそつ」と読み慣わしています。

また、出雲国造はかなり特殊な立場だったようで、朝廷とも長らく儀礼上の関係を結んでいます。かなり謎だらけなお方なのです。なお、今でも出雲国造さんはいらっしゃいます。出雲国造さんの家は出雲大社の脇にあり、出雲駅伝の際にはテレビにも映りますのでご興味のあらせられる向きは是非とも。

52、「あなただって歴史上の人物である」

これを書いているのは、実は2011年の3月です。

2011年の12月末頃にUP予定になっていたこのエッセイをお読みの皆様は、2011年3月に起こった大災害を覚えていらつしやると思います。そう。東日本大震災です。宮城県沖で発生したマグニチュード9の大地震とそれに伴う津波被害、さらに発生した原子力発電所の事故。これを書いている現在、福島原子力発電所は予断を許さない状況です。3/19現在、自衛隊や消防まで出勤する形で炉への放水作業が続いていますし、どうやらすっかり死んでしまっている冷却水の循環ポンプへの通電作業も並行して進めている、という状況のようです。

この段階で既に死者数が阪神大震災を超え、日本における戦後最大級の大災害となっている見通しです。

筆者もまた、この地震の影響を受けています。

書き手を離れた“私”にも当然生業があるのですが、その生業がちょっと特殊なものであるために、その復旧作業に追われています。“私”の住む地域はさほど揺れなかったのですが、小さな揺れでもやはりさまざまな支障が出るものなのです。その復旧や原子力発電所停止によって行われた計画停電への対応のために、職場に詰める日々が続きました。が、ようやくそれも落ち着いてきて、計画停電の時間を避けながらこれを書いています。

はたして、2011年の12月、日本はどうなっているのでしょうか？ 毎年のように、渋谷ではクリスマスイルミネーションがきらびやかに光っているのでしょうか。それとも、2011年3月のように、明かりさえ満足に点らない日々を過ごしているのでしょうか。

これを書いている筆者は、その答えを知りません。

そして、これをお読みの貴方様は、その答えをご存知です。

これまで筆者、歴史についてずっと書いてきました。が、つい言い残したままできていることがあります。大事なこと、自明なことゆえに言葉にするのが野暮なのですが、言わなくてはならないことが残っています。

それはなにか。

飾らず自然体に申し上げましょう。

歴史というのは畢竟、昨日の積み重ねであると。

歴史は遠い昔の出来事に流れを見出し、その流れに名前をつけることによって成立している学問です。歴史を少し離れたところで眺めながら、「あ、ここで少し流れが変化しましたね」と歴史家が流れの変化を読み取ってマーキングすることで歴史という学問は成立しています。

が、その流れは離れて見ないと見えづらいものです。

人間がその日一日に出来ることは限られています。近くで見てもうと、人間の活動は淀んだもののようにさえ思えるのです。

が、少し離れて見れば、そこに流れがあることに気づかされます。たとえば、皆さん、家のまわりに建築中の建物、ありませんか？ 数か月前は基礎の工事をしていたところが、気づけば上棟していたり、壁が仕上がっていたり、あるいは庭なんかが整備されてほとんど完成している、なんてことがありますよね？

けれど、その日行われている工事を張り付いてみても、さして変化を感じないことがあります。それはそうです。家を建てるという作業は色んな職人さんが力を合わせて作り上げている作業で、そのすべてが完了しないことには家は完成しません。その日一日を眺めただけで劇的な変化を遂げるはずがありません。

これは歴史にも言えることです。

歴史の流れというのは、この世界に息づいている皆さん、自然環境、文化のありよう、その他さまざまな要素が絡まり合うことによって形作られるものなのです。

けれど、歴史というマクロを支えているのは、まぎれもなく我々ミクロの存在です。

2011年3月現在、被災を受けられながら避難生活をしている皆さんも、被災者の救援を行っている皆さんも、原子力発電所の冷却作業を必死で行っている皆さんも、募金活動をtwitterで呼びかけている人も、この機に乗じて自らの差別意識や政治的な主張を流言に乗せている人も、内閣総理大臣も官房長官も、領土問題でとてつもない失言をしてしまった政治家も、覚せい剤取締法に問われながら嫌疑不十分で釈放された元グラビアアイドルさんも、某大学入試でカンニングをしてしまった学生さんも。そして、計画停電を避け、普段使っているファンヒータを止めて足元に湯たんぽを置いてこうやってつまらない文章を書いている筆者も。歴史というダイナミズムから見ればミクロの存在にすぎません。が、歴史というのは我々ミクロの存在である一人一人が前に進んだり前に進んでいる人の足を引っ張ったり、あるいは全然関係ない方向に顔を向けたり、そっぽを向いている人を注意したり、それをはねのけたりしながら成立しています。

要は綱引きなのかもしれません。

「やるぞ!」と思っている人、「やりたくない」と思っている人、「どうでもいい」と思っている人。その三者の配分によって歴史は定まっている。そのようにも思えます。

そして、歴史という大局から見ればミクロのように見える我々ですが、我々もまた、2011年3月の時代を生きた一人の歴史上の人物なのです。

そして、口さがない歴史家によって、評価される日が来るのかも知れないのです。

ここからは説教臭くなってしまうのであまり書きたくはないのですが――。

昔は「お天道様がすべてを見ている」とか「誰も見ていなくても自分が見ている」という言葉が自らを戒める言葉でした。が、お天道様が信じられなくなり、個人主義の進展によって自由意思が尊重されるようになった現代、それら自戒の言葉の効力は弱まっています。

だからこそ、筆者は言いたいのです。

お天道様は見えていないし、自分のことは忘れてしまうことができず。けれど、はるか遠くから歴史を眺めている歴史家という人たちの目から逃れることができない、と。

だからこそ、困難な選択が目の前に現れた時には、ちょっと立ち止まって考えてみていただきたいのです。——というのが、2011年3月の時を生きている、一歴史上の人物の私見です。

あとがき「学問を修めるといふこと」

このあとがき、主に就学中の若い方向けのものとなっております。もちろん就学を終えた方がお読みいただいても結構ですが、もしかすると冗長なものになっているかもしれないので、途中で面倒になったら即バックしてください。

筆者、既に学生時代を終え社会人として日本経済、世界経済を微力ながらも支える一員となっています。いえ、別にそんなことを鼻にかけて学生さんたちに偉ぶるつもりはさらさらありません。変な話、筆者だって。。（残酷な数字が入っているため、筆者の精神衛生の観点から伏字とさせていただきます）年昔には学生をやっていたんです。今学生をされている皆さんだって、そのうち放っておけば社会人になるんです。何が言いたいのかというと、筆者のようにのらりくらりと生活していてもやがて社会人という役割が両肩に乗っかってくるんですから、あんまり社会人なんて肩書だけで威張れませんよ、というお話です。

そして、社会人として過ごしてきて、筆者は学問を修めていてよかった、そう思うことがあります。そして、WEBの片隅で自己実現の一環として小説を書いている身としても、学問を修めておいてよかったと思うことが多いのです。

学問というのはそもそもなんでしょう。

その根源的な問いにはいろいろな意見がありでしょうが、あえて筆者の私見を書かせていただくと、「世の中に存在する事象をあるルールに則って理解する知的な営み」とでもなります。たとえば物理学という学問は、様々な実験の積み重ねによって発見されたニュートン物理学や相対性理論、量子力学といった法則に従ってこの世の中にあふれている事象を説明づける学問です。経済学というの

は、目の前で起こっている経済的事象に名前を付けて、どういう風に経済を操っていけば滞りなく世界を動かすことができるか、という思考実験です。

世の中を渡っていくに当たり、必要になるものはたくさんあります。一つのことにはしがみつくガッツもそうでしょう。広範に意見を聞く謙虚さもそうでしょう。時には膝を屈して自分の意見を殺すことも、世の中を渡っていくためには必要とされているものかもしれません。けれど、何より必要なものは「分析する力」だと思います。

目の前に広がる実情。その実情を変えていくためには何より今の状態を把握しなくてはなりません。なぜ現状が自分にとって好ましくないのか、なぜ自分は失敗してしまったのか、新規事業を成そうというときに考えられるリスクは何か。こういったことは誰も教えてくれません。自分で考え、実践していくしか手がありません。

実は、「自分で考える」ことって大事であると同時に基本的なことでもあるのです。

そして、自分で何かを分析しようという段になったときになって初めて、「学問」という物差しが役に立つのです。

たとえば新規事業に手を出そうと企画を練っているとき。このとき、法学の方面からは「。。法に抵触する可能性、リスクがあるが、このように回避することもできる」という知見を得ることができるかもしれません。経営学の方面からは「こういう経営スタイルではいつか自滅するので、別の企業スタイルを模索すべき」という知見が手に入るかもしれません。そして、歴史の方面からは、「これまでの日本ではこういう業態の企業はバッシングにあってきたから、そういう面を表にしないように経営したほうがいいんじゃないか」というような知見が手に入るかもしれません。

学問を修めるということは、つまりは「新たな視点」を手に入れることと同義です。

目の前のものを分析するにあたり、学問というのはその人の知見

を多角的にします。

そして、創作をしている人にとって多角的な視点はなくてはならないものです。変な話、創作物というのは普通の人たちが正面から見ているものを眺めて、「いや、これって横から見たり後ろから見るとすつごく面白いんだぜ？」と自分の視点の置き場所、ひいては自身を自慢する行為という一面があります。面白い着眼点、アクロバティックな視点設定がそのままその作者さんの作風になっていることさえあります。作家にとって、「面白い視点」というのはそのまレゾンデートルま存在理由になりうる要素なのです。

作家にとって大きな武器になる視点。これを手に入れる方法の一つに、「学問を修める」という方法があるのです。さつきもお話した通り、学問はあるルールに立脚した視点づくりです。そうやって意識的に「視点」をつくる訓練をすること。これ、実は作家にとっては大したことなんです。

このエッセイ、実は歴史エッセイであると同時に、「学問を修めてみませんか？」というエッセイなんです。

たまたま筆者が歴史学という因業な学問を修めていたために歴史エッセイになってしまいました。もし筆者が修めていたのが経済学だったら、きっとこのエッセイは「行け行け進め！ 経済バカ！」となっていたはずですし、もし筆者の修めていた学問が生物学だったなら、「行け行け進め！ 生物バカ！」となっていたのです。

何を修めてもいいと思うんです。けれど、一介の歴史バカとしては、是非とも皆さんに歴史を修めていただきたいなと思っています。

何も大学で歴史を専攻しろとはいいません。今、非実学系の学問を修めるとあまり就職率が良くないとも言いますし。でも、これから大学に行かれる方、もしかすると大学の講義の中に歴史を教えるくれるカリキュラムがあるかもしれません。その時は、冷やかしの

つもりでもいいので覗いてみてください。もしかすると面白い発見があるかもしれません。そしてその発見が、今後の貴方を支える重要なものになるかもしれません。

というのは、一歴史バカの切なる願いであり、ちょっとしたおせっかいです。

さてさて、今日をもちまして「行け行け進め！ 歴史バカ！」は最終回になります。

前回のエッセイでも同じようなことを書きましたが、やっぱり書き残し感は否めません。歴史という学問を語るにおいて、一年はあまりにも短いなあと思うことしきりです。今こうして書いてきたものを振り返ってみると、「あーあれも書いてない！」「あーあれを書くのを忘れた！」「ってか外国史なんてガン無視じゃねえか」と一人ツツコミをしている今日この頃です。

が、（これも前回にも書きましたが）小説には必ず終わりがあり、小説家という属性をまとっている人間は自分の紡いでいる創作物にいつかピリオドをつける義務を負っています。既に読者様の目に触れているテキストは特にです。

筆者、戯作者を名乗ってはおりますが、やはり皆様から見ればアマチュア小説家の端くれ。やはり小説家の義務に従わなくてはなりません。それに、ただだらと続けてしまうと自分の中でさえ飽きが生まれてしまうでしょう。そうなる前にピリオドを打つのも大事なことです。

ということで、これにて「行け行け進め！ 歴史バカ！」は最終回です。

皆様のご健康、心安らかなることを祈念しまして、本エッセイの結びとさせていただきます。

遠い東北の空を思いながら

アマチュア戯作者

谷津矢車

独行道

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8406p/>

行け行け進め！ 歴史バカ！

2011年12月25日09時47分発行